569-142
1200700367047

改造文庫

第二部　第百二十三篇

菊池寛全集（第九篇）

新珠

菊池寛著

改造社出版

改造文庫
第二部　第百二十三篇

新珠

菊池寛　著

改造社出版

篇長

新

珠

569
142

I 種
W

1200700367047

遺作展覽會

記憶のよい讀者は、まだ覺えて居らるゝかも知れない。大正×年の秋に死んだ篠崎靜湖と云ふ日本畫の大家を。また少しでも、美術に興味を持つて居られる方は、此の人が描いた作品の評判を、新聞などで讀まれたこともあるだらうと思ふ。

『二羽の鷲』『俠妓圖』『寒山拾得圖』『ある日の太閤』『金剛山十二景』などの傑作はその製作當時、素晴らしい世評を捲き起したものだつた。明治時代の巨匠狩野芳崖の門弟で、青年時代は、可なり不遇であつたが、第一回の文部省展覽會に出品して、二等賞には入つて以來、忽ち大名を博して、第四回の文展には、早くも審査員に擧げられ、死ぬ二年前の大正×年には、帝室技藝員の榮譽をさへ重ねてゐた。

美術院派、美術學校派などゝは又別に、自分一家の畫風を持つてゐた人で、日本畫の精髄を傳へて新奇を追はず、それかと云つて古人の糟粕を嘗めてゐるのでなく、その見識にも手法にも時代とは不卽不離の新味を持つてゐたので、美術界の識者からは、先づ畏敬せられてゐたと云つてもよかつた。そして、人格が立派なのと、藝術家肌の奔濶濶達とが、その名聲を裏付けたので、一時は篠崎靜湖と云へば、畫壇の第一人者たるの概があり、大戰當時の美術界全盛期には、靜湖の作品は、尺五の絹本

で、着色に少し手が込んでゐれば、市價一千圓と云ふ、素晴らしい呼値をさへ持つてゐた。

一時は、執筆を依頼する書畫屋や、美術愛好家が、門前市を成すと云ふ有樣で、執筆を依頼する場合に置いて行く前金の額丈でも、積りつもつて、七萬圓餘に上つたと云ふ噂が傳へられたほどだつた。

若い時に苦勞をした人間が、晩年になつて意外な幸福に巡り合ひ、豐かな收入がは入つて來ると、若い時の苦勞で、金の有難味が分つてゐる丈に、堅實な貯蓄一方に傾くものが多いが、濶達な靜湖は若い時の苦勞を、氣にしなかつたと同じやうに、晩年の富貴をそんなに有難いとは思つてゐないらしかつた。彼は、金があれば、あるに從つて散じた。困つてゐる美術學生とか、不遇な友人知己など云ふものには、殆んど制限なしに施與した。彼は、產を治めようとは決してしなかつた。たゞ住宅丈は人に勸められるまゝに、駒込に廣大な地面があつたのを買つて、壯麗な建築を試みた。檜造りの純日本風の邸宅で、主人の豪放な趣味を發揮した樣式や裝飾は、美術家仲間には、駒込御殿と蔭で呼ばれてゐるほど、立派だつた。

彼は、その邸宅から、一町ばかり隔つた電車通に在つた下宿屋を買ひ取つて、其處を彼の畫塾にした。駒込橋行の電車に乘ると、神明町の停留所の少し手前の右側に、靜觀畫塾と云ふ看板がかゝつてゐた筈である。

この畫塾のためにも、靜湖は可なり財を投じた。塾生の中でも、金のある者ならば、實費を取つたが、それでも一ヶ月の費用が三百圓以下のことは稀だつた。

靜湖が死ぬ前には、もう美術界には不景氣の風が吹き捲くつてゐた。執筆を頼んで前金を置いて行つた美術商が、今度は『繪がお出來にならないのなら、いつか差上げて置きました金子の方を……。へゝ……大變な不景氣で、どうも……』と、云つた風に、取返しに來るものが多かつた。一時は、飛ぶ鳥を落す程の人氣があつた、京都の竹林栖虎畫伯も、さうした前金取返しに惱まされてゐると云ふ噂だつた。靜湖の、堅實雄健な畫風は、それほど人氣の消長には、弄ばれはしなかつた。その上、靜湖の人格に、多少の怖れを感じてゐる書畫屋は、靜湖に丈、前金取返しと云つたやうな非禮を云つて來る者はなかつた。

が、靜湖の牧人は、メキ〳〵と減つたことは事實だつた。

前金を携へて依頼に來るやうな者は、もう一人もなかつた。その年の文展に出品した『梅林三趣』さへ、世評はかまびすしかつたにも拘らず、到頭賣れずに了つた。靜湖の作品と云へば、文句なしに引き取つてゐた横濱の豪商山本寅太郎氏が、沒落したことも『梅林三趣』が、賣れなかつた一の原因だつた。

そんな譯で、靜湖の豪奢な生活は、彼が死ぬ前に破綻に瀕してゐた。豪放な彼は、そんなことは、テンで氣にしてゐなかつた。そして、豪酒を浴びるやうに飲みながら、腦溢血で突然死んでしまつたのである。

かうした豪放な、家事を顧みない主人に突然死なれたときほど、遺族が困ることはない。いかに靜湖が、豪放なればとて、せい〳〵五日でも十日でも病んで死んだのなら、死床で少しは家族の行末

も考へて、自分の死後の生活の大體の方針位は、殘して行つたであらう。が、靜湖の妻の俊子が、靜湖の呻き聲らしいものを聞いて駈け付けて行つた時には、夫はいつも書見に疲れたときに、寢ころがろやうな恰好で、机の上に仰向けに倒れたまゝで、眼を白黑させてゐたのである。

靜湖の死は、遺族に取つて、樂しい夢の半に、蒲團から引きずり落されたやうなものであつた。それでも、妻の俊子がもう少し、しつかりしてゐたならば、夫の生活の締くゝり位は付けることが出來たのだが、俊子はそれほど賢い女ではなかつた。

靜湖は、不遇の青年時代に、落魄のどん底に落ちてゐたことがあるが、その當時、彼は一時柳橋の藝者屋に食客をしてゐたことがある。それは、その藝者屋の主人のお鯉と云ふのが、柳橋で鳴らしてゐた俠妓で、その頃代地河岸の陋屋に病んでゐた靜湖の窮狀を憫れんで、自分の家へ引き取つたのである。靜湖は、その家で二年ばかり玉祝儀の帳面を付けたり、たまには箱屋の手傳などをして、日を暮してゐる裡に、お鯉の實妹で、半玉に出てゐたおとしと戀に落ちたのである。

靜湖の優れた人格と才能とを、いくらか理解してゐたらしいお鯉は、それと知るとまだ勤に出て間もなく、從つて身體も淸淨であつたおとしを退かして、靜湖に添はして呉れたのである。そして、それ以來の貧乏生活にも、お鯉は影になり日向になり、妹夫婦を助けて呉れたのである。だから、情にもろい靜湖は、一生お鯉の恩を感じてゐた。彼が、文展の第二回に出品して一世の世評を沸き立させた『俠妓圖』と云ふのは、このお鯉の美しかりし昔の面影を描いたもので、一つの線にも靜湖の感激が溢れてゐた丈に、何の奇もなき楚々たる『麗人圖』が、縹渺たる神韻を漾はしてゐたのである。

靜湖が、孰らかと云へば、悍婦であるおとしの氣隨わが儘を、一生涯辛棒してゐたのも、一は彼女の姉に對する謝恩の微衷に外ならなかつた。

お鯉を、あゝした商賣の女の中で、一番賢明な利發な婦人と云ふならば、おとしは主婦としての女の中で、先づ愚かな蒙昧な女と云つてもよからう。若い時の夫の貧乏を、兎に角辛棒したのが、彼女の唯一の手柄で、夫が世に出てからの彼女の生活には、何の思慮も分別もなかつた。夫は家事を顧みないのだから、彼女はそれ丈注意して、一家の家計を切り盛りして行くべき筈だのに、彼女は夫がやりつ放しの暮しをすれば、自分も負けず劣らず、やりつ放しな華美な生活をした。夫が金放れがよければ、妻も金放れがよかつた。その上、藝者屋に育つて浪費の習慣が、第二の天性になつてゐた丈、夫の收入が增すと同時に、貧乏時代には、ひそんでゐたその天性が、時を得顏に、彼女の生活を支配した。

兩端から燃えてゐる蠟燭は、忽ち燃え盡くしてしまふだらう。靜湖の豪放に、おとしの放縱、篠崎家に產が興らう筈はなかつた。駒込御殿などゝ傳へられてゐた榮華は、表面丈で、靜湖が死んだときの篠崎家の資產は、慘憺たるものだつた。おとしは、今更のやうに驚いて、資產の整理をして見た。夫が、何時の間に買つたのか、日本石油の株が百株ばかりと、長女の名前になつてゐる三菱銀行の定期豫金が、五千圓ある丈だつた。石油の株は、時價一萬圓もしなかつた。その上驚いたことには、執筆依賴の前金を、そのまゝ銀行に預けてあつたのを、夫は何時の間に融通したのか、まだ三萬圓ばかりは在つた筈の金が、一文もなくなつてゐるのであつた。夫が生きてゐさへすれば、さう云ふ書債は

一枚描き二枚描き、いつの間にか、片付いてしまふのだが、夫が亡くなつた今は、三萬圓以上の大金をまとめて、それ〴〵の依頼者に返金しなければならないのだつた。おとしが、夢の覺めたるが如く茫然としてしまつたのも無理ではなかつた。そればかりではない、靜湖は、丁度婚期前の、これから金のかゝらうと云ふ妙齡の娘を、三人まで殘して逝つたのである。

姉は二十二、次が歳子の二十一、末の娘が十八だつた。

若し、靜湖がもつと家庭を顧み、子女の將來を思ふ父親だつたら、またおとしが、もつと思慮のある女親だつたら、長女丈位は、もう結婚してゐてもよいのだつた。靜湖は、別に養子をして、家を嗣がさうと云ふやうな肚はなかつたから、二三年前から、時々あつた長女の緣談の、どれか一つはもつと眞劍に進つて行つてもよかつたのだが、兩親とも苦勞性でなく、その上母のおとしは、美しい娘を傍に置いて、何時までも、引つぱり廻したいと云ふやうな心もあつて、つい外へ出すのを惜しんでゐたのであつた。

が、夫に死なれて見ると、おとしは三人の娘を抱へて忽ち世の中が、暗くなつたやうな氣がした。相談に乘つて呉れるやうな弟子がないでもなかつた。松村靜風、岡田靜村、片山湖舟など、みんな亡き師匠を慕ふ忠實な弟子だつた。が、いづれもまだ基礎の堅くない青年畫家で、師匠の一家を引き受けて、生活を保證して呉れるほどの位地も力も持つてゐなかつた。

親類は、二三軒あつたが、孰れも靜湖の生前、その世話にばかりなつてゐた連中で、何の力にもならないばかりか、アハよくば、遺品分と云つたやうな名目で、靜湖からの最後の恩惠に與らうと狙つ

てゐる者さへゐた。

が、兎に角、住んでゐる邸宅を賣つて、畫債を拂ふと云ふことは、第一の急務だつた。そして畫債を拂つたその殘りで、一家が愼しく暮して、娘達の良緣を待つと云ふことが、靜湖未亡人の採るべき生活の唯一の方針だつた。

家は、賣りに出された。が、七萬圓に近い賣値の大邸宅は、暴風のやうに襲來しようとする不景氣を前にしては、容易に買手が付かなかつた。

遺族達は、父が亡くなつて、急に廣く寂しくなつたやうな大邸宅の裡に、不安な味氣ないその日その日を暮してゐた。美しい三人の娘があるために、常住不斷の花が咲いてゐるやうに賑かだつた家庭は、一朝父の喪に閉ざされて、しゅん〳〵淋しい黃昏のやうな空氣に滿たされてしまつた。

出入する客の數までが、急に減つてしまつた。靜湖は來客好きで、酒が飲める客が來ると、朝からでも酒を出す、饗應好きで、從つて客の絶間がなかつたが、今では弟子や馴染の畫畫屋などが時々顏を出す丈で、父の生前の賑かな生活に馴れてゐた娘達は、世の中が、一時にヒツソリしたやうな氣がした。

華美好きな未亡人のおとしまでが、ぼんやり氣の拔けた風にしてゐる時などもあつた。

さうした一家の不安や寂しさを、見兼ねたのは門弟達だつた。一には、遺族を慰安し、二には令孃方の婚資の一部をも作りたいと云つたやうな、殊勝な目的で計畫したのが、『靜湖遺作展覽會』だつた。それを出入の畫畫屋達に相談した。畫畫屋達は、半分は商賣、半分は好意で、乘氣になつた。『靜

湖もの』を澤山藏してゐる書畫屋は、この機會に『靜湖もの』の市價を煽らうとした。だが、それは肚の中で、表面は賣上の一割丈は、篠崎家に寄附すると云ふ奇特な申出をした。門弟達は、門弟達で、みんな自信のある作品數點を出品して、賣れゝば、賣上金は凡て故先生の遺族に贈呈すると云ふことになつてゐた。

會期は、靜湖が死んだ翌年の春の四月一日から五日間、會場は日本橋の精華倶樂部であつた。

靜湖の作品は、十二三點ばかり篠崎家に殘つてゐた。大抵は、一寸した依頼に應じて描いた尺五や尺八の小品で、氣に入らないで、そのまゝ筥底に殘して置いたものが多かつたが、その中に例の一代の傑作と云はれる『俠妓圖』や去年の文展に出品した『梅林三趣』などもあつた。『俠妓圖』を除いた作品は、みなそれ〴〵の賣價が附せられた。が、『俠妓圖』丈は、數年前亡くなつたおとしの姉の記念であり、靜湖が一代の傑作であるので、非賣品と書いた赤い符が附せられる筈だつた。

おとしや三人の娘達の、沈み果てゝゐた心は、かうした催しで、いくらか慰められた。その上吉報はまゝ續いて來るもので、三月の末になつて、家の買手が附いた。五萬五千圓と云ふ云ひ値よりは隨分缺けた相場であつたけれども、だん〳〵募つて行く不景氣の最中としては、よい買手だつた。おとしは、ホッと安心したけれども、住み馴れた大邸宅が、もう直ぐ自分の家でなくなると云ふことは可なり寂しい事だつた。

三人姉妹

「姉さん達！　まあだ？」

さう云つて、爛子は、姉達二人が、着物を着替へてゐる部屋へ、は入つて來た。

姉妹の中では、一番無雜作で、お化粧に手數をかけない彼女は、こんな場合いつでも、最先に支度が出來上るのだつた。薄紫の瀧縞の錦紗の着物に、崩え出づる若草の、ほのかな綠を染め出したやうな、淡い水色の羽織を着た彼女のスラリとした身體は、女性の初々しい若さその物の化身のやうに、見る人々の心を、若やがさずにはゐなかつた。顏立は亡き父によく似てゐた。たゞ黑い眸が、あまりに澄み過ぎてゐるので、ぢつと見詰めてゐると、其處にある美しい凄味が閃めいた。こんな話はもとより冗談だが、三人の姉妹の中で、誰が一番發狂する可能性があるかと訊かれたら、何人もが直ぐ爛子だと答へ得るほど、彼女の眼は凄艶だつた。天才と狂人とは、何處か似たところがあると云ふが、父の靜湖の天才的性質の片鱗が、爛子の肉體に一番多く傳へられたのだらう。彼女の眸には、姉達には見られない輝きがあつた。

直ぐ次の姉の都は、大きい　姿見（ルツキンググラス）の前で、ルミエール式の白木蓮の花を散らした羽二重の帶を締めようとしてゐた。

「丁度いゝとこ。爛子さん！　一寸手を貸して頂戴よ。」

彼女は帶を二重に折りながら、妹の方を振り返つた。

妹よりも、もつと華美な顏立だつた。妹の細面に比べると、少し丸顏だつたが、それ丈ハイカラで當世風で、衣裳も三つ年下の妹と、孰らが質素だか分らないほど華美だつた。薄紫色の羽織

の錦紗には、細い銀線が斜に幾條も亂れてゐた。

「え。もう少し、もつと引つぱつて。あゝもういゝわ。」

爛子は、姉の後に寄り添つて、帶の姿を直した。

「ねえ、お姉様。私達も、來る方に挨拶しなければならないのでせうか。」

爛子は、都の帶から手を放しながら、もう一つの姿見の前で、緋縮緬のしぼりの長襦袢を着了へて、その上に絣の結城を着ようとしてゐる一番上の姉の瞳に話しかけた。

「御挨拶なんか入るものですか。受附には松村さんや片山さんがゐらつしやるのでせう。私達は知つてゐる方に丈、御挨拶すればいゝんだわ。」

姉は、次の妹と一つ違ひなどゝは、誰にも受取れないやうに、素質だつた。たゞさへ、素質な結城であるのに、その絣がキチンと揃つてこそ居れ、あまり大きいものではなかつた。その上に着た紋附は、變り色ではあつたけれども、孰らかと云へば黒に近く、どう見ても結婚前の二十二とは見えなかつた。髪は、妹の爛子も都も、七三に分けてゐるのに、瞳丈はおとなしい束髪だつた。

瞳、都、爛子、父の靜湖は生れた女の子供に、月並な名前を附けるのを厭うて、みんな奇拔な名前を附けた。三番目の爛子には、無學なおとしでさへ、抗議を申し込んだ。

「らん子なんて、らんは亂暴とか、亂痴氣など云ふ亂ぢやないの。」

「いや、その亂ぢやないよ。俺も、その亂と云ふ字を附けたいのだがな。御一新頃に、九州に高場亂と云ふ女傑がゐたもんだ。高場亂！　いゝ名ぢやないか。俺も、その亂が附けたいのだがな、大きく

なつて當人が嫌ふといけないから爛にしたのだ。爛は、櫻花爛漫の爛ぢや、どうだ！　壯大で華やかな名ぢやらう。」

「まあ、いやなお父様。こんな名前を附けようものなら、大きくなつて、どんなお轉婆になるか分らないわ。」

靜湖夫妻の間には、爛子が誕生のお七夜に、こんな會話が取り交はされた。それでもまだ爛子は、子が附いてゐる丈に、女にきまつてゐたが、姉の瞳や都は、字で讀まれるときは、屢々男に間違へられた。また都は、お友達などからさへ、大抵宮子だと思はれ、いつかも、

「貴女のお名前は『金色夜叉』の女主人公と同じね。」と、人に云はれて、まごついたこともあつた。

鏡に映つてゐる姉の瞳の顏は、三人の姉妹の裡では、一番古い顏であつた。古いと云つて、決してそれを惡い意味に使つてゐるのではない。この頃になつて、非常に殖えて來た大正風の美人とは、まるで違つて、昔の浮世繪の歌麿とか淸長などの、名畫工が描いた美人繪の面影が、大正の今まで、生き殘つてゐるとでも云ふべき瓜實顏だつた。宜なり、彼女のスッと通つた鼻梁や、令孃としては粹すぎる口元などには、母方の血筋が――長い間洗練され、洗練された生粹の江戸美人の血が、流れてゐるのであつた。

三人の支度が整ふと間もなく、賴んで置いた自動車が玄關前のゆるい勾配を、徐々に背進して來た。茶の間に坐つてゐたおとしは、娘達を送るために出て來た。瞳の羽織の襟を、一寸直しながら、

「お前達は、一寸顏出しすればいゝんだからね。午頃に歸つておいで、おしまひまで、居なくてもい

ゝんだから。」と、娘達に注意を與へた。

「ぢや行つて參ります。」

姉妹は、銘々に母に挨拶して、晴着の裾を氣にしながら自動車に乘つた。

見送つてゐた母は、三人が三人とも、それ〴〵に美しい、何處と云つて、非の打ちどころのない、娘達の着飾つた姿を見ることを、どんなに嬉しいと思つたかも知れない。彼女は、今迄はこの娘達を娘の思ふまゝに、また自分の思ふまゝに着飾らせることが、何よりの樂しみだつたが、父が亡くなつた今は、かうして着てゐるやうな晴着も、もう思ふまゝには新調出來ない。娘達が持つてゐる衣類なども、出來る丈大事に、華美なものはどん〳〵着させ、質素なものは、なるべく殘して置かなければならないなどゝ考へ出すと、今までは夢にも知らなかつたわびしさが、胸を衝いて來て、娘達の後姿まで寂しいものに思はれた。

「ねえ。ひとみ姉さん！　もう、このお家から自動車でなんか出かけるのは、これがおしまひかも知れないわね。」

爛子は無邪氣な深い意味もなしに、眞中に腰かけてゐる大きい姉に話しかけた。

「さうね。」姉は、さう云つたまゝ默つてしまつた。

彼等の家は、もう人手に渡つてゐた。一昨日母と、父の門弟の松村靜風とが一緒に本鄕の區役所へ行つて、登記を濟ませ、金を受け取つたことを、姉妹達は知つてゐた。

妹の言葉を聞くと、三人の中で、一番快活な都でさへ默つてしまつた。

瞳は、一番姉丈に、父なき後の行末の、生活の不安が急に胸に浮んで、忽ち心が暗くなつてしまつたのである。彼女は、姉妹の中では、一番繪心があり、一時は父の靜湖さへ繪を習はせようとしたのを、母のおとしが、大反對で、

「大切な娘を女畫工などにしてどうするんです。」

と、おジヤンになつてしまつたのが、今の彼女は母のさうした無思慮が、可なり恨まれた。あの時から、繪筆に親しんで居れば、ずつと父の薫陶を受けることが出來たし、今頃は相當な手腕を養つて居たかも知れないのに。が、そんなことを殘念がつても仕樣がない、今だつて遲くはない。今から始めたつて、心掛一つで父の名を辱しめるとも定まつてゐない、姉である自分は、どうかして自立して妹達のために盡してやりたい！　やらねばならぬ！　……そんな風なことを取止めもなく考へてゐた。

二番目の都は、父が在世當時の樂しかつた日を思つてゐた。文展の招待日には、屹度姉妹三人が、母に連れられて朝早くから會場へ行つた。審査員篠崎靜湖氏の美しい令嬢達、美しい三人姉妹、それは、この二三年文展の招待日の景物の一にさへ數へられた。招待日の模樣を報道する新聞記事の上には、名士や貴婦人の名前を擧げた後に、「靜湖畫伯の美しい令嬢達も、父君の作品の前をうれしさうに徘徊してゐた。」と云つたやうな文句が、きつと目に付いた。名譽ある審査員の娘として、若い美術家や美術學生達の讃美に輝く眸を意識しながら、稚い孔雀のやうに立ち廻つたその日の思ひ出。

それは、中斷した夢のやうに二度と巡り合ふ事はないのだつた。今日、三人がどんなに美しく着飾

つて行つても、何うして文展の招待日のやうな、華々しいことがあらう。名前さへ寂しい遺作展覽會！　父の名前丈に依つて開かれるもの丈に、親しいものゝ、それ丈に寂しかつた。何だか悲しかつた。父の葬式の延長としか思へなかつた。

爛子丈は、全然別のことを考へてゐた。彼女はまだ跡見女學校に通つてゐた。父の死んだことから受けた打擊が、姉達ほど胸にひゞかなかつた。快活な明るい學校生活で、父に別れた悲しみなどは大抵まぎれてしまつた。

今日は、父の遺作展覽會の歸途に、三越へ立ち寄つて、この間お友達の樋口さんがしてゐたやうなスカーフが、あるか何うか見よう……。

姉妹三人の思ひ〳〵の想をのせたまゝ、自動車は廣い駒込の通を、追分に出で、一高の時計臺を左に見、アスファルトの修繕をしてゐるために狹くなつてゐる大學前の道路を徐行し、本郷三丁目から薬世橋に出て、日本橋の通に出た。交叉點を少し過ぎて、精華倶樂部のある上槇町の方へ、曲らうとする時だつた。爛子は、目ざとく左側の人道を通つてゐる一人の青年を見付けた。

「あら！　都姉さん！　菅さんよ。御覽なさい！　あんなに澄ましてゐるわ。」

都は、一寸顔をあかめて、妹に指された方向を見た。

美術學校の制服を着た長身の青年は、人道を大股に濶歩してゐるのだつた。今日の展覽會の事務係なのだが、何か用事があつて、使に出たと見え、右手に何か買物を提げてゐる。

自動車は、一瞬の裡にその青年を追ひ越した。姉達とさし向ひに坐つてゐる爛子には、尙しばらく

青年の姿が見えた。

「あゝ氣が付かない。氣が付かない！　あゝ到頭氣が付かない！」

爛子が、さう蓮葉に叫んだとき、自動車は、鋭く右にカーヴして、二十間ばかり走つたかと、思ふと、精華倶樂部の前に、ぴつたりと止まつてゐた。

麗人圖

靜湖の遺作展覽會は、可なり世間の注意を惹いた。「靜湖もの」を澤山持つてゐる書畫屋が、人氣を煽つた點もあつたが、もう一つは各新聞の美術記者が、非常な好意を見せて呉れたためだつた。

靜湖は、奔放濶達で、少しく畫論が違ふと、どんな大家でも、面前で手嚴しくやつ付けたりした爲めに、同じ審査員仲間などでは、烟たがられてゐたが、その反對に貧乏な美術記者などには親切で同情があり、困つてゐる者などには、半折の一枚位は、どん〳〵描いてやつたので、美術記者仲間では丁度政界の大隈侯と云つたやうな華やかな人氣があつた。かうした靜湖から多少とも恩惠を受けてゐる記者達は、故人に對する好意の見せじまひとでも思つたのだらう、各新聞は、筆を揃へて故人の人格作風をたゝへ、門下生達が故師を追慕する志を、賞讃したのだつた。中には、故人の未亡人が、三人の娘を抱へて、生活の不安に襲はれかけてゐるので、それを救濟する意味も含まれてゐるなどゝ穿つた報道をしたものもあつた。

姉妹が、精華倶樂部の玄關に立つた時には、會場の内部は招待客で、ザツと一杯であつた。

「よくいらつしやいました。大變な景氣ですよ。」

受附をしてゐた岡田靜村と云ふ畫家が、瞳に低くさゝやいた。

三人は、門下の畫學生達に輕く會釋しながら、事務室へは入つた。其處は、日本室を西洋室に改造したやうな、扉に障子と云つた取り合はせのチグハグな室だつた。其處には、靜觀畫塾の塾生達が、六人も詰めかけてゐた。片山湖舟と云ふ、門下の中では一番年長の畫家が、机の前に腰をかけて、忙しさうに帳簿を繰つてゐた。

「あゝ先刻から待つてたのです。休憩室に接待係がゐなくつて困つてゐたのです。」

若い時は、靜湖の家の玄關に居たので、姉妹達には、少しも遠慮がなかつた。

「お茶のお給仕？　えゝいゝわ。」

爛子は、もうその氣になり、隣の休憩室をそつとのぞきに行くのだつた。

「思つたよりも好景氣ですよ。先刻、平澤伯や、近藤さんなんかも見えてゐましたよ。先生のものなんか、もう五點も賣約になりましたよ。我々のものも、三點ばかり賣れました。」

湖舟は嬉しさうに、報告した。

「本當に貴方がたの御盡力のおかげですわ。」

瞳は、勸められる椅子に腰かけながら、姉らしい口を利いた。

「いゝえ、何うしまして、皆先生の藝術の力ですよ。死せる孔明生ける仲達を走らすぢやなくて死せる先生生ける門弟を引き立てるで、我々の作品が賣れるなんて、全く先生のお蔭ですよ。貴女も、一

廻り見ていらつしやい。かう一まとめにして見ると、先生の藝術の偉大さに、今更のやうに打たれますよ。」

湖舟の云つてゐることは、決して瞳や都を前にしてのお座なりやお世辭ではなかつた。彼は門下の中でも、第一の熱狂的な靜湖崇拜家で、又師匠思ひであつた。瞳は、純眞な湖舟の亡き父に對する讃嘆を聞いてゐると、人の心が何となく賴もしく思はれると同時に、亡き父が一際懷しく思はれ出したので、妹達がお盆にお茶碗をいくつも載せて、應接室の方へ持つて行く後姿を見送りながら、自分一人會場を一廻りしてくるつもりで、立ち上つた。

會場は、階段を上つた二階の大廣間だつた。周圍がスツカリ硝子戸になつてゐる明るい三百疊も敷けると思ふ部屋で、その長い部屋を幾つにも敷きるやうに、薄綠色の布の壁が出來てゐ、それに父の遺作が、略年代順に、展覽されてゐるのだつた。

もう今では、名家や富豪の所藏になつてゐる作品までが、この催しのために、一時一緒に蒐められてゐるので、瞳は亡き父の一代の作品を、……代表的な傑作を、一時に見られるのだと思ふと、繪が解るだけに瞳の心は、ある感激でときめいて來るのだつた。

初期の作品には、父にもこんな拙い時代があつたのかと思はれるほど、たど〳〵しい手法の製作も二つ三つ眼に付いたが、父の氣品、畫面に輝いてゐる父の氣稟と云つたやうなものは、どんな初期の作品にも現はれて、父が凡庸の作家でないことを示してゐた。

時代が進むにつれて、瞳にも見覺えがある作品が多くなつて行く。父が、第一回の文部省展覽會に

出品し、二等賞を得て、父の大名を築く礎になつたと云ふ『二羽の鷲』の前に來たとき、瞳はあまりの懷しさに惹き付けられたやうに、その作品の前に立ち止つてしまつた。

この作品は、その時の會場から直ぐ細川侯爵家へ買取られたので、瞳も寫眞で見た丈で、現物を見るのはこれが最初だつた。

むろん、彼女もその作品は幾度も見たには違ひないのだが、物心の十分付いてゐなかつた彼女は、直ぐ忘れてしまつたと見える。たゞ父や母から聞いた挿話があるために、この作品が彼女には堪らなくなつかしいのだつた。

『二羽の鷲』を描いてゐた當時は、靜湖はまだ〳〵友染模樣か何かを描く內職をしながら、小石川表町の裏通に住んでゐた。八疊に六疊に玄關と云ふ小さい平家だつた。瞳が五歲だつたから、もう、姉妹は三人とも生れてゐた。

靜湖は、泣いたり、だゞをこねたり、騷ぎ廻る子供達をさけながら、狹い家で二尙一雙の大屏風の大作をやつてゐた。一方の畫面では、一羽の鷲が、その鋭い嘴を、掌中に摑んでゐる小さい兎に、向けようとしてゐ、他方の畫面では、他の一羽の鷲が、今虛空からサツと岩角へ翔け降りた所で、鋭い羽音が、看る者の耳に聞えるかと思はれるほど、颯爽たる作品だつた。が、この作品が九分通りまで、出來上つた頃だつた。ある日、父の靜湖が外出し、母が爛子を背負うて、幼い姉妹二人を殘し一寸近所まで醬油を買ひに出かけた留守だつた。姉の瞳は、何と思つたのか、其處に出しぱなしにしてあつた父の畫筆を取ると、ツカ〳〵と部屋の壁に立てかけられてある『二羽の鷲』の繪に近よると兎

を睨んでゐる猛鷲の鋭い眼のあたりを、ベタ〳〵と墨で塗りつぶしてしまつたのだつた。

母が歸り父が歸つてからの騷動は、狹い家の中が、ひつくり覆るほどだつた。

「ほんたうに、あの時位驚いたことはないわ。お父さんがあんなに周章てたことは、後にも先きにもないわね。」

母が、一つ話に述懷するほど、瞳の惡戯は父を困らしたのだつた。出品締切りは、三日の裡に迫つてゐた。利かぬ氣の父は、その畫布ど裂いて捨てると、直ぐ新しい製作にかゝつた。そして、一睡もしないで、三日の後に仕上げたのだ。出來上つたものには、父の障害に出會つて、更に撓まぬ藝術的勇猛心が現はれたと見えて、兎を啄まうとする鷲は更に一段の鋭さを示してゐた。

その繪が、父に光榮と富貴とを持つて來たのだつた。

「かうして見ると、瞳がおいたをしたのが緣喜がよかつたのですわねえ。瞳！　これからせいぐおいたをするんですよ。」

その繪が賣れて、千圓と云ふ、その時代には、素晴らしい大金がは入つたとき、おとしは、それを神棚に供へながら、緣側で瞳を遊ばせてゐた夫の方を見返つて言つたものだつた。

瞳は、その繪の前に立つてゐると、幼年時代の自分の面影や父の姿が、また一家の生活が髣髴として浮んで來るやうな氣がして、昔なつかしく、父なつかしく、目頭があたゝかく、うるんで來るのを感じた。

「お馬にお姉ちやまが乘つてゐる繪」と片言交りに後まで長く覺えてゐた繪は、今見ると「王照君」

と云ふ畫題で、實業界で有名な、澁田男爵家の所藏になつてゐた。

看て行く裡に、瞳は觀覽者の濃い塊にぶつつかつて、前へ進めなくなつた。少し背伸びして人の頭ごしに見ると、それは外でもない、自分の家にあるので、時々見たことのある父の傑作「俠妓圖」であつた。死んだ柳橋の伯母を、モデルにしたと聞いてゐるので、外のどの作品より、なつかしい筈なのだが、いつも見られるもの丈に、こんな人中で、見る必要はないものだつた。が、踵を廻さうとする瞳の耳に、色々な批評が聞えて來るので、廻さうとした瞳の足は、思はずたゆたつたのである。

「なるほど、靜湖一代の傑作だな。」

長髮の美術學生らしいのが、聲高に言ふと、それを受けたやうに、

「さうですな。かうした氣品は、現代の作家にはありませんな。」

「と云つて、昔の浮世繪の作家にもありませんな。現代の美人繪なんて、俗受け一方の、いやに美しいものばかりだが、靜湖のものは、やつぱり違つてゐるな。」

長髮の學生は、しきりに靜湖讃美論をしてゐるのであつた。

「これは、多分明治二十年頃の藝妓風俗ですよ。髷の形などが古風でいゝぢやありませんか。靜湖は若い時藝者屋か何かの食客をしてゐたと云ひますから、昔の藝妓の風俗などには、くはしいのでせう。」

美術研究家らしい紳士が、連れの豪家の主人らしい老人に教へてゐた。

「篠崎家所藏。非賣品か。」

老人は目錄を低い聲で讀んでゐた。

「ね。君似てゐるね、この顏は。」

「誰に？」

瞳の背後で、不意に若い美術學生達の無遠慮な聲がした。

「ホラ！　靜湖氏の三人姉妹の一番上の令孃にさ。」

瞳は何か惡いことをしてゐる現場を、見付けられたやうに、顏はパッと熱くなつた。急に人込みを掻き分けて、其處を去つたが、階下へ降りる階段の處へ來たときにさへ、まだ胸がわく〳〵動いてゐた。

事務室へ歸つて見ると、妹達二人と先刻自動車から見かけた菅秀三とがゐた。

菅は、父と同鄕である廣島縣のある富豪の息子で、美術學校へは入ると同時に、靜觀畫塾へは入つて靜湖の薫陶を受けてゐるのだつた。が、天分も豐だつたし、志操も堅實であつたので、靜湖からも可成り將來を期待されてゐた。

靜觀畫塾の學生達に取つては、先生の美しい三人の娘が、文展の推薦特選よりも、もつと問題であつたが、菅秀三などは、誰よりも先に、立派な人選候補者であることは、皆から許されてゐた。その裡に第二番目の娘の都と秀三との間に、戀愛に似た感情が、日に增し生長してゐるのだつた。

休憩室のお給仕には、小さい小娘が來てゐるので、もう暇になつてゐるらしい嬶子は、姉の姿を見ると言つた。

「お姉様、繪を見ていらしつたの。」
「えゝさう。湖舟さんは。」
「今向うで、午のお辨當を食べてゐらつしやるの。朝早くから働きつゞけに働いたので、お腹が空いたのですつてほほゝ。」
姉妹達は、笑つた、湖舟の喰しんぼうは、昔姉妹達の笑ひの種だつた。
「お姉様、御飯は如何？」都が聞いた。
「さうね。私なんだか、ほしくはないわ。貴方達ほしかつたら……」
「湖舟さんぢやないけれども、私達もお腹が空いてゐるのよ。お姉様。私達こんな處で食べるのは、いやだから、菅さんに三越の食堂へ連れて行つて貰つたらいけない？」
爛子は、いつもの我儘を、こんな處でも發揮するのだつた。
「えゝいゝわ、だけど、一度お父様の繪を見て行つたら、何う？　こんな時に見ないと、一生見られないものもあるのだから。」
さう言はれると、父の遺作よりも、三越で買はうとしてゐるスカーフのことを、より重大に考へてゐた爛子は忽ち悄氣て默つてしまつた。都はそれを取り做すやうに言つた。
「ぢや、繪を一通り見てから行きませうね、菅さん、貴方もう一度繪を見ない？」
「えゝ見ますとも、何度でも見ますよ。僕が案内して、説明してあげませう。」
さう言つて、三人は連れ立つて、室を出た。元氣な三人に出て行かれると、瞳はやはり寂しかつ

た。自分も、一緒に三越へ行くと言へばよかつたにと思つたけれども、少しでも長く父の遺作展覽會の空氣の中にゐて、父をなつかしんでゐる方が、今の場合の自分の心持に、かなつてゐると思つたので、瞳は事務室の留守居になつたつもりで、湖舟の坐つてゐた机の前の椅子に腰を下した。何だか、急に女事務員にでもなつたやうな氣がして、をかしかつた。
「御免なさい！」
凛とした聲がした。瞳が、周章てゝ立ち上ると、入口の扉を排して、一人の青年紳士が、は入つて來た。
「賣約を願ひたいのですがね。」
瞳はあまりの突然に『はい』と云ふ返事の聲が出なかつた。
「あの私では、一寸分りかねますのですけれども、番號は何番でございませうか。」
瞳の眞白な顔は、上氣して、美しく輝いて見えた。
「十二番と、十六番とですがね。」
瞳は、かすかに顫へる手で、目錄を探つて見た。一方が五百圓で、一方が三百五十圓だつた。
「たしか、内金は、二割以上差し上げて置けば、よかつたですね。」
青年紳士は、鞣革の財布を取り出すと、眞新しい十圓札を机の上に並べた。
「一寸、お調べ下さい。」
生れて初めて、他人から金錢を受取る瞳の手は、一生懸命に制してもふるへた。胸が、何物かに壓

されるやうに苦しかつた。湖舟が、早く歸つて來ないのが、恨めしかつた。

それでも、彼女は一生懸命の努力で、賣約契約證に、金貳百圓と書いた。

「お所とお名前は。」瞳は、精一杯の力で訊いた。

彼は、一旦しまひかけた財布を取り出して、中から一葉の名刺を机の上に置いた。この時漸く、瞳の心に落着きが歸つて來、相手の顏を眞面に見ることが出來た。

黑い頭髮を、オールバックにした二十六七の眉目も秀麗の青年であつた。

瞳には、その名刺の活字が踊つてゐるかのやうに、容易に目には入らなかつた。

やつとの事で、麹町上六番丁子爵堀田義輔と書いてあるのが分つた。

堀田義輔！　それは、瞳も二三度新聞で見た名前である。華族出の青年洋畫家として、二三年前、文展に入選した時など、各新聞が盛んに書き立てたことがある。

繪の理解ある人に、殊に畑違ひではあるけれども、同じ畫家に、買ひ取られると云ふことは、亡き父に取つても、本懷に違ひない。さう思ふと、瞳の心は、混亂からだん〳〵感謝と感激とに變つてゐた。

賣約契約書は、漸く出來上つた、瞳の手蹟は、友達仲間で、評判であるほど美しかつた。

その書付を手に取りながら、青年紳士は突然言つた。

「失禮ですが、先生のお孃樣ぢやございませんか。」

「はい！」瞳は顏を眞赤にして答へた。

「失禮ですが、僕も先生に傾倒してゐた一人です。御遺作をかうしてまとめて拜見すると、更にさうした感じが強められますね。あの『俠妓圖』と云ふのは、お宅の御所藏のやうですね。」

「はい！　さやうでございます。」

「あれは絶對にお讓りにならないものでせうか。」

青年の眼は、傑作に對する讃美で燃えてゐるやうに見えた。

「どうでございますか。母が、何と思つてゐますか。」瞳は實際さう答へるより外はなかつた。

「なるほどね。それでは、それは改めて伺ふとして。あゝどうも失禮しました。」

さう答へると、青年は叮嚀に會釋して、サツサと室外へ出てしまつた。

その後の瞳の心の、うれしいやうな怖ろしいやうな動搖は、しばらくの間、どうしても止らなかつた。

春あわたゞし

遺作展覽會は、申分のない成功で終つた。篠崎家に藏してゐた靜湖の遺作は、大抵賣れてしまつた。一萬圓近い收入が、未亡人の心を、前よりはいくらか心强くした。

が、遺作展覽會が終つて、四五日すると、前よりは、一倍も二倍もの寂しさが、母子四人の心を襲つて來た。遺作展覽會の華やかさは、消えんとした燈火が、一時にパツと燃え盛つたやうな華やかさに過ぎなかつたのだ。深夜の街を歩くものが、その寂しさに堪へかねて、歌など口ずさむと、その後

で却つて、寂しさがほげしく身に迫るやうに、人爲的に篠崎家を賑かさうとした催しが終ると、却つて大風の吹き過ぎた後のやうに、一家は氣が拔けたやうな物寂しさに沈んでしまつた。

が、さうした寂しさの他の大きな原因は、一家がその月中に、住み馴れた家を、引きはねばならぬと云ふことだつた。人間は、住居が變ると云ふことに就ては、只でさへ不安や動搖を感ずるものだ。まして父が豪奢の跡たる邸宅を人手に委ねて、小さい家に移つて行くと云ふことは、見得や外聞に囚はれ易い女心にとつては、悲しい情ない事に違ひなかつた。

同じ移轉にしても、家賃の低い家から、段々高い家に越して行くことは、取も直さずその人が人世の昇り坂にあることを示すもので、移轉その者が、一の嬉しい仕事になるのだが、高い家賃の家からだん〳〵低い家を求めて越して行くことは、何となく身が零落て行くやうに感ぜられて、決して快よい事ではないのだが、まして駒込御殿など〻人の噂にも上つた大邸宅を、人手に委ねて、借屋住居に身を落さうといふのは、平家の都落ちなど〻は、比べ物にならないにしても生活悲劇の一だと云つて差支なからう。殊に、榮華に馴れた虛榮好きの未亡人に取つては、身の皮を剝がれるやうに辛かつた。

四月一杯に家を明け渡さねばならぬ。そんなことを考へると、生活が寂しい上に、慌だしくなつて來て、母子とも少しも落着けないのであつた。もう、そろ〳〵移轉の準備もしなければならなかつた。廣い家には、道具類が充ち滿ちてゐた。殊に亡き靜湖の、藝術家らしい趣味から、調度類は立派な高價なものばかりであつた。姉妹達も總桐の箪笥を始め、もう直ぐ嫁入りの道具にしてもいゝやうな衣

裝や調度を持つてゐた。どうせ、狹い家に移るには定まつてゐるにしても、未亡人の心では道具類などは、一品だつて賣拂ひたくはないのだつた。さうした品物を、暇がある毎に荷造りと云ふほどではなかつたが、移轉の用意に整理した。車に積むばかりになつた膳椀の箱だとか火鉢だとか、書畫骨董の箱だとかゞ、座敷の片隅や緣側などに、置かれるやうになつてゐた。そして、家の中を愈々落着かないものにした。

移轉して行く家に就ては、多くの門弟達が、總がゝりで搜してゐた。が、借屋難の世の中とて恰好の家は容易に見付からなかつた。家族に女中二人で、あまり體裁も惡くなく、それで家賃が百圓前後と云ふのであつたから、さう容易く見付かる譯はなかつた。終ひに、新聞のよろず案內などにまで廣告して、遍く探し求めたが、家は偶々あつても、大森や澁谷などの郊外で、爛子の通學には可なり不便だつた。

その內に、日が經つて、邸內の櫻樹が燎爛として、咲き亂れる頃になつた。庭は、ある西國大名の邸跡の一部であつた丈に、東京市內には、容易に見られないほど、林泉の美に富んでゐた。殊に、泉水に掩ひかゝつた一本の枝垂櫻は、亡き靜湖の遺愛の品で、幾千條と亂れ下つてゐる枝が、一杯の花を附けて、春光の裡ににほつてゐる風情は、天地の春が、此の一樹の枝頭に集まつたかとさへ疑はれるほどだつた。父が、在世の折は、邸內の櫻が咲くと、靜觀畫塾の園遊會が開かれる定めで、姉妹達は、模擬店の女中になつて、門弟達の讚美の眼を、一杯に浴びながら、おでんの串を配つたり、いなり壽司を皿に盛つたりしたものだが、それもこれも、もう今は悲しい思ひ出になつてしまつてゐた。

靜觀畫塾、篠崎家の運命を頒つて、もう今月一杯で、解散される筈になつてゐた。

花が咲いても、今年の花は、みんな喪章が附いてゐるやうに、姉妹達の眼に映つた。花丈が、咲き亂れて人氣の少い家は、却つて無氣味に寂しいものだつた。

越して行く家は、容易に見付からなかつた。十二三日頃になつて、これまでもう幾つも家を見付けて來た湖舟が、根よく幾番目かの家を見付けて來た。それは雜司ヶ谷の墓地の近くにある家だつた。男手のない家庭には、寂し過ぎたが、間數や家賃が丁度恰好なので、未亡人も瞳と一緒に見に行つてから、どうやら、その家に定めようかと決心し、五十圓丈手付を置いて歸つたのであつた。

假に、引き越して行く家が、定まつてからは、移轉の準備は、ます〳〵進んだ。門弟達が、毎日のやうに甲斐々々しく出入りして、道具類の荷造りをして呉れた。春が、あわたゞしく暮れて行くのと共に、篠崎一家の榮華の春も、だん〳〵終りに近づきかけてゐるのであつた。

姉妹達は、まだ年が若く、銘々虹のやうな、美しい望みを、心の裡に貯へてゐるので、住み馴れた家を出る位は、そんなに悲しみもしなかつたが、未亡人の俊子は、一番物質的であつた丈小さい家に引き移ると云ふことが境遇の落目を、まざ〳〵現はしてゐることなので、一番悲しく情ないと見えて姉妹達を捕へて、愚痴を言ふことさへ度重なつた。

四月の十二日だつた。この邸を賣るときに、仲介には入つて呉れた精美堂と云ふ書畫屋の主人がひよつくりやつて來た。遺作展覽會の噂から、よもやまの世間話をした末に、云ひ憎さうに言つた。

「時に奥樣、お引越しは、何時頃になりますでせうか。」

「さうね。もう引越して行く家は、定まつてゐるのだけれど、いろ〳〵準備があるから、二十日頃になるかしら。」

「さやうで。」

若いのに、頭の薄くなりかけた精美堂の主人は、何か當惑したやうに、神經質の青白い顏を暫く俯むけてゐたが、

「ねえ。奥さん、大變申し上げにくい事があるんですがね。住田男爵が、昨夕突然大阪から、御家族連れで出ていらつしやつたのですがね。」

住田男爵と云ふのは、この邸の買主である大阪の大實業家であつた。そして、この邸は住田家の東京に於ける別宅になる筈なのだ。

未亡人は、住田男爵の名を聞くと、明渡しの催促をされると思つたのだらう。急に、顏の色を曇らせてしまつた。

「はあ。それが、何うしたと云ふの。」

語調は、優しかつたが、俠斜の巷に育つた傳法肌のきかぬ氣が、直ぐ鼻の先へ出かゝるのであつた。

「それでね。その、夫人とお孃さんとがね、是非お庭を御覽になりたいと仰しやるのですがね。是非花の咲いてゐる裡に、有名な庭を見たいとかう仰しやるのですがね。まだ、此方がお住ひになつてゐる裡に、拜見を願ふのは大變失禮だが、一寸丈でいゝからと、かう仰しやるのですがね。」

精美堂の主人は、未亡人の氣質を知つてゐるので、雷霆を含んだ雲の下をでも通るやうに、オヅオ

ッ話し出すのであつた。未亡人は、家の明渡しを迫られるより、もつと侮辱を感じた。

「さうね。どうせもう、私達の家ぢやないんだから、その御挨拶には、及ばない位だわね、どうぞ、御自由にと、さう言つてお呉れでない。いづれ、その時は私達は、お目觸りにならないやうに、差し控へて居ますからつてねえ。おほゝゝゝゝゝゝゝ。」

未亡人は、事もなげに笑つたが、その言葉に、鋭い皮肉が、針のやうに含まれて居た。精美堂の主人は、薄い毛の頭を掻きながら、恐縮した。

「奥様に、さう言はれると、此方はどうも、一言もないんですがね。何しろ、相手が分らず屋で、御存じの通り、あの男爵夫人と來たら、大阪でも有名な、家付のお轉婆と來てゐるのでせう。どうぞ、仲に立つた私に免じて、御勘辨を願ひます。」

未亡人は、心の裡に口惜しさを抑へて、もう何も言はなかつた。

翌る日の午後門前に、けたゝましい警笛の音がしたかと思ふと、青色に塗つた大型の自動車が、門の前にぴつたりと寄せられた。そして、一番に降りた精美堂の主人が、玄關へ來て、住田男爵夫人を案内して來たと云ふ斷りを言つた。

都は、お友達と、音樂會へ行つたので、未亡人は二人の娘と一緒に、茶の間にゐた。未亡人は直ぐ爛子に庭に面した障子を、閉めさせた。が、障子には、小さく劃ぎつて、硝子がは入つてゐたので、内部からは庭の様子が見られた。精美堂の主人は、頭をペコ〳〵させて、先に立つてゐた。その後から、男爵夫人だらう、丁度未亡人と同じ年頃の、でつぷりとした恰幅の、鷹揚と云ふよりも、むしろ

尊大な貴婦人が、つゞいてゐた。その後に、二人の令嬢と女中とが、續いた。令嬢は、丁度都と爛子位の年恰好であつた。大石内藏之助の赤穗城明渡し、そんなに大きく考へなくても、自分の家が、人手に渡り、未だ此方が住んでゐるのに、もう新しい持主が、わが物顔に、庭を見に來る。しかも、その相手が、自分と同じ年頃で、その上同じ年頃の娘を連れてゐる。硝子越に見てゐる俊子未亡人の睫毛に、いつの間にか、口惜し涙が、露を成して宿つたのも、道理であつた。

娘二人は、母のさうした口惜しさを知るや知らずや、一寸この闖入者達を見返つた丈で、もうその朝、本屋から屆けて來たばかりの五月號の婦人雜誌を見てゐた。

「ほんたうに、口惜しいつたらないわねえ。」

未亡人は、生れ故郷を現してゐる下町好みの長火鉢を前にして、坐つてゐたが堪りかねたやうに呟いた。

「何が？　お母さん！」爛子は、無邪氣に訊き返した。

「お前達、口惜しくないの。まだ、元の持主が居るのに、あんなにのめ〳〵とは入つて來てさ。此方を踏付けにしてゐると云つたらありやしない。お花見が、聞いてあきれるわねえ。えゝ、口惜しい。」

母は、小娘か何かのやうに、火箸で自棄に、長火鉢の縁を打つた。またいつものヒステリイだと思つたので、瞳はなるべく、相手にならないやうに、雜誌を讀みつゞけてゐたが、爛子は首を上げて言つた。

「だつて、お母さん。買つたものはなるべく早く見たいのは、人情ぢやない？」

「何が人情なものかね。此方の氣も察しないで、よく圖々しく來られたものだね。大阪の人は、圖々しいと云ふが、本當だわねえ。相手が住田男爵家だと云ふので、名もない人の手には入るよりもお父さんもお欣びになるだらうと思つて、早く話をまとめたのに、こんな踏付けたことをするんだもの、口惜しいつたらありやしない。いくら、華族だつて、こんなに人を踏付けていゝのかしら。」

母は、それを冒頭に、主人が生きてゐたらば、こんな情ない目に逢はないとか、精美堂の主人が怪しからないとか、こんな目に逢ふのなら、家を賣るのぢやなかつたとか、くど〳〵といつまでも愚痴やら未練やらを並べてゐた。そして、おしまひに「お前達も、立派な家へでも、お嫁入りして二度と母さんを、こんな情ない目に逢はさないやうにしておくれ！」

瞳は、母の憤慨が尤もであり、又ある程度以上は、少しうるさかつたので、なるべく當り觸りのないやうに、あしらつて居た。が、彼女は、花を見に來た人達を、まつたく見ぬ振をすることも出來ないので、女中に云ひ付けて、庭の眞中にある四阿へ、お茶とお菓子を持つてやらせた。

一時間も居た後、彼等は悠々として、待たしてあつた自動車に乘ると、又警笛を遠慮もなく、高鳴らせて、歸つて行つた。未亡人の機嫌は、嵐の前の海のやうに險惡だつた。お茶やお菓子を持たしてやつた瞳にまで、當り散らした。

よき借家

住田男爵夫人の自動車が去つて、暫く經つた時だつた。再び、門前にけたゝましい警笛の響がした。

「何だらう。何か忘れものでもしたのかしら、またのめ〳〵と引返して來たのかしら。」

未亡人は、口惜しさうに待ち構へてゐた。

が、今度は、自動車は、門前に止まらないで、玄關前の勾配を、ズーと昇つて來た。三人は、顏を見合はした。

「何うしたのでせう。今の方かしら。」

瞳は、いぶかしげに眉をひそめた。玄關へ走り出た女中が、直ぐ引き返して來た。

「今の方？」瞳は、女中が部屋には入らない前に訊いた。

「いゝえ。違ひます、この方がお目にかゝりたいと仰しやるのです。」

女中は、未亡人の前に、一葉の名刺を置いた。三人の心から、前の闖入者に對する不快な感情が、サラリと一時に洗はれた。未亡人は、名刺を取り上げて、それを瞳に手渡した。彼女は、假名や新聞などは、讀めるのだつたが、少し難しい書付などは、直ぐ娘達に讀ませるのが、常だつた。

瞳は、母から渡された名刺を取り上げた。その刹那、彼女の頰は直ぐ、赤くなつて眸が輝いた。そして、自分からは、名前を讀み上げなかつた。

「何誰？」未亡人が、促した。姉の横に坐つてゐた爛子が、その名刺をのぞき込みながら、讀んだ。

「子爵、堀田義輔！」

「堀田子爵つて、何う云ふ方？」

母は、子爵と云ふ言葉に、特別の重みをもたせながら、訊いた。

「お母さん。お忘れになつたの。展覽會の時に、賣約して下さつた方ぢやないの、ねえ、姉さん。」

爛子は、姉を顧みた。

「えゝ、さう。」

さう、瞳は、何かしら、落着かないやうに答へた。

「あゝさう〳〵。お父様のものを、二點も買つて下さつた方だつたわね。何う云ふ御用かしら、何と仰しやつてゐるの。」

未亡人は、二三分前の不機嫌は、消えてなくなつたやうに、機嫌よく女中に訊いた。

「あの奥様に、お目にかゝりたいと、仰しやるのです。」

「私に！　まあ、どんな御用かしら。とにかく、お通しして置いておくれ。瞳！　お前、私の代りにお目にかゝつて見てくれない。都合で、私もお目にかゝるから。」

瞳は、母にさう言はれると、愈々顔を赤くしながら、その赤くなつた顔を、母や妹に見られるのを厭つたのか、それとも客に接する前の、身だしなみをするために、ふと立ち上つて、隣の自分の部屋へは入つて行つた。

平素なら、馴染の薄いお客は玄關から直ぐ次の、應接室に通すのだつたが、其處が引越しの荷物で一杯になつてゐたので、廣い座敷へ通した。

若い堀田子爵は、薄藍色の禮服を着てゐた。ネクタイの好みや、左の腕首に入れてゐる白金の腕時計と云ひ、瀟洒な、一分も隙のない身裝だつた。それで、嫌味がなく、二三代前には、長社祢で、千

代田城のお廊下を悠然と歩いてゐた祖先の上品さが、何處となく付きまとつてゐた。

女中が、お茶を運んで暫くすると、瞳がしとやかに、座敷へは入つて行つた。彼女は、普段着の上に、大島の羽織を着てゐた。お互に顔を見覺えてゐたので、微笑し合つた。

「やあ、先日は、何うも失禮しました。本日は突然伺ひまして、御迷惑だらうとは思ひましたが。」若い子爵は、快活だつた。

「いゝえ。何う致しまして。よくいらつしやいました。」

つゝましやかに答へる瞳は、白い木蓮のやうに上品で、美しい感じを與へた。

「本當は、誰か人を以て、お伺ひするのが、順序だと思ひましたが、僕はさう云ふ形式を取るのが、嫌ひなものですからね。それに書畫屋など云ふものには、どうも不快な人間が多いものですからね。さうした人間を仲に立てるより僕自身がお願ひした方が、僕の誠意が通ずると思つたものですからね。伺つたのですがね、この間も一寸お願ひしましたが、あの「俠妓圖」と云ふのは、如何でございませう。どうも、あれを見たのが、病み付きで思ひ切れないのです。御祕藏のものを、御無理とは、重々承知してゐますが、萬一を僥倖しようと思つて伺つたのですが。」

子爵の眸は、眞に藝術品を愛する人にしか見出されないやうな熟に燃えてゐる。瞳も、子爵の熟心に打たれたが、篠崎家としては、あれを手離すことが出來ないのは、初めから分つてゐた。

が、そのまゝ斷ることは出來ないので、

「母が何と申しますか、母に訊ねて參りますから。」さう言つて、瞳は席を外した。

母は、子爵の申出を大變欣んだ。

「まあ。そんなにまで、言つて下さるのかね。ほんたうに、有難い思召だね。お父さんが聞いたら、どんなに欣ぶかも知れないよ。だが、あれ丈は何うしても、放されないよ。どれ、私がお目にかゝつて、よくお斷りをするから。」

母は、さう言つて、瞳とつれ立つて、子爵に會つた。未亡人は、「俠妓圖」の由來を、精しく述べた。そして、「俠妓圖」が、自分の姉を、モデルにしたもので、さう云ふ意味からも、手離されないと云ふ事を、くれ〳〵斷つた。そして、あの繪をそんなにまで、懇望してくれる好意を、幾度も謝した。未亡人は、子爵に長々と昔語りをするのが、得意であつた。又子爵が、わざ〳〵所望しに來たことを、どんなに欣んでゐるか分らなかつた。男爵夫人から、烈しい侮辱を受けたと思つてゐた矢先だつたから、その欣びは二倍にも三倍にもなつたのだ。

子爵は、未亡人の話を、面白さうに聽いてゐた、

「なるほど、それで分りました。どうも、お孃さんのおもざしが、何處かあの畫中の美人に似かよつてゐると思つてゐたのです。」

子爵は、快活に笑つたが、瞳はくすぐつたいやうな嬉しいやうな恥かしさで、眞赤になつてしまつた。

「いゝえ。この娘のやうなお多福と違つて、姉はもつと美しかつたのでございます。そりや、姉妹の私でも、見惚れる位美しかつたのです。」

「さうですかね。お孃さんよりも、美しいと云ふ方を、僕は一寸想像出來ませんがねえ。」

子爵は、眞面目に言つたが、瞳は火の出るやうに、顏が熟くなつて、動悸が烈しく打つて來た。

「それでは、仕方がありません、諦めませう。その代り、そんなことも、おありにならないでせうが、萬一お手放しなさるやうなことがありましたら、是非僕に一番に通知して下さるようにそれ丈はお約束して下さるでせうね。」

子爵は、快く諦めて言つた。未亡人は、それを約束した。こんな話をしてゐる中に、客好きの未亡人と、洒脫な子爵とは、可なり打ち解けてしまつてゐた。

「お見受けしたところ、お引越しになるやうですね。」子爵の眼にも、廊下の荷物などが、眼に附いてゐた。

「はい。近い裡に、引き越すことになつてゐます。女手ばかりでございますから、家が廣すぎるものでございますから。」

「それで、孰らの方へお引越しになるのですか。」

「家がなくて、困つてゐるのでございますよ。雜司ヶ谷に、やつと見付けたのでございますが、まだそれに定めるかどうか、決心が付いてゐないのでございます。」

「お買ひになるのですか。」

「いゝえ。借りるのですが。」

「さうですか。」子爵は、一寸首を傾げてゐたが「大變失禮なやうですが、如何でせう。郊外ですが、

私の家の別邸が空いてゐるのですがね。」

「でも、初めてお目にかゝつて、そんな御配慮までいたゞくと、あんまり厚かましくつて。」

「いゝえ。そんなことが、あるものですか。實は僕の畫室と並べて、僕の母が隱居所を、建てたのですがね。は入るは入ると言つてゐながら、昨年の春死んでしまつたのです。家職の者は借家にしろ、借家にしろ、と勸めるのですけれど、つい素性も知れない人に住み荒されるのが、嫌でしたから、その儘にして置いたのです。皆さんに、來ていたゞけば、僕も靜湖先生の御遺族を少しでもお世話が出來るわけで、僕としても大變滿足なのです。如何でせう。僕の畫室とは、庭續きになつてゐますけれども、二三十間も離れてゐるのです。部屋數は、丁度八つだつたと思ひますから、お住居には丁度、適當でせう。」

それは、俊子未亡人に取つて、願つたり叶つたりの家だつた。二つ返事で承諾するのが、餘りにはしたなく思はれやしないかとの心遣ひから、彼女は長女の方を見返つた。

「ねえ、瞳。あんなに仰しやつて下さるのだけれど、餘り勿體ないやうな氣が致しますわねえ。」

瞳も、子爵の好意が、世にも有難く思はれたので、茫として、とみに返事が出なかつた。

「御遠慮なら、どうぞ御無用にして下さい。ほんたうに此家のやうな方に住まつて、いたゞけば、どんなに、滿足だか、分らないのです。貴女方に對する僕の好意と云ふよりも、靜湖先生に對する僕の敬意の一端として、是非受けていたゞきたいのです。」

子爵の言葉は、純な誠意と好意とに充ちてゐた。

「ねえ。爛子の通學の方は、どうかしら。」

未亡人は直ぐにも返事をしたいのを、堪へて、瞳を顧みた。

「結構ですわ。中央線で通へば、いゝんですもの。」

「さうですとも。僕も麹町の家から毎日のやうに通つてゐるのですよ。それに、邸内に留守番が居りますし。大きいセッタアをかつてありますし、用心は決してわるくありませんよ。」

未亡人は、やつと決心して言つた。

「ぢやお言葉に甘えて、お願ひいたしませうかしら。」

「さうですか。本當に來て下さいますか。あはゝゝゝゝ。到頭、僕が說き落した譯ですな。」

若き子爵は、もう十年の知己のやうに打ち解けてしまつた。

それでも、一度氣に入るか入らないか、見たらよいだらうと、子爵が言つたので、幸春の一日を郊外散步旁々、中野の家を訪ねることを約束した。

子爵が、歸り去つた後、一家は初めて春に逢つたやうに華やいでゐた。

「本當に、品のいゝ昔の若殿樣と云つたやうな方だわね。それに、さはりが柔かで、物優しくつて……」

……」

未亡人は、二言目には、子爵を賞めちぎつた。

「本當に、立派な方だわねえ。」

子爵の姿を、隙間から見た爛子も、消え去つた虹を追ふやうな眼付をして言つた。が、瞳は默つた

ま、何も言はなかつた。

その翌る日、母は瞳丈を伴つて、中野の家を訪ねた。快よく晴れ渡つた日で、中央線の沿線に展開して來る大久保中野の郊外は、空にも地にも、春光が麗かに充ちてゐた。車窓から見ると、其處にも此處にも、櫻が咲いてゐた。棟割長屋の一寸した空地に植ゑられた一本の若櫻などまでが、それ相當に、つゝましい春を、漾はしてゐた。麥の青と、黄い菜種畑とが、あざやかな絨氈模様を作つてゐた。若葉を付けた武藏野特有の雜木林が、春の日に、キラ〳〵輝いて見えた。

中野で電車を捨てゝ、昨日教へられた通り、新井の藥師の森を、右に取つて、五町ばかり來ると、子爵の云ふ通り、白堊塗の畫室が、目に付いた。白い花崗石の門柱にかけてある表札を見ると、堀田別邸と書いてあつた。門に取り付けてある電鈴を鳴らすと、五十近い老人が出て來た。そして、今朝東京から、電話で通知があつたと言つて、叮嚀に案内して呉れた。邸は、一町四方もあらうと思はれる廣さで、樹木が一杯に茂つてゐる。門から、道が二つに別れてゐて、左の道は畫室の方へ付いてゐた。老人は右の道へ案内した。道の兩側には、小松が一杯生えてゐて、都會はなれた氣がした。十間も歩くと、純日本風の二階建の建物の前へ來た。玄關には、式臺まで附いてゐて、いかにも華族の別邸らしい上品な構へだつた。

新築して以來、誰も住まなかつたと云ふのだが、手入はいかにもよく行き屆いてゐた。もとより、靜湖が費を盡した駒込の家に比べては、規模が小さかつたが、柱も天井もみんな檜で、東京中の借家を、どんなに漁り歩いても決して見付からない立派な造作だつた。二階は六疊と八疊とで、郊外の空

氣や光線を、十分に取り入れるやうに明るく作られてゐ、其處からは、廣々とした武藏野が一面に見渡された。波のやうに起伏してゐる青い丘、その間を點綴してゐる雜木林、はるか彼方にかすんでゐる水色の秩父の山々。

「本當に、こんな處に住んでゐると、氣がのび〳〵するだらうね。」

「本當にね。空だつて、東京よりは蒼く見えますわねえ。」

瞳は、欄干に手を附きながら、光を含んだ春の大空を見上げた。

「さうだとも。塵が、ちつとも交つてゐないんだもの、でも、こんないゝお家を、本當に貸して下さるでせうかしら。」

未亡人は、家が氣に入ると、是非とも借りたい氣になつた。

「御主人が、さう言つてゐらつしやいました。お氣に入つたやうだつたら、明日からでも、おはいりになるやうに、申上げてくれと。」

母子の話を横で聽いた老人が、口を入れた。

「まあ。それは、何と云ふ有難い思召だらう。ぢや、近い内に、お世話になるかも知れませんよ。」

「はい……どうぞ、早くいらつしつて下さい。家が空いて居ますと、監理がたいていぢやございませんのです。」

「さうでせうね。空けて置いた方が、却つて家が傷むでせうからね。まあ、ぜひ一つお世話になりたいと思ひますよ。」

未亡人は、もうすつかり乘氣になつてしまつた。その家を出てから、まだ時間が早かつたので、電車線路を反對に横ぎつて、堀の内のお祖師様にお詣りしてから、母子はその日の暮方、駒込の家へ歸つて來た。母は、歸りの電車の中で、瞳にさゝやいた。

「お父様が、突然死んでどうせうかと思つてゐたが、本當に渡る世間に鬼はないわね。思ひがけず、堀田様なんて、御親切な方とお知己になるんだもの。あんな方と、お心安くして居ればどんなに心强いかも知れないよ。」

母は百萬の味方を得たやうに欣んでゐた。が、瞳の心は少し違つてゐた。母が花柳界に育つたゝめに、その世界の生活方針である、金のあり權勢のある者に、無反省にブラ下る。——さう云つた心持を知らず〳〵受け繼いでゐるために、若い子爵を、無條件に有難がつてゐるのとは、少し違つてゐた。彼女は、堀田子爵のことを考へると、心が少しときめいた。自分でもそれに氣が付いてゐるが、子爵から、ある程度以上の恩惠を受けてはならない。さう云つた方面では、ちやんとした遠慮と距離とを持たなければならないと、ハツキリ決心してゐた。

電車が、萬世橋に着かうとする刹那であつた。母は、何を考へてゐたのか、唐突に言つた。

「ねえ、瞳。あの方奥さんがお在りになるのかしら。」

「えゝ、何に？」

瞳は、ぼんやり外の事を考へてゐたので、母の言ふことが聞えなかつた。

「あの方、奥様がお在りになるのかしら。」

「えゝ。何方？」

「堀田さんさ。」

「何うですか。お在りにならないのでせう。なぜ？」

瞳は訊き返した。

「なぜでも。」

母が、さう言つて默つてしまつた時、電車は萬世橋驛に着いてゐた。

誓ひ

篠崎家が中野へ移る日は、四月の十六日と定まつた。未亡人の住田男爵夫人に來られて以來、一日もこんな邸にはゐたくないと云つてゐた。その上、中野の家が、ひどく氣に入つたので、直ぐさま引越しの準備にかゝつた。十五日の日には、一部の荷物を送ることになつた。片山湖舟を筆頭に、靜觀畫塾の門弟達が、七八人も手傳ひに來た。それでも、數多い道具類は、なか〳〵片附かなかつた。姉妹達三人も、姉様かぶりをして、男達の間に交つて働いた。夕暮までに、大きい荷車に、四臺も積み出しても、家の中の道具は、少しも減らなかつた。殘りは、明日の事にして手傳ひの人達は、この家で最後の晩餐を食べることになつた。

もう、膳椀などは、すつかり片附けてしまつたので、御馳走は近所から取つたうなぎどんぶりか、何かであつた。それでも、家族も門弟も、一緒に十二疊の大廣間で食べたので、今までの親しみが、

一時に感ぜられるやうであつた。

「ねえ、奥さん。このお座敷も、お名殘りですな。僕も、茲で幾度先生のお酒のお相手をしたか分らないですな。」

いつも剽輕な湖舟も何となくしめつぽく未亡人に話かけた。

「さうね。宅も隨分、お酒を飲んだけれども、貴方も負けなかつたわね。」

「あはゝゝ。どうも、僕もよく飲みましたナ。さう〳〵一昨年の社中の園遊會の時でしたかな。僕が、醉つぱらつて泉水へ落ちたのは。」

「さうね、あのとき、私湖舟さんが死ぬんぢやないかと、心配したのよ。だつて、眞蒼な顏になつてぶる〳〵顫へてゐるんだもの。」爛子が、口を出した。

「嘘を仰しやい。貴女が、そんな心配をして呉れたもんですか。僕が落つこちたのを見て、貴女は手を拍つて欣んでゐたぢやないですか。」

皆が笑つた。

「もう、園遊會なんて、あんな面白いことは、二度とないわねえ。」

都が寂しさうに言つた。

「なに、そんな事があるもんですか。今に、僕が偉くなつて園遊會をして、皆さんを招待しますから。」

「嘘！　湖舟さんは、去年帝展が、駄目だつたとき、もう繪なんかやつても駄目だから、自動車の運轉手になると、言つて居たのぢやないの。」

孰らかと云へば、お轉婆な爛子が、素破ぬいたので、一座は哄笑した。

十三夜頃の月が、昇り始めたと見え、庭は美しい月夜になつてゐた。

「まあ！　何とでも、仰しやいよ。僕は、先生が亡くなられたのを機會に、大に奮發しようと思つて居るのです。先生が亡くなられたと云つて、力を落してゐる人もありますがね。偉い藝術家の死は、普通人の死とは違ひますよ。肉體的に死んでも、藝術的には死んでゐませんよ。」

「湖舟さん、偉い！」

若い塾生の一人が、まぜ返したので、一座がまた笑つた。

「ひやかす者は、ひやかして居るがよい。僕は、先生の殘して下すつた作品を手本として、先生の畫風を天下に發揮しようと思つてゐるのです。」

湖舟は、手酌で四五本も傾けたと見え、もう可なり醉つてゐた。

都は、もうとつくに食事を了へて、緣側に出ると、庭下駄の上に足を下したまゝ、緣側に腰をかけてゐた。彼女は自分一人になつて、この邸の最後の宵を過ごさうと云ふ氣になつてゐた。だから、一座が湖舟を中心に、段々賑やかになつて來るのを見ると、人に氣付かれないやうに、緣側から離れた。そして、泉水の中の飛び石を傳つて、向ふ岸に渡ると、其處にある小さい小山を昇つて、頂上の四阿の中へは入つた。

障子を開けてある座敷に坐つてゐる母や姉妹門弟達の有樣は、手に取るやうに見えたが、向うからは朧夜の花の下蔭は、暗くて見えないやうだつた。

花は、滿開の盛りを過ぎたと見え、風もないのに、おぼろの月影をかすめて、頰りに散つてゐた。

二十一、それはもう少女として、決して若い年ではなかつた。二十までは無意識に過ごして來ても、二十歳を越してからは、一年一年が、一杯の苦い酒か何かのやうに感ぜられる。都は、父の死後は別して月日が、あわたゞしく何だか背後から、追ひかけられるやうに感ぜられるのであつた。

住み馴れた家を移ることも、可なり悲しいことだつた。三人の姉妹の中で、彼女は一番母に似てゐた。衣裳は三人の中で、一番華美好みであつた。何かに付けて一番虚榮好きであつた。

都は四阿の中で、三十分ばかりも、一人でゐた。座敷からの話聲は、初めの内は聞えてゐたが、おしまひには段々靜かになつた。もう、塾生達は歸つてしまつたのではないかと思はれた。

「都さん玆にゐたのですか。」

突然、昂奮した青年の聲がした。都は、おどろいて顏を上げた。それは塾生の菅だつた。

「あゝ菅さん。」都は、愕いて立ち上らうとした。

「まあ。いゝぢやないですか。坐つてゐらしつても。」

都は、少してれて、もぢ〳〵しながら、再び腰を下した。菅は、四阿へは、は入つて來ないで柱に倚りながら立つてゐた。二人の間に重くるしい沈默が、三四分つゞいた。菅は思ひ切つたやうに話し出した。聲が、少ししはがれてゐた。

「都さん、これからは、度々お目にかゝれない譯ですね。」

「さうですわね。塾の方も閉鎖するのでせう。」

「さうです。僕は、やつぱり櫻木町の方へ行くことになりましたからね。」

都は默つてゐた。女の白い頰が、菅の眼には、なやましく映つた。

「なにしろ、今までのやうには、お目にかゝれないのです。それでね、都さん、僕は貴女にお話して置きたいことがあるのですがね。」

菅は、可なり昂奮してゐると見えて、息づかひが高くなつてゐた。

「言はなくつても、僕の氣持は、分つて居て下さるでせうね。」

都は、默つてゐた。

「それが、先決問題なのですがね。僕の氣持は、分つて居て下さるでせうか。」

二人の間は、明かな戀愛關係までは、進んでゐなかつた。が、二人限りで、二三度、音樂會へ行つたり、戀文とは云はれないまでも、それに近いものが幾度も取り交してゐた。が、口に出してお互ひの戀愛を認め合つたことはなかつた。

都は、まだ默つてゐた。

「ねえ、都さん。かう云ふことは、ハツキリ定めて置かないと、後でいろ〳〵間違の元となると思ふのですがね。僕は、貴女の愛を信じて差支ありませんか。」

都の顏が、夜目にもそれと分るほど、赤くなつてゐた。然し、彼女は尙默つてゐた。

「何とか、返事をして下さい。僕は、貴方をどんなに思つてゐるか。貴方だつて、御存じでせう。」

菅は、さし俯いてゐる都の白いうなじの邊を、ぢつと見詰めてゐた。

「僕は、貴方さへ誓つて下すつたら、結婚の約束をして置きたいのですがね。僕は、このまゝでは何となく不安なのですがね。」

都は、まだ默つてゐた。

「それとも、僕がお嫌なのですか。」

都は、初めて頭を振つた。

「ぢや、僕を愛して下さるのですか。」

都は、かすかにうなづいた。

「ぢや、僕と結婚を誓つて下さるでせうか。尤も、今急と云ふ譯には行かないのですが、僕が帝展に通るまで、待つて下さるでせうか。僕は、貴方も知つてゐる通り、帝展に通るまでは、父から表向き勘當されてゐるのです。僕は父の意志に背いて、繪を志願したものですから、一人前の畫家になるまでは、父から補助を受けないことを聲明してゐるのです。」

都は、默つて話を聞いてゐた。彼女は、菅と云ふ靑年が、決して嫌ひではなかつた。が、將來を託する夫としては、こんな人で、いゝのかと云ふ疑念が、頭の何處かに潛んでゐた。性格が、綺麗だけれども、單純で、深さとか重さとかゞ、缺けてゐるやうに思はれた。

が、菅の言葉は、だん〳〵熱して來た。

「僕を愛して居て下さるのなら、僕が結婚し得るまで、待つて下さるでせうね。僕は、それが心配なのです、貴方が待つてゐて下さるかどうか。その代り、貴方が約束さへ與へて下されば、地に嚙りつ

いても、帝展へ通つて見せるつもりです。去年だつて、僕は十分自信があつたんですけれども。」

菅の眸は、靑年らしい希望と愛とに燃えてゐた。

都は、男ほどは、何うしても熱狂出來なかつた。結婚を約束して、若しこの人が、一生帝展へ通らなかつたら。湖舟さんなんか、二十七の年から家へ來て、十三年目にやつと一度通つたばかりではないか、五年も六年も、或は十年も二十年も結婚を待つてゐる。さう思ふと、都は容易に答へが出來なかつた。

「都さん、一言でもいゝから、ハツキリした返事を聽かして下さらないでせうか。」

「でも、私分らないのですもの。」都は呟くやうに答へた。

「御自分のお心が分らないことはないぢやありませんか。僕を何う思つて居られるか、御自分で分らないことはないでせう。」

「でも。」都は尙言ひなやんだ。

「ぢや僕が帝展へ通るやうなことが、永久にないと云ふのですか。」

「いゝえ。そんなこと。」

都は周章てゝ打ち消した。そして、靜に立ち上つて、四阿の外に出て、一しきり烈しく散る落花の中に立つてゐた。豐艶な顏が、夜目に一際美しかつた。

「それなら、約束して下さらない。貴女だつて、僕の藝術的素質は、相當認めて居て下さるでせう。僕を信じて下さい。僕は、今年は是非通つて見せますから、僕を信じて下さい。」

菅は、女の前へ進んで、その柔かい肩に、兩手を置いた。

「ねえ、都さん。いゝでせう。誓つて下さるでせう。ねえ、都さん、僕は貴方を幸福にするためにはどんなことでもしますから。」

菅の情熱が、都の心を動かした。菅が、誓ひのしるしの接吻をでも求めるやうに、近づけた顔をこそ避けたけれども、都は男の胸に顔を埋めるやうにして、小聲でさゝやいた。

「えゝ。」

「誓つて下さる。」菅は、雀躍りして叫んだ。

「えゝ。いゝわ。」都の聲は、前よりも、もつと低かつた。

綠の午後

「お姉様、一寸いらつしやい。いらつしやい。」

瞳と一緒に新しい邸内を、あちらこちらと歩いてゐた爛子は、邸内の片隅の孟宗竹の生えてゐる邊りへ來ると、急にけたゝましい聲を擧げて、姉を呼んだ。

瞳は、赤を含んだ紫色をしてゐる紅木蓮の花に見惚れてゐたが、妹に呼ばれると、若い楓の枝を潜りながら、小さい竹藪の方へ來た。

「お姉様、これ筍ぢやない？」

爛子は、しやがんで、普段着の銘仙の袖をかゝげながら、枯れた笹の葉を積んでゐる土の間を指先

で掘り起してゐた。

「まあ！」瞳は美しい黑い眼を刮つた。

「筍は、こんなにして生えるのね。」

「本當にね。」

「お姉様、一寸待つてゐて下さいね。わたし何か掘るものを持つて來るから。」

爛子は、十二三の小娘のやうに家へ走つて行つた。

中野の家へ越してから、一週間にもなる四月末の土曜日の午後である。微風に搖れてゐる竹の梢からは、光に充ちた晩春の空が仰がれる。

爛子は、直ぐ歸つて來た。右の手に少し錆た庖丁を持つてゐた。

「お姉様、晩にこれで筍めしを、こさへてあげますからね。」

「おほゝゝゝゝ。」

瞳は、笑つた。爛子は、せつせと土を掘り起しながら言つた。

「二十四孝の筍掘りと云ふ所ね。」

「本當の筍掘りなら、庖丁なんかで、掘りはしないわ。」

「さうかしら。」

「鍬よ。」

「お姉様、鍬を一つ買ひませうか。」

「いゝわねえ。」

「こんなに、庭が廣いのですもの。お野菜か何か作りませうよ。」

「まあ。氣の早いらんちやん。」

爛子は、一本の筍を掘り起して、二本目にかゝつてゐた。二本目の筍を、一生懸命になつて、親竹の根から切り放してゐた。

「お姉様、兩方とも小さくつて柔かさうね。」

さう云ひながら、爛子は半間ばかり向ふに在る三番目の筍を掘り起しかけてゐた。

「もう、およしなさいよ。らんちやん。」

ニコ〳〵笑ひながら見てゐた瞳が、止めた。

「なぜ？」爛子は、不思議さうに姉を見上げた。

「なぜつて、これ大家さんのよ。」

「でも——」

「でもぢやないわ。お家は借りてゐても、こんなもの、默つて取つちや惡いわ。」

「さうかしら。」爛子は、餘り氣にもとめず言つた。

「さうかしらだつて。お家を借りてゐる丈よ、植木だとか、それに成る果實なんか、みんな大家さんのものよ。」

「ぢや。これ、元のやうに植ゑて置きませうか。」

「……ふつふ」瞳は思はず、噴き出して笑つた。

「そんなに根を切つてしまつたものが、どうなるものですか。」

「ぢや惡かつたわねえ。」

さう言ひながら、爛子は三本目の筍を掘る手をまだ止めなかつた。

「仕方がないわ。後で留守番の爺さんに斷つて置くといゝわ。」

「それよりも、わたし堀田様にお斷りするわ。先刻ね、わたしが歸つて來るときに、四谷のプラットホームに立つてゐらしつたのよ。滿員で、まだ一臺位お待ちになつたやうよ。」

「さう。」瞳は、何氣なく答へたが、胸がわく〳〵するのを感じた。初めは、何氣なく聞くことが出來た堀田と云ふ名前が、この一週間ばかり不思議に、彼女の心持を搔き擾すのであつた。堀田とは此方へ越してから、一日隔き位には顏を合せた。堀田はこの頃、別莊の一部を「晩春」と云つたやうな主題で、三十號ばかりの畫布に描いてゐた。お天氣のよい日には、定まつて東京から來るのであつた。快活な都や、爛子などは、よくその畫布をのぞき込んだりして、もう可なりお友達になつてゐた。瞳丈は、三人の中で、一番年上でもあり、天性の虔しやかな性質のために、急には親しくなれなかつた。それでゐて彼女は堀田の事が、心から去らなかつた。自分一人で、庭を歩いて居るとき、樹間がくれに、畫架に向つた堀田の姿を、思はず垣間見てゐる自分に、氣がついて、一人で頰を染める時などがあつた。

「もう、屹度平常の處で、仕事を始めてゐらつしやる頃よ、お姉様行つて見ない？」

爛子は、掘つてしまつた三本の筍を、兩手に持ちながら姉を誘つた。

「えゝ行つて見ませう。でも、可笑しいわ。そんなものを持つて行つちゃ。持つて行かなくつても、お斷り丈すればいゝぢやないの。」

「ぢや、置いて來ませう。待つて居てね。」

爛子は、さう言ひ捨てると、若い孔雀のやうにすらりとした身體を、飜しながら、楓の林の中をくぐつて、臺所の方へ走つて行つた。

青い夢を見るやうな水色の、若葉を附けた柏の樹の下で、瞳は妹の姿を見守つてゐた。妹の身體には、若さが丁度、この柏の若葉のやうに、水々しく充ち滿ちてゐるのだと思ふと、妹が羨ましく、二十二になつた自分は、この若葉の中に、散りかゝつてゐる八重櫻のやうに、もう凋落の姿を見せ始めて居るのではないかと、寂しい不安に囚はれてゐた。爛子は、直ぐ歸つて來た。

「お姉様、臺所へ置いて來たわ。すみやに皮を剝けつて言つて來たのよ。」

「まあ。」瞳は、目を刮つた。

「だつて、どうせ、いゝと仰しやるのに定まつてゐるんだもの。此方から行つて見ませう。」

爛子は、近道をして、つゝじの植込の中を通つてゐた。

晩春から、初夏への郊外の天地は、四季の裡で、一番新鮮で快活で美しかつた。どんな雜木でも、美しい芽を吹いてゐる。それに、駒込の邸に在るやうな人工で、苛めが、新鮮な若葉を附けてゐる。

付けた樹木でなく、どの木もどの木も、みんな伸々としてゐる。みんな自由で、わだかまりがなく、

すく〳〵と伸びてゐる。邸内は、なるべく武藏野の原野の面影を、そのまゝに傳へて居て、自然でそして、潑溂としてゐた。

姉妹は、小さい雜木林の中を潜つた。その林の中には赤い椿が、二三株、まだ花が一杯に咲いてゐた。其處を出ると、赤い煉瓦で葺いた白堊塗の畫室があつて、周圍に八重櫻が、一杯に咲いてゐた。その畫室の前に、數株の楓の大木が、枝を交はしてゐる下に、白木蓮の木があつて、もう八分通り花を落してゐる。その樹を中心に、子爵は描いてゐるのであつた。もう、一週間にもなるので、今日あたりは仕上げに近かつた。

でも、平素の所に、畫布を載せた畫架丈が立つてゐて、子爵の姿は見えなかつた。

「おや！」爛子は、四周を見廻した。

「あ！　あすこ。」爛子は、子爵が、畫室に續いてゐる洋室の廊下の籐椅子に腰かけて、紅茶を啜つてゐるのを、姉に指し示した。

「いらつしやい！」子爵は、姉妹の姿を見ると、椅子から立ち上つて二人をさしまねいた。

「丁度いゝ所へいらつしやいましたね。今、お茶を飲んでゐた所です。茲へいらつしつて下さい、お茶を一つさし上げますから。」

子爵は愛相よく云ひながら、女中にお茶を命じた。爛子は、直ぐにも其處へ飛んで行きさうにした。が、瞳は微笑を含んで、會釋した丈で、容易には動かなかつた。

「さあ。茲へいらつしつて下さい！　今、やつと仕上げが濟んだ所です。大變愉快です。何か描き了

へた時位、氣持ののう〳〵とすることはありませんね。」

「あら、もうお出來になつたのですか。」

さう言ふと、爛子は畫架の方へ進んで、まだ繪具がベト〳〵と濡れてゐる畫面をぢつと見つめた。

瞳も、妹の後から繪の方へ近づいた。

子爵の繪は、後期印象派の影響を可なり受けてゐるので、いかにも明るい快い色を使つてゐた。繪の本當の價値は、姉妹には分らなかつたけれども、色の冴えてゐる處と云ひ、素描の確かな所と云ひ素人の域は遙に脱けてゐて、華族階級の人によくあるやうな殿様藝でないこと丈は、直ぐ分つた。

「これ帝展へお出しになるの。」

爛子は、默つて一分ばかりも見入つた後、子爵の方を振り向きながら言つた。

「さあ、何うなりますかね。僕としては、いくらか自信はあるのですけれど。」

合着の白つぽい洋服を着て、上着を脱いで居る子爵は、いかにも華奢に禍たけて見えた。明るい處に居る故か、色が透き通るやうに白く見えた。黒みがゝつた青磁色のネクタイに藍色の寶石の附いたネクタイピンをさしてゐる好みなども、いかにも水際だつて上品に見えた。

「かうして見てゐると、私やつぱり洋畫の方がいゝわね。洋畫の方が、なぜだか私達に親しみがあるやうですわねえ。」

爛子は、いかにも老實な口振で言つた。

子爵は笑つた。

「駄目ですよ。駄目ですよ。貴女が、洋畫の贔屓なんかをしちや。僕の繪なんか貴女のお父様のものに比ぶればなつてゐませんからね。」

「でも、私日本畫は、何だか空々しいやうな氣がしますのよ。」

爛子の言葉を、ニコ〳〵笑ひながら聽いてゐた瞳は、思ひ出したやうに口を挾んだ。

「爛子さん、それよりも貴女忘れてゐることがありやしないこと？」

爛子は氣が付いて、一寸顔を赤くした。

「あゝ、さう。さう。あの私、お詫びしなければならないことがございますのよ。」

爛子は、堀田の方を向いて言つた。その時、丁度お茶が運ばれた。

「なんですつて。爛子さんが、僕にお詫びをしなければならないことがあるんですつて。そりや聞きものですね。とにかく、此方へいらしつて下さい。お茶を飲みながら、お詫びを聽きますから、さあ、どうぞ。」

爛子も瞳も、廊下の方へ上つて、堀田が直して呉れた椅子に腰を下ろした。

「なんですつて、爛子さんが僕に何か悪いことをしたのですか。さあ、聽きませう。」

堀田は、顔に微笑を含みながら、聲と態度丈は眞面目になつた。

「まあ、そんなに改まつては、お話出來ないわ。」

「ぢや、かうすればいゝんですか。」堀田は、わざと姿勢を崩して、左の足を右の足の上へ重ねた。

「まあ！　おほゝゝゝ。」爛子は、、、、も可笑しさうに笑つてから、「私大家さまに濟まないことを

しましたのよ。許して下さる？」
「いや、それは時宜によりますな。」
「と云ふと許して下さらないのですか。」爛子も、冗談まじりに言つた。
「いや、事に依つては許さないことがありますよ。」子爵は、絶えず微笑を含んでゐた。
「まあ、恐い大家さま。」
「因業家主と云つて有名なものですよ。」
三人とも、お茶を飲みさして笑つた。
「何でも、貴女が、謝まると云ふことは。」
「まことに、申し兼ねまするが、お邸の筍を盗つたのでございますの。」
「筍！」子爵は、わざと大業に言つた「それや、大變。あの孟宗藪のでせう。」
「えゝ、さう。」
「それは、困つた、大變なことをして呉れた。」
子爵は、冗談に、困つたやうな身振をし續けた。
「それ御覽なさい。だから、私が言はないことぢやないでせう。」
瞳までが、ついその冗談の雰圍氣には入つて行くやうに言つた。
「本當に何うしても、許して下さらないの。」
爛子は、冗談が面白くなつたやうに、美しい上眼で、子爵を哀願するやうに見ながら言つた。

「さうですね。外ならぬ貴女のことですから、許して上げてもいゝですがね。條件がありますよ。」
「條件、え、ようございますわ。どんな條件ですの。」
子爵は、やつぱり冗談らしく言つたが、表情丈は、一寸こはばつた。內容が、冗談ではないからだらう。
「貴女のお詫びを聽く代りにですな。貴女の肖像を描かして下さらない？」
爛子も、直ぐは返事が出來なかつた。
「えゝ、でも。」
「お嫌ですか。」
「何だか恥かしいのですもの。」
「恥かしいことがあるものですか。さうですね。毎日三十分位づゝ坐つてゐて下されればいゝのです。僕は早いから一週間位の中には仕上げてしまひますよ。」
爛子は、一寸躊躇つた。
「その三十分の間、ぢつとしてゐなければならないでせう。」
「なに、そんな事はありませんよ。少し位、身體を動かしたつていゝし、話なんかいくらしたつていですよ。それに、貴女が退屈したら、直ぐ休んでもいゝのです。」
「お姉樣、何うしませう。」
瞳は、一寸考へたが、何も其處に、斷らねばならないやうなことは、少しもなかつた。たゞ年若い

妹を、若い子爵と一緒に置くことが、姉として一寸不安であつたが、其處は子爵の人格を信ずればよいことだし、また子爵にいろいろ世話になりながら、子爵が初めて此方へ出したわづかな希望を斷るのも、心ない業だと思つたので、

「描いていたゞいては何う？」と言つた。

「でも何だか恥かしいわ。お姉様、描いていたゞいては何う。だつて、私は學校があるのですもの。」

それは、子爵も考へて居なかつた。

「なるほどね。僕は、二時から三時頃に、外光の中で描かうと思つてゐたのだから、學校があると困つたな。ぢや、筍の一件は、條件なしで、許してあげますかね。」

「お姉様、描いていたゞいたらどう。」爛子は、再び姉を振り返つた。

「さうですね。お姉様に願へたら、こんな結構はないのですがね。僕も、實はお姉様の方をより多く希望してゐるのですよ。お姉様の顏の方が、孰らかと云ふと、僕の今度描きたいと思ふ主題にピッタリしてゐるのです。初夏の若葉を背景として、スッキリとした、淸麗な女を描きたいのです。『綠の午後』と言つたやうな畫趣で。」

「まあ、ぢや私は落第ですの。」爛子が、大きい眼をくるりと一つ廻して言つた。

「そんな譯ぢやないんですよ。だが、貴女は何うしても絢爛たる春の人ですよ。」

「ぢや、お姉様に限るわねえ。」

瞳は、飲みさしてゐた紅茶の碗を、自分の掌に載せてゐたが、しばらく考へた。まだ知り合つて

から、一月にもならないのに、モデルになつたりすることが、少し親密すぎると思つたが、角立てゝ斷ることが、いかにも相手の心持を傷つくることだつたと思つたし、それにかうした靜かな初夏の庭園で、子爵の畫布の前に坐ることが、決して惡い心持でないと思つたりしたので、承諾する氣になつた。

「ぢや、私でもよかつたら。何卒。」子爵は、心から欣んだ。

「さうですか。それは有難いですな。ぢや、早速明日からでも、始めますかね。貴女の御都合は。」

「私は何時からでも、結構でございます。」

「ぢや、明日から一つお願ひしませうか。」

「どうぞ。」瞳は、しとやかに肯いた。

「實は、此の間中からお願ひしようと思ひながら、言ひ出しにくかつたのです。爛子さん、よくまあいゝ時に、筍を取つて下さいましたね。」

子爵の諧謔に、三人は快く笑ひ合つた。

戀愛常道

瞳は、その日、家へ歸つてその事を母に話した。母は、一寸聽くと、目を刮つて駭いた。

「ぢや、お前、堀田さんが、モデルになつて呉れと仰しやるのだねえ。」

「えゝさうよ。」

「それで、お前承諾したのかい。」

「えゝ。」

「まあ、お前。洋畫のモデルと云へば、裸になるのぢやないの、そんな恥かしいことを、お前……」

食卓を圍んでゐた三人の姉妹は、可笑しく笑ひこけた。

「お母さん、裸になるのは、裸體畫のモデルよ。」爛子は、やつと笑をこらへて言つた。

「だつて、モデル女と云へば、みんな裸になると聽いてゐるものさ。」

「洋畫だつて、裸體畫ばかりぢやないのよ。堀田さんが描きたいと仰しやるのは、お姉様の肖像畫よ。」

爛子が悧巧さうに説明した。おとしは、やつと安心した。

「さう。それぢや、なるべく立派にして行くんだわねえ。」

「着物なんかどうでもいゝのよ。普段着の方がいゝかも知れない。尤も、堀田さんはどんなものをお好きになるか知れないけれど。」

爛子は、自分の事のやうに、言ひつゞけた。

瞳は、明日からの事を考へると、何となく不安が感じられた。何とか口實があつて、逃げられゝばいゝと思ふ心と、自分の姿をどんなに子爵が描き出すかを見たいと云ふ心とが、胸の裡で烈しく爭つてゐた。その夜は、十二時が鳴つても、一時が鳴つても、妙に目が冴えて眠られなかつた。

翌る日は、昨日よりも、もつと晴れ渡つてゐた。この頃、自然は、一雨毎に見違へるやうに變化するが、一夜の中にだつて、邸内の東北の隅にある欅の大樹の若葉が、昨日よりも綠が濃くなつたやう

に感ぜられ、楓の梢が益々繁りあつて來たやうに思はれた。

緣側の直ぐ前に植ゑられてゐる躑躅の、眞赤な小さい花が、ちら〳〵と咲き始めてゐた。瞳は、午前中ぼんやりと、自分の居間に當てられた二階の六疊で、一葉全集を讀んでゐた。もう一度前に讀んだものだつたが『たけくらべ』が、何となく胸に浸み入つて來た。出家するに定まつてゐる信也と云ふ少年と、吉原の大籬に養はれて末は遊女になるに定まつてゐるみどりとの、少年少女のあはい戀心、お互の心の底深く慕ひ合ひながら、表面は妙な意地から、いさかひをして、永久に別れ〳〵に人生の波濤に溶け込んでしまふはかなさが、妙に胸に浸み込んで來るのであつた。この前、讀んだ時には、それほど感じなかつた作品が、今日に限つて、彼女の胸の奥を衝き動かすのであつた。が、それと同時に、絶えず午後のことが氣にかゝつた。

午過ぎてからは中央線の電車が止まる毎に、子爵が着いたのではないかと思ふと、二階からは停車場からの道路が見えないのに拘はらず、停車場の方を幾度も振り返つて見た。

二時頃になつて、留守番の爺やが、瞳を迎へに來た。

「若様が、一番上のお嬢様に一寸來て下さいと仰しやつて居ます、」

爺の大聲が、二階まで聞えた時、瞳は身體中が、急に熱くなつて、直ぐには下へ降りて行けなかつた。が、女中が迎へに來たので、仕様ことなしに下に下りた。が、何う考へても、一人では恐いやうで、恥かしいやうで行けなかつた。

都が、下の座敷でピアノをさらへてゐた。

「ねえ。みやちやん。」瞳は、十疊の座敷へは入りながら言つた。
「あなたも一緒に行つて呉れない。何だか一人ぢや、てれてしまふのですもの。」
「でも、お姉様。モデルになるのに、お附きなんか贅澤よ。」
「そんなこと言はないで行つて頂戴よ。あなたが傍に居て呉れないと、私何だか恥かしいのですもの。」
「さう、ぢや行つて上げるわ。」都は、氣輕に姉に隨いて來た。
その日、瞳は若い楓の樹を後に、一時間近くも籐椅子に腰かけて、ぢつとしてゐた。都が傍に居て絶えず子爵と話してゐて呉れるので、そんなにもてれなかつたが、それでも子爵の視線が、自分に注がれてゐると思ふと、顏中が妙に熱くなつて來て、視線のやり場に困つた。
「もう少し此方を見て下さいね。」
さう言はれても、何うしても畫架の置いてある處を見ることが出來なかつた。
彼女は、長い睫の生えてゐる黑い眼で、庭石の上に置いてある眞赤なアネモネの鉢植ばかりを見詰めてゐた。
その翌る日も同じ時刻に、瞳は都と一緒に坐りに行つた。もう昨日よりもよつぽど馴れてゐた。子爵の眼と二三度、視線が會つたけれども、さう狼狽もしなかつた。都が話すにつれて、一言二言子爵と口をきいた。三日目は、雨が降つたので休み、四日目も、五日目も、やつぱり都と一緒に行つた。瞳も、もう可なり自由に子爵と話をすることが出來た。畫布に現はれて來る彼女の姿は、日一日生々と彼女に近くなりかけてゐた。六日目だつた。その日、妹の都は東京に行き二時頃までには歸つて

來る約束だつたが、二時近くなつても、なか〳〵歸つて來なかつた。瞳は、妹の歸りが待ち遠しかつた——と云ふよりも、子爵が待つてはゐないかしらと云ふことが、妙に氣にかゝつた。彼女は、二階の自分の居間に居ながら、少しも氣が落着かなかつた。早く行つて、いつもの楓の樹の下に坐りたくなつて來た。もう三十分もすれば、妹が屹度歸つて來るだらうと思ひながら、何故だか妹なしに自分一人で行つて見たい氣が動いた。自分一人限りで、子爵と向ひ合つて坐ることを考へると、彼女は何となく胸が躍つた。それは、恐ろしいけれども、嬉しいことに違ひなかつた。そつと階下に降りて見た。母に「お前一人で行くのかい」などゝ言はれると、出にくいと思つてゐたが、母の姿は何處へ行つたのか見えなかつた。彼女は、庭へ降りて、母の姿が見えないが妹がまだ歸つて來ないかと振り返つて一度確めると、禁制の場所へでも、忍んで行くやうな足取で、又若い牝鹿が獵夫の矢先を逃れようとするやうな身輕さで、彼女の家と子爵の畫室との境目である雜木林の中へ、小走りには入つた。

雜木林を抜けると、いつもの位置に畫架を置いて、畫布に向つてゐる子爵の後姿が直ぐ眼についた。なぜか、その後姿が見えると、急に元氣が脫けて、悄氣て、そのまゝ歸つて、妹と一緒に引き返さうかと思つたりして、一分ばかりぼんやり思案をしてゐると、ふと何氣なく振り返つた子爵と顏を合はした。

「おや、いらつしやい。なぜ、そんな處でぼんやりしてゐるのです。」
瞳は、きまり惡げに笑つて、挨拶すると、子爵の傍へ近づいた。

「今日は、お一人？」

「はい、妹と一緒に參るつもりでしたのですけれど、まだ東京から歸つて參りませんの。」

瞳は、言ひ譯するやうに言つた、

「なに結構ですよ。お一人で結構ですよ。僕は、その方が結構です。」

さう言つて、子爵は瞳のために、籐椅子を直して呉れた。

瞳は、いつものやうに坐つたけれども、今日は最初の日よりも、もつと氣持が落着かなかつた。胸の海に暴風が起つたやうに、心がわく〳〵と波打つた。平常よりも、子爵との距離が近いやうに思はれ、平常よりは子爵が自分の顔を、ジロ〳〵見るやうに思つた。畫架の方へ向けてゐる左の半身が、夏の太陽の直射をでも受けてゐるやうに、ぢりぢり熱くなつて來るやうな氣がした。

三十分ばかり坐つてゐると、いつものやうに女中が、お茶とお菓子とを持つて來た。

「お疲れでしたらう。少し休みませう。」

子爵は、さう言つて瞳を廊下に置いてある卓の方へ誘つた。

二人限りで、こんなに間近く坐るのは、初めてゞあつた。

瞳は、顔中がこはばつたやうに、言葉も笑ひも容易に出て來なかつた。

子爵は、いつものやうに微笑を絶たなかつた。今日は、いつもの洋服とは違つて、結城の細い飛白に、同じ結城の紺無地の羽織を着てゐたが、それが長身の身體にぴつたり合つてゐた。色が透き通るやうに白く見えた。

「僕は、こんなに快く製作したことはありませんよ。また、こんなによく描けたこともありませんよ。」

子爵は、本當に感激してゐるやうに、その白い頰を、少し赤くしながら言つた。

瞳は、何とも言へないので、默つて肯いた。

「やつぱり、描いて居るものに、感激があるからですな。つまり、貴女が快く姿勢して下さるからですよ。」

子爵の言葉の意味が、朧げに感ぜられると、瞳は顔が、カッと熱くなつた。それを、隱さうとするので、顔の表情が、更に混亂した。彼女は、微笑を含んだ顔を眞赤にして、聽いてゐた。

「僕は、肖像畫も、幾度も描いたことがありますがね。商賣人のモデルぢや、何うも氣に入らないのです。それかと云つて、自分の好きな顔を持つてゐる女性を、自由に連れて來られる譯ぢやなし。本當に貴女になんか坐つていたゞけるなんて、こんな愉快なことはありませんよ。本當に感謝してゐるのですよ。」

「まあ！　そんなに仰しやつては却つて……」

瞳は、それ丈辛うじて言つて、後が言へなかつた。胸の裡にある嬉しさと、幸福さとが熟く飴のやうに溶けてゐた。

「僕が、日本畫の大家の中で、一番尊敬してゐる靜湖先生のお嬢さんと、かうして親しくお話が出來るなんて、全く奇緣ですな。」

「本當にいろ〳〵お世話になりまして、母など、大變欣んでゐるのでございますよ。」

瞳は、低いけれども、心の底から言つた。

「なに、そんなお禮に及ぶものですか。貴女が、かうして坐つて下されば、そのお禮は十分です。却つて、僕の方からお禮をしなければならない位です。」

二人は、もつと何か親しい言葉で、もつと何か熱烈な言葉で、自分達の心持を打ち開けたいやうな欲求に驅られて、しかも容易にその言葉が、見付からないで、もだえて居るやうな心持で、暫くの間默つてゐた。

「失禮ですが、まだ御結婚はなさらないのですね。」

子爵は、その明快な口調を、少し曇らせながら訊いた。瞳は、顏を赤くしながら、さし俯いて低い聲で答へた。

「はい。まだ、なか〳〵。」

妙に座が白けて、二三分の間、二人ともお茶ばかりを啜つてゐた。

「僕も獨身です。」子爵は、とつ付けたやうに言つてから、少し狼狽して顏を赤めた。

「もう、家の者はみんな結婚しろ結婚しろと言ふのですが、家職達の持つて來る緣談が、どれもこれも氣に入らないのです。是非とも、同族でなければいけないとか、同じ華族でも新華族はいけないとか、そんな下らないことばかりを言つてゐるのですからね。所が、華族の娘なんて云ふものは、みんな精神的には、少し足りないものばかりですよ。長い間、頭を使はなかつた故で、顏を見ても、直ぐ

分りますが、智慧の光がないんですよ。僕は、人形のやうに、ただ美しい女は、嫌ひですよ。美しい藝妓などにも、たゞ綺麗丈で、少しも精神的な光のないものが多いですが、どうも華族の娘にそんなものが多いのですよ。たゞ綺麗丈で、精神的の美しさがない人は嫌ですね。そんな意味で、僕は大抵の緣談を斷つて來たのです。僕は本當に、自分の理想に叶つた人があれば、家職の者の反對などは、斥けて直ぐ結婚するつもりですが。」

瞳は、子爵がなぜ自分の前で、そんな話をするのか分らなかつた。が、自分の前で、獨身であることを言つたり、華族の娘達を、貶したりするのを見ると……もしかすると……そんな事を考へると、益々頭が混亂してしまつて、ただ默つて子爵の言葉を聽いてゐる外はなかつた。

子爵は、瞳が赤くなつて、うつむいてゐるのを見ると、暫く默つてゐたが、

「僕はあの遺作展覽會で、お目にかゝつた時から、何だか貴女には親しみを感じたのです。一度何處かで會つたやうな。尤も、後で考へて見ると、あの會場で「俠妓圖」に見惚れてゐたので、貴女にお目にかゝつたとき、貴女のお顏が、圖中の美人に似てゐるため、直ぐ親しみを感じたとも思ふのです。とにかく、僕と貴女とは……」

さう言ひかけて、瞳の胸が次の言葉を待つて顫へてゐた時、二人の世界は、突然の闖入者に駭かされた。

「まあ。お姉樣、一人でいらしつて居たの。」

瞳は、何か惡い事をしてゐる最中を見付けられたやうに狼狽して、その方を見ると、妹の都が、

外出歸りを直ぐ來たと見え、薄紫の地を山まゆで、所々白くぼかした錦紗の羽織を着て、初夏の日の光が降りそゝぐ明るい午後の庭にけざやかに突立つてゐた。

「私お姉様が待つてゐらつしやるかと思つて、大急ぎで歸つて來たのよ。」

都は、心持姉を非難するやうに言つた。溫和しい瞳は、正面からさう言はれると、返事が出來なかつた。平素は、こんな時、輕く取りなして呉れる子爵までが、當惑を紛らすやうに、たゞ笑つてゐるばかりだつた。

「柳田さんの處へ、丁度田村さんが來合はせてゐて、もつと遊んで行け、もつと遊んで行けと言はれたのを、振り切つて歸つて來たのよ。お姉様、一人ぢやいやだと仰しやるのですもの。」

都は、むろんムキではなく、笑ひながらであつたが、姉を非難しつゞけた。瞳は、默つて聽いてゐた。たゞ、元は此方から頼んで、來て貰つてゐたのだから、たとひ自分一人で來たからと言つて、何にもそんなに、しつこく言はなくてもいゝ。なぜ、妹は自分が一人で子爵の傍へ來たのを、そんなにしつこく非難するのだらう。そんなことを考へると、今まで澄み切つてゐた瞳の心に、苦い滓のやうなものが、一片二片溜りかけて來た。妹の非難が、ほんのわづかではあるが、何だか意地わるく憎らしく、聞かれた。

ある夕暮

その翌る日から、四五日の間、姉妹は毎日のやうに連れ立つて、子爵の畫室を訪ねた。肝心のモデ

ルになる姉よりも、妹の方が時間が來ると、屹度姉を誘つた。妹が、そんなに熱心になつたのが、瞳には何と云ふことなしに、いゝ氣持がしなかつた。その上、瞳がぢつと坐つてゐる時でも、都は子爵と絶えず、話しつゞけたり、冗談を言つたり、笑つたりした。それを默つて、快い談笑の中にも入れずに、ぢつと見てゐなければならない瞳は、味氣ないやうな寂しい氣がし續けた。なぜ初めから、妹などに頼んだのであらう。そんなこと迄、後悔せられた。四月の末、繪が殆ど完成されるまでこんな日課が繰り返された。

五月の一日だつた。瞳が、晩の御飯を食べて、邸内を一廻り歩いて門の處まで來ると、其處でばつたり和服姿の子爵と邂つた。いつも、製作の日課が終ると、直ぐ東京へ歸る習慣であつたのだが。

「あら。まだゐらつしつたの。」つい言葉が輕く出た。

「今日は、此方で宿まるのです。折々は、靜かな郊外の家に寢て見たいものですからね。それに、この二三日本が讀みたくなつたものですから。」

瞳は、最初の言葉が輕く出たのに拘はらず、もう言ふことがなくなつて、默つてもぢ〳〵してゐた。

「御飯がお濟みになつたのですか。」

「はい。」

「ぢや、其處らまで、御一緒に歩いて來ませうか。」

「はい。」

瞳は、會話の勢ひから、ついさう答へてしまつた。が、こんなに自然に相手から誘はれたのをいや

だと斷ることは出來なかつた。が、二人限りで歩くことが、何となく恐ろしく氣がさした。燗子でも來て呉れゝばいゝ、さう言つて燗子を誘つて來ようかと思つたが、燗子を誘へば、都も一緒に來るに違ひない。都が一人で喋つてしまふのだと思ふと何となくねたましく思はれたので、彼女は少し不安を感じながらも、一人で子爵と連れだつた。

日が暮れるのが遲いので、六時が過ぎてゐたけれども、空も地も明るかつた。太陽の名殘りの光が空に流れてゐた。

二人は兩側に生離の並んでゐる路を、新井の藥師の方へと歩いた。此の邊には、八重櫻が、非常に多かつた。路の兩側に、綠門形にずつと、續いてゐた。もう、七八分まで散つてゐたが、中にはまだ昔の遊女のやうな、なやましい美しさを示して、春の名殘りを曳いてゐるのもあつた。人氣の少い通りは、寂しく靜かであつた。

二人とも、口數が少かつた。胸一杯に言ふことがあつて、口に出さうとすると、何にも出て來ないのであつた。

「中野はお氣に入りましたか。」

藥師の御堂が見える通りに出た時、子爵はやつと、沈默の呪文を解かれたやうに言つた。

「はい。やつぱり、郊外はようございますわねえ。」

「どうも、中野もこの頃は餘りよくなくなりましたよ。東中野の方が、よつぽどいゝのですよ。郊外らしい感じは彼方の方が、より多く感ぜられますよ。」

「でも、私達には、中野でも本當に結構でございますよ。毎朝、早く起きて二階から、武藏野のゆるい丘や、麥畑や、雜木林などを見ますと、本當に氣がせいせいいたしますよ。」

瞳はいつになく、氣がのびのびして、話すことが出來た。妹達に妨げられて、子爵と二人限りで話すのは、幾日目かであつた。

境内には入ると、子爵は心持、御堂に向つて頭を下げてから、御手洗の傍に、店をしまひかけてゐるお婆さんから、鳩にやる豆を幾皿も買ふと、それをパッと石疊の上に、蒔きちらした。ク、、と鳴きながら塒に入らうとしてゐた鳩達が、夕暮の靜かな空氣を搔き亂しながら餌に降りて來た。

二人は、ベンチに腰かけながら、二十分近くも餌を漁る鳩に見入つてゐた。

藥師を出た時には、夕暮が眼に見えて迫つてゐた。門前に並ぶ料理屋などは、すつかり灯が點つてゐた。二人は元來た路を辿つた。

八重櫻の並樹に來た時、二人はまた來た時と同じやうな緊張に囚はれてゐた。路はすつかり夜になつてゐて、葉櫻の間から、乏しい街燈が、弱い光を投げてゐた。

瞳は、遲くなりすぎたことを心配しながら、寂しい路を、子爵に寄り添つて歩いてゐた。ある角を曲つて、もう自分達の家の門が、一町ばかりになつた時、彼女はふと、熱い男性の息を、左の頰に感じたかと思ふと、男の手が輕く自分の肩を抱擁するのを感じた。その刹那、彼女の全身は、火のやうに燃えた。彼女は、ハッと駭いて身を退らうとしたが、その輕い抱擁が、千斤の重みを持つて、何うしても身を退けることが出來なかつた。彼女は、男の手を肩に重く感じ、それを拂ひ除けねばならぬ

と思ひながら、半町ばかりもそのまゝで歩いた。彼女の心臓は、破れんばかりに鼓動し、息が止まりさうになつた。

その時、再び男は彼の左の手で、彼女の左の手を取つた。彼女はどうかして手の方丈は、退かうと思ひ、少し力を入れて試みたけれども、男はより強い力で、それを放さなかつた。

「ゆるして下さい。僕は、貴女を自分のものにしないでは居られなくなつたのです。突然、こんな態度に出て、僕はそれを恥ぢてゐるのです、僕はそれをどんなに恥ぢてゐるか、知れません。でも、僕はかうせずには居られなかつたのです。」

男が、さう言つた時、夕闇の中に人の氣勢がしたので、彼は少し狼狽して瞳から放れた。

瞳の胸には、恐怖と歡喜とが、渦を巻いてゐる。彼女自身、男を愛してゐないとは言へなかつた。男にかうした態度に出られて見ると、自分が手を差し出さうとしてゐるのを見拔いて、向うから力強く手を出して、呉れたものとしか思へなかつた。彼女は、欣んでその手を握り返さねばならないのだ。さう思ひながらも、彼女は恐ろしかつた。男が、自分を離れると、急に身體に顫へが出て、足が地に着かないやうな氣がした。

夕闇の中の人は、近づいて來た。それは仕事歸りの職人らしかつた。その人が過ぎた後、子爵は再び瞳の傍へ寄り添つて來た。

もう門までは、二十間ともなかつた。

「僕は、貴女のお言葉を聽きたいのです。貴女は、僕の愛を返して下さるでせうか。僕を少しでも、

愛してゐて下さるでせうか。」

子爵の聲は、可なり顫へを帶びてゐた。どんな女性だつて、こんな問に容易に答へることは出來ない。それは、大抵の女性が、一生に一度しか正當には答へられない問である。まして、烈しい昂奮で混亂し切つてゐる瞳には、容易に答へられなかつた。

「僕を愛してゐて下さるでせうか。」

瞳は黙つてゐた。

「僕が、惡いのです。こんなに突然、貴女を駭かして、全く僕が惡いのです。だが、僕としてはさうしないではゐられなかつたのです。僕を許して下さるでせうか。そして、僕を愛すると、一言でも言つて下さるでせうか。」

堀田義輔の言葉は、凡てを燒き盡さねば已まないやうに、熱烈であつた。

瞳は、聲を出さうにも、口が乾き切つて、言葉が容易に出ないのだ。

女が黙つてゐるので男は焦つた。

「たつた一言でいゝのです。返事をして下さい。僕を愛してゐて下さるでせうか。僕を。」

男は、再び彼女の頰に熱い息をかけながら訊いた。

瞳は、混亂した頭で考へた。そして、自分の心持を、自分で問ひ返して見て、やつぱり愛してゐると答へる外はないのを知つた。

「愛してゐて下さるのですか、僕を。」

瞳は、點頭いた。が、暗いので彼女のかすかな點頭きは、男に分らなかつた。

「愛しては下さらないのですか。」

女は、頭を振つた。が、それもかすかなので、男には分らなかつた。

「愛してゐて下さるでせうか、僕を。」

瞳は、點頭いた。その時、二人は自分達の家の門に點いてゐる街燈の光の裡に來てゐたので、女の點頭いてゐるのが、男に分つた。

＊　＊　＊　＊

家へ歸つた時、姉の歸宅を知つて都が、いち早く玄關へ出て來た。そして、駭いて叫んだ。

「まあ、お姉様。何してゐらしつたの。お顏が眞蒼よ！」

瞳は、それを聞き流して二階の居間へ上つた。そして、父が遺愛の華奢な紫檀の机にうつぶして、さめ〴〵と泣いた。むろん、それは決して悲しみの涙ではなかつたが。

姉の心妹の心

瞳は、義輔の烈しい愛慕の囁きを聽いてから、忽ち世の中が、急轉したやうに思つた。父の急死のために、灰色がかつて來た世の中が、義輔の言葉で、忽ち目も覺めるやうな綠に、塗り換へられた。

その夜は、夜通し、まんじりともしなかつた。一家の中では、一番質素で、虔しい彼女であつたのに、その夜のさめがちな夢には、純白な夜會服を身につけて、何處かの大夜會に、夫に——それは、

むろん義輔であつたが——手を取られて、まばゆい饗宴の大廣間に、羞ぢらひながら、は入つて行く自分を見出したり、帝國ホテルらしい、新しい建物の玄關に、夫と待つてゐると、綠の制服を着たボーイが『堀田さんの自動車！　堀田さんの自動車！』と高く呼んでゐる聲に、駭いて目が覺めたりした。

美しい瞳は、今までに異性から想はれたのは、これが初めてゞはない。跡見女學校時代に、一人の大學生から、執念深く想はれて、學校からの歸途を毎日のやうに、後を追はれたこともあつた。尾藤と云ふ父の門下生からも、熱烈な戀を受け、つぎ〴〵に、烈しい手紙を貰つた。が、その頃十八になつたばかりの彼女は、それに何う答へていゝのか、オロ〳〵してゐる裡に、母が氣づき、尾藤をそれとなく遠ざけたが、彼は直ぐ肺を病み出し、片瀨の方へ轉地し、半年も經たない裡に、死んでしまつたが、病床で血を吐きながら、瞳の名を呼びつゞけたと人傳てに聞いたこともある。その外、手紙を寄越したり、それとなく接近しようと計つた異性は、瞳に分つた丈でも、十人に近かつたが、上ついた處のない瞳の、胸の金の扉は今までは、可なり堅く閉ざされて、外から訪ふ聲には、容易に返事をしなかつたのである……が、今、義輔の、優れた風采や、亡き父靜湖に對する敬虔な態度が、いつの間にか、瞳の心をそゝり、その上父が死んでから、世の中の寂しさが、浸み込み、何となく強い何者かに縋らうとしてゐた彼女の心持が添ひ、彼女の心が男の方に、すつかり牽き付けられてゐる時に男は容赦もなく兩手を差し伸べて、瞳の心を力強く摑んでしまつたのである。

愛を囁いた男の態度が、少し無躾で唐突であつたことや、いきなり彼女の肩に手をかけたことや、

そんなことも瞳が、もつと冷静であつたならば、いくらか非難したかも知れないが、人間は戀人に對しては、批判の眼が全く盲ひてしまふもので、瞳は義輔の率直な大膽な告白が却つて嬉しく、頼もしいものに思はれた。

その翌る日も、そのまた翌る日も、瞳はやつぱり義輔の畫布の前に坐つた。その度に、妹の都が定まつてまた、姉と一緒に來た。瞳は、一人で行つてもいゝと思ひ、そんな機會があればいゝと思つたが、午後になつて、いつもの時刻が近づくと、今までは何處かにゐた都が、きつと姉の傍へ來て言つた。

「お姉様。いらつしやいませんか、堀田さんが待つてゐらつしやるわ。」

そんな事、貴女が注意して呉れなくつても、分つてゐる。瞳は、心の裡でさう言ひたかつたが、やさしい彼女は、口では素直に、

「えゝ。いきませう。」と答へて、妹と一緒に連れだつた。彼女は、妹が何うしてこんなに、一緒に來ることに熱心なのか、當人の自分よりも妹の方が、何うしてこんなに時刻を氣にして、缺かさずに隨いて來るのだらうか。それを考へると、堪らなく不安な、不快な氣がした。

彼女が、定まつた位置に坐つてゐると、妹はきつと、義輔の直ぐ傍の芝生の上に、籐椅子をおろして來て腰をかけた。瞳が、虔しく坐つてゐるのに、都は子爵と始終親しさうに話した。そして、二人で樂しさうに聲を揃へて笑つたりした、でなければ、都は得意なハバネラの歌などを小聲で、口ずさんでゐた。

五日の日は、夫の靜湖の命日であつた。その日を記念するために、門下生の間には、五日會と云ふ會が出來てゐて、毎月亡き師匠の家に集まることになつてゐた。中野へ引越してから、今日が初めての五日會だつた。家が狹いので、遠慮しようかと云ふ門下生からの申出があつたが、きかぬ氣の俊子未亡人は、新邸の披露旁いつもよりはもつと盛大にすると言つて、その準備にかゝつた。朝から、都と瞳とは、晩の御馳走の準備に忙しかつたが、午後になつてから、一通り片づいたので、瞳は輕い疲勞を癒さうと、廣い縁側に置いてある安樂椅子にそつと腰を下した。

庭が少し暗くなつたと思はれるほど、若楓の葉がしげつてゐた。楓の中に交つた柏の大樹が、水色の若々しい葉を思ふさま擴げてゐるのや、それと並んだ桐の木が、紫の釣鐘形の花を、梢一杯に附けてゐるのなど、いかにも五月らしい爽かさだつた。

瞳が、一休みしてゐると、都が間もなく後へ來て立つた。

「お姉様！」

瞳は、默つて妹を見た。

「私、この頃時々悲しくなるの。どうしたんでせうね。」

あの快活だつた妹が！　と思ふと、瞳はその原因が疑はれて、また不安になつた。彼女に新しい物思ひがあるとしたならば、それは……。

「晩春は、いけないと云ふのね。私も、何だか今年の春はずつと淋しかつたの。」

「お姉様も、さう！」

都は、姉と並んで、安樂椅子に腰を下した。

「けれども、私、この頃さう思つてよ。人つて思ふほど淋しくならないものね。私、お父様の亡くなられた時には、どんなになつて行くのだらうと思つてゐたけれども、やつぱり……」

さう言つて、瞳は口ごもつた。義輔のことを考へると、世の中の凡てが、夜が明けて來るやうに、眞紅の色に輝き始めて來るのだつた。

「さう。私なんか……」都は、物足らぬげに口ごもつた。

瞳は、話してゐる裡に、都の心持にある翳が段々氣になつて來た。父が死んでからも、母子四人の中では、一番悄氣てゐなかつた都が、急に今頃になつて、こんな心細い言葉を言ひ出すのが不思議だつた。

「でも、あなたなんか、姉妹の中では一番幸福ぢやないの。第一、菅さんと云ふ方があるのぢやないの。」

菅と、都との間は、周圍から認められてゐた。母のおとしも二人の間を、約婚同様に取扱つてゐた。

「でも、……」都は、少し顏を赤らめて、何か不平らしく言はうとした。

「でも何うしたの。」

「菅さんと云ふ方、私なんだか、この頃頼りにならないのよ。」

「まあ！」瞳は、妹の告白に、ハツと胸を衝かれたやうに思つた。

「そんなことは、ないでせう、眞面目で、いゝ方なんですもの。あんないゝ方が、頼りにならないなんて言つてはひどいわ。」

瞳は、やさしい裡に、可なり妹を責める心持で言つた。

「でも、私何だか、あの方に對しては、青年といつたやうな心持しかないのよ。私、この頃、男らしさと云つたやうな者を、求めてゐるのではないかと思ふのよ。強い、男性らしさと云つたやうなものを。」

瞳は、しばらく言葉が出なかつた。都と菅との戀愛が、元來相對的でなく、孰らかと云へば、菅の方が常に働きかけて、都は輕くあしらつてゐると云つた風に姉には思はれてゐたのだが、かうまで急激に都の心持が變らうとは、豫期しなかつた。

「何かあつたのぢやなくつて。」

瞳は、中野へ來てからも、菅と都とが二三度、一緒に東京へ行つたことを思ひ出し、二人の間に、都の心持を變へるやうな、事件が起つたのではないかと訊いて見た。

「いゝえ、何もないのよ。」

都は、華やかな明るい顏を姉の方へ向けて、無雜作に答へた。二人の間に、何もないとすると、都の心持が變るのには？　さう思ふと瞳は、ます〳〵ある不安に囚はれた。

「お姉様、まだいらつしやらない？」都は、突然話を換へた。

「えゝ何？」

「まだいらつしやらなくつてもいゝ？　堀田さんは今日、描き上げてしまふと、仰しやつてゐたのぢやない？」

「えゝ、さう。でも私今日は失禮しようかと思つてゐるの、昨日も一寸さう言つて置いたのよ。」

「でも、それぢや悪いわ。折角、油が乘つてゐらつしやるのですもの。それに、屹度もう東京から來てゐらつしやるわ。」

瞳は、都が熱心なのが、この場合更に不快であつた。

「でも、お母さんがお忙しいのに、お隣りへ行つてはいけないわ。」

「いゝぢやないの。お姉様、もう何も用事は殘つてゐないのですもの。かうして置けば、お客様がお見えになるまでは、暇だわ。」

「でも、二人揃つて行つては悪いわ。」

瞳は、妹が快く「ぢやお姉様丈でも行つていらつしやい。」と言つて呉れるのを、どんなに望んでゐたらう。が、都の答は違つてゐた。

「いゝぢやないの。また湖舟さんなんかゞ來て、馬鹿話を聞かされるより、お隣りへ行つて、西洋の繪でも見せていたゞく方が、どんなにいゝか知れないわ。さあ、行きませう。屹度、もう待つてゐらつしやることよ。」

瞳は、こんな時、意地にでも行かない方がいゝと思つたのだが、子爵が純白のワイシャツ一つになつて、畫架を庭へ出してゐる姿などを考へると、やつぱり足が何となく浮き立つて、妹に勸められるともなく、自分の部屋へ行つて、いつも坐をする時に着る白つぽい瀧縞のお召に着換へて來た。

都は、庭に立つて姉を待ちながら、散つてゐる桐の花を拾つて、鼻にあてゝ見てゐた。

二人が、袖を並べて子爵の畫室へ行く雜木林へは入りかけた時だつた。

「都さん！　都さん！」後から若い男の聲がした。

「あら！　菅さん！」

都は、振り返つた。紺飛白の對を着た、淺黑い細面の菅が、緣側に立つて、二人をさしまねいてゐた。瞳は、微笑しながら默禮した。

「お姉様、一寸待つてゐてよ。」

都は、姉の返事も待たずに、菅の處へ走つて行つた。

「一寸待つてゐてね。菅さん、直ぐ歸つて來るから。」

「何處へ行くの。」

「一寸お隣りまで。お姉様のお伴、直ぐ歸つて來るわ。」

菅は、一寸暗い顏をした。

「ぢや、早く歸つて來て下さい。」

「えゝ。直ぐ。」都は、さう言ふと直ぐ、姉の處へ歸つて來た。

「みやちやん。あなた、家にゐたら何う！」

「いゝのよ。直ぐですもの。」都は駄々つ子のやうに言つた。
「だつて、菅さんが一人ぢやわるいことよ。」
「でも、待つてゐて下さるわ。きつと。」
瞳は、もう妹の態度を、無意味に取ることは出來なかつた。戀人が來てゐるのに、何故自分と一緒に行きたがるかと思ふと、妹の心の裡にある翳が、ハツキリと、分るやうに思つた。
妹ではあるけれども、自分の競爭者かも知れない！　さう思ふと、瞳の心は直ぐこはゞつて、妹に對して、もう自由に口さへ利けなくなつた。
二人は、全くちぐはぐな心を懷いて、子爵の畫室へ來た。義輔は、緣側の籐椅子に腰かけて、佛語の小說を讀んでゐたが、二人の姿を見ると、いつものやうに快活に挨拶した。
「やあ！　いらつしやい。大丈夫ですか、今日はお差支があつたのではなかつたのですか。」
「いゝえ。大丈夫。」都が、答へた。
「さう、ぢや、今日で仕上げてしまひませう。」
義輔は、直ぐ仕事にかゝつた。瞳は、義輔に默禮した丈で、だまつて何時もの位置に坐つた。今日の妹が、可なり憎らしく思はれた。一日の夕方、子爵の心を打ち明かされて以來、今日まで瞳は、子爵と二人限りになつたことがないのであつた。義輔が、それを望んでゐる筈だし、瞳もそれを、心の奧ふかく、望んでゐるのだが、妹が影の形に從ふやうに、彼女の傍を離れないのである。心なしにではあらうが、姉の一身を監視してゐるかのやうに。

都は、義輔の直ぐ傍へ坐つてゐた。
「お姉樣は、今日は忙しいと言つたのですけれども、私が連れて來てあげたのですよ。」
「さうですか、それは何うも有難う。」
「だつて、さうでせう。一氣にお仕上げにならないと、氣がぬけてしまひますわねえ。」
都は、華やかな顏に一杯の媚を浮べた。
義輔は、一寸返事に困つたやうに、ためらつた後、
「でも、お忙しいのに、わざ〳〵來て下さつてはお氣の毒でしたね。」
「いゝえ。そんなに忙しいと云ふ程でもないのですよ。」
瞳は、妹の言葉が、ヂリ〳〵と胸にこたへて來た。さうした言葉は、妹が、堀田の歡心を得るための言葉としか考へられないのだつた。瞳は、平靜に坐つてゐたけれども、心は可なり苛だつてゐた。
暫くして、都はまた義輔に話しかけた。
「ねえ、堀田さん、私、お願ひがあるのですよ。」
「えゝ、何です。」
「あの、お姉樣が、濟んだら、今度は私を描いて下さらない？」
「えゝ、一つ貴女にも坐つていたゞきませう。」堀田は、無雜作に答へた。
「おゝ、うれしい。うれしい！　ぢや明日から、伺ひませうか。」

都は、駄々つ子のやうにうれしがつた。瞳は、それを聽いてゐると、心が鉛のやうに重くなつた。妹が、自分の代りに、幾日も子爵に面して坐ると云ふことが、瞳には堪らなかつた。今度は反對に自分がいつも瞳に附き添つて來ればいゝわけだが、瞳には妹のやうな、さしでがましいことをすることは、到底思ひも及ばなかつた。彼女は、子爵が、何う答へるか、心をとゞろかしながら、待つてゐた。

「さあ。それは、少し氣が早いですな。まあ、これを仕上げたら僕も少し休息したいし、同じやうな畫因でも描けませんからな。四五日してから、やりませう。」

瞳は、それを聽いて、少し安心したが、四五日の後を考へると、直ぐ心が暗くなつて、妹の心の裡が不安で、妹の態度にある憎惡をさへ感じて來た。

ある四角關係

子爵の仕事が了ると、姉妹は、前と同じやうに、お互にちぐはぐな心を懷いて歸つて來た。見ると、先刻二人が腰かけてゐた安樂椅子に、菅がぼんやり腰かけてゐた。恐らく、先刻から一時間近くの間、快快として坐つてゐたのだらう。瞳は、何だか氣の毒な氣がして、菅の顏を眞面から見ることが出來なかつた。

「お待たせして、すみませんでした。」都は、何のこだはりもないやうに言つた。

「えゝ、なに。」菅も、こだはりなく答へるつもりであつたのだらうが、言葉がまるきり硬ばつてしまつてゐた。

瞳は、菅の心持をなぐさめようと思つて言つた。

「菅さん、暫くでしたわねえ。」

「先の日曜に伺つたではありませんか。」

「あゝ、さうでしたわねえ。でも、駒込にゐた時は、毎日のやうにお目にかゝつてゐたから、此方へ來て、四五日もお目にかゝらないと、何だか一月もお目にかゝらないやうな氣がしてよ。」

瞳のやさしい言葉が、菅の暗くなつた心を、少し明るくした。

「何か、この頃お描きになりまして？」

瞳は、暗い顏をあげて、答へた。

「いゝえ。この頃、何も手につかないのですよ。」

さう言はれると、瞳は菅の心持が分るやうな氣がして、何とも言へなくなつた。

都は、姉と菅との問答に、注意を向けないやうに、庭園の新綠の梢を見まもつてゐた。濃い若葉の向うに、欅の大樹が、四五本見え、その高い枝と枝との間から、五月の薄青に澄み切つた大空が見られる。

その時、母の居間から、湖舟の高い笑ひ聲が聞えて來た。

「あゝ、湖舟さんが來てゐるの。」

さう言ふと、瞳はそれを機に、立ち上つた。戀人同志の不和は、彼等自身で始末させるのが、一番

いゝと思つたから。

瞳が去つた後、菅と都との間には、一寸ねぢけた沈默があつた。都は、緣側に立つたまゝで、少してれたやうに默つてゐた。

「都さん！」

「えゝ。」

都は、一寸菅の方を見た。

「僕は、お返事を待つてゐたのです。それで來なかつたのです。」

「えゝ。」都は、曖昧に答へた。

「何故、お返事を下さらなかつたのです。僕は、そればかり待つてゐたのですのに。」菅は、怨めしげに言つた。

「もう、そんなこと、仰しやらないで下さい。」都は、一寸すねたやうに言つた。

「えゝ。何ですつて？」

「そんなに、仰しやらないでもいゝぢやないの。私、たゞお返事を書かなかつた丈ぢやないの。いろいろこの二三日忙しくつて、手紙なんか書いてゐる氣分になれなかつたのですもの。」

都は、一寸媚的に笑ひながら言つた。

「さうですかね。でも、先刻なんか、そんなに忙しくはなかつたやうですね。」

「先刻つて！」都は、一寸いぶかしさうに訊いた。

「先刻ですよ。僕が來た時ですよ。お隣りへ行く暇があつたら、僕と話して下すつてもいゝぢやありませんか。」

都は、さう言はれると、一寸赤くなつて、言葉に窮した。

「僕は、どうもこの頃疑ひ深くなつたのです。貴女の心が、何だか信じられないのですよ。四月半ばでしたね、彼方のお宅でお話しゝたのは。あれからわづか二十日にしかならないのに、貴女の心が、可なり變つて來たやうに、僕に感じられるのですよ。」

「そんなことはないわ。」都は、あわてゝ打ち消した。その言葉が、少しも心の底から出てゐなかつた。

「僕は、貴女とのお約束もあるし、今年の秋までには、一つ自信のある物を描かうとしてゐるのです。けれど、貴女のことが氣にかゝつて、何も出來ないのですよ。以前はこんなぢやなかつたのだがな。」

「私のことなんかで、勉强のお邪魔になるんでしたら、どうぞ介意はないで下さい！」

「何ですつて？」菅は、顏色が變つた。善良な彼は、カツとした。淺黑い顏が、見る〳〵赤くなつた。

「何うしてゞす。何うしてゞす。よくそんな冷たいことが仰しやられるんですね。仕事の邪魔になるのなら、思はないで呉れつて。そんな冷たい、そんな理智的な。僕が、仕事なんかよりも、貴女の方をどんなに、大事に思つてゐるかゞ、貴女に分らないかなあ。僕は、そんな冷たい……」

玆が、若し周圍に人の居ない場所だつたら、菅はきつと慟哭したに違ひないのだが、つい一間隔てた茶の間には、瞳や未亡人や湖舟などがゐるので、彼は烈しい昂奮を、ぢつと嚙みしめて、低い聲で都をなじつた。

「私、そんな意味で、言つたのではないのだわ。そんなに取られては困るわ。」

都は、菅の昂奮が餘り激しいので、あわてゝ宥めるやうに言つた。が、その言葉にも本當の感情は籠つてゐなかつた。

「さうですかね。そんな意味ぢやなかつたのですか。だが、貴女が僕に對して、急に冷淡になつたこと丈は、事實ですね。」

「貴方が、さう感じる丈ぢやないの。」都は、媚びるやうに言つた。

「さうかな。だが、みやちやん。貴女は、よくお隣りへ行くやうですが、堀田と云ふ人をよく知つてゐますか。」

「畫家としてゞすか。」

都は、一寸顏を擧げた。

「畫家としてゞはありませんよ。畫家としては、問題ないぢやありませんか。あんな素人畫家！」

「素人畫家だつて、まあひどい！　だつて帝展へだつて、入選してゐるぢやありませんか。」

それだのに、貴方は一度もは入つて居ないではないか、そんな言外の意味が、直ぐ感ぜられたので菅は、又カッとなつてしまつた。

「帝展へ、は入つたのが何です。堀田の入選なんか僕は怪しからないと思つてゐるのです。審査員の熊田さんは、堀田君の先生ぢやありませんか。同じ審査員の山岡さんは堀田君と同じ子爵だし、堀田君の入選なんか、僕はそれ丈の技倆を認められないんです。」

「でも、お父樣の審査なんか、全く公平無私だつたわねえ。湖舟さんなんか、お父樣に幾度頼んでも駄目だつたぢやないの。」

「先生は、別ですよ。洋畫の審査なんか日本畫に比ぶれば、全く甘いんですからね。」

菅は、都が堀田を辯護しようとするのが、口惜しくて、たまらなかつた。

「さう。でも、私堀田さん、抽くないと思ふわ。」

菅は、頭から水を浴びせられたやうに思つた。

「さうですかね。僕は、うまいとは思ひませんね、あの程度ぢや殿樣藝ですからね。」

都は、まだ何か言はうとしたが、考へ直したやうに、話頭を換へた。

「まあ、それは孰らだつていゝわ。畫家としての堀田さんは、問題外として、貴方の仰しやることは。」

都は、何と云ふことなく殺氣だつてゐる。

「いや、かうなつちや、畫家としての堀田君も大に論じたいな。だがそれは別に論ずるとして、僕の言はうと思つてゐることは、人としての堀田君ですよ。」

「えゝ！　人として。」

都は、驚いて目を刮つた。華美な丸顔が、昂奮のために、赤く上氣して、唇が眞赤だつた。

「さうです。人としてゞす。僕は個人の中傷なんかしたくないのですが、僕としては、一言丈言つて置きたいのです。堀田と云ふ人は、評判の餘りよくない人ですよ。」

都は、とがめるやうに菅を見た。

「だつて、人の噂なんか信じられないわ。」

「さうですか、僕も、自分であの人を知つてゐる譯ではないから、斷言は出來ないけれども……」

都は、菅の言葉を嫉妬から來た中傷だと思つた。それ丈彼女は意地になり、菅に反感を持つた。

「さう。でも、折角私達に親切にして下さる方について、貴方からそんなことを言はれるのは、いゝ氣はしないわねえ。」

怒りつぽい都は、つんとしてしまつた。菅も、ムッとして默つてしまつた。暗澹たる顔をしてゐた。丁度、その時瞳はいそ〳〵と奥から出て來た。そして、默つて緣側から庭へ降りようとした。

「お姉様、何處へいらつしやるの？」

「一寸お隣りへ。」

「何うして。」都は、一寸驚いて訊いた。

「お母様が、さう仰しやるのよ。堀田さんに、いろ〳〵お世話になつてゐるから、今日の會へ、向ふで御都合がよかつたら、來ていたゞかうつて。おいしくない御飯でも、食べていたゞかうかつて。」

都は目をかゞやかした。

「それはいゝわねえ。それで、お姉様が、御案内にいらつしやる？」

「さう。」

都は、直ぐ庭へ降り立つた。

「ぢや、私も一緒に行くわ。」

菅の顔が、蒼白になつた。瞳の顔も、少し蒼くなつた。

菅は、一大事が起つたやうな顔付で言つた。「瞳さん。お母さんが、さう仰しやるのですか。」

「えゝ、さう。」瞳は、やさしい微笑を絶たさなかつた。

「さうですかね。僕は、それは賛成しないなあ。」

「なぜ。」瞳は、困つたと云ふ顔をしながら訊き返した。

「だつて、五日會は先生のお弟子ばかりの集まりぢやありませんか。僕は、絶對に異分子は排斥したいと思ひますね。殊に洋畫の人なんか困るな。」

菅が、餘り一生懸命なので、瞳は應對に困つて、モヂ〳〵してゐた。

「湖舟さんに相談したんでせうか。」

「えゝ湖舟さんは、賛成してゐらつしやるのよ。」瞳は、なだめるやうな口調で答へた。

「僕は、絶對に不賛成だな。僕は、そんな異分子を交へるのなら、會員全體に一度相談するのが、本當だと思ひますがね。」

瞳は、美しい眉をひそめて、默つてしまつた。

「そんな事ないわ。」

今まで、默つてゐた都が、急に口を挾んだ。

「なぜです。」

菅は、火のやうな目をして、都を見た。

「だつて、堀田さんを五日會に入れると云つたやうな、そんな重大な問題ではないわ。たゞ、夕御飯だけを一緒にさしあげると云ふのぢやないの。」

都の言葉は、それが可なり道理であるだけ、それ丈菅の胸を、匕首のやうに抉つた。自分の戀人に自分の戀敵たらうとする男を、辯護されるほど、それほど、不快な事が、世の中にあるだらうか。菅は、三斗の酢を飲まされたやうな苦い氣持になつた。若し、相手が自分の愛する女性でなかつたら、彼はきつと、地上へ引きずり倒したかも知れない。

菅は、怒りのために、少し顫ひを帶びてゐる聲で言つた。

「一緒に、御飯を食べる丈、それ丈でも、僕は餘り好みませんね。僕達は、あの會を先生を追慕するための、可なり神聖な會だと思つてゐるのですからね。」

瞳には、菅の心持が手に取るやうに分るので、もう何も言へなくなつた。

「さう。でも、貴方の心持ばかりを、尊重することも出來ませんわねえ。堀田さんには、隨分お世話になつてゐるのですもの。」

都は、――わがまゝな勝氣な都は、菅が反對すればするほど、意地にも堀田の肩を持つた。

菅は、燃ゆるやうな眼で、都を見た。そして、投げ付けるやうに言つた。

「さうですか。ぢや僕は、何も言ふことはない。案内しにいらつしやいよ。」

都は、またあくまでも、意地に出た。

「えゝ行きますとも。お姉様、いらつしやらない？」

瞳は、菅に對する同情と、妹に對する自分自身の嫉妬とで、堀田を招待することを、中止した方がよくないかとさへ考へて言つた。

「でも、五日會の方に惡くはないかしら。」

「そんな事、あるもんですか。それに、堀田さんには、この場合にでも、お禮をして置かなければ、お禮をする機會がないわ。それに、あんなにお父様を、賞めて下さるのですもの。五日會には、屹度欣んで御出席なさるわ。」

「でも。」

瞳は、菅の地獄のやうな顏を見ると、何うしても足が動かなかつた。

「いらつしやらない？　さう！　ぢや私一人で、御案内して來るわ。」

さう言ふと、都は輕く身をひるがへして、呆氣に取られてゐる二人を殘して、雜木林の中へ駈け入つた。美しい模様のメリンスの着物が、ちらりと青葉がくれに見えた。

瞳は、妹から急に突放されたやうな不快な氣がした。妹が、愛人だつた菅を、これほど袖にして堀田の事に、一生懸命になることを考へると、瞳は立つてゐる土地が、グラ〳〵動き出したやうな

不安を感じた。

が、瞳よりも十倍もの暗い氣持を堪へて、菅はぢつと安樂椅子に、石像のやうに坐りつゞけてゐた。

最初の火華

その夜の五日會は、平素のやうには、會員が集まらなかつた。家が、手狹になつたのを遠慮したのか、それとも中野までわざ〳〵出て來るのが、億劫だつたのか、いつも十四五人も集まる會員が、その夜は、その半數にも足りなかつた。

武藏野の天地が、靜に暮れて行つて、夕星の影が、欅の梢にあらはれる頃から、階下の廣間の食卓が開かれた。

楕圓形の大きい食卓には、レースの入つた美しい卓布がかけられて、二つの銀の盛花器にはチュリップやアネモネや、ひなげしなど五月の花が、一杯に盛られてゐ、中央には靜湖が遺愛の柏槇の盆栽が置かれてゐた。

堀田は、都から案内せられると、快く出席した。そして、五日會の人達と、一通り挨拶を濟ませると、特に堀田のために設けられてゐた席に就いた。

堀田の直ぐ左には、都が坐つてゐた。堀田の右には、岡田靜村が坐り、その右に瞳が坐つてゐた。堀田と向ひあつて、菅秀三が、その淺黑い顏を一層暗澹として坐つてゐた。

料理は、駒込時代に出入りをしてゐた料理人を呼んだので、立派な贅澤な獻立であつた。獻立は和

洋折衷で、日本食を主として、時々それと調和するやうな洋食が出た。

子爵の横に坐つてゐる都は、女中が料理を運んで來ると、わざ〳〵自分が、それを中途で受け取つて、先づ一番に子爵の前に置いた。そして、絶えず媚的な微笑を洩しながら、子爵のために食器を揃へたり、杯が空くと、直ぐレモナーデを注いだりした。

「夏や、子爵樣のフォークが足りないよ。直ぐ持つて來なければいけないわ。」

いかにも、主婦らしく、子爵を一人でもてなしてゐるやうな風をした。

それを見てゐる菅の顏は、ます〳〵暗くなつた。彼は、食卓の上を、ぢつと見つめたまゝ、平素は健啖を誇つてゐる彼が、たゞ形式的に箸を運んでゐる丈だつた。

瞳も、むろん快くはなかつた。菅が、悄氣てゐるのが、その原因が、彼女にはハツキリ分るので、胸を裂かれるやうにつらかつた。それと同時に、子爵の愛が、いつの間にか妹の方へ移りはしないかと、思ふと虔しい彼女の胸にも、嫉妬の小蛇がしきりに、のたうち狂ふのであつた。

都は、强氣であつた。彼女は、菅の心持にも姉の心持にも、少しも注意しないやうに振舞つた。

「あゝ爛子さん、貴女先日筍を取つて、堀田樣に叱られたんですつて。」

「えゝさう。」

爛子は、遙か離れて、仲のよい湖舟と一緒に坐つてゐた。湖舟は、爛子を赤ん坊の時から、可愛がつて、今でも娘のやうに親しく、また自分の仕へてゐる姫君のやうに、大事に思つてゐるのであつた。

「さう。私、今日澤山取りましたのよ。えゝ、いゝでせう。堀田さん、私が取つたのならいゝでせう。」

都の眼には、垂るゝやうな媚がふくまれてゐた。

「いゝえ。いけませんな、爛子さんなればこそ許したのです。貴女はいけません。」

子爵は、初めて會つた人々の前で、冗談を言ふのが、恥かしさうだつた。

「さう。許して下さらないの。ぢやいゝわ。その代り、今日の木の芽あへは、召上つてはいけませんよ。おほ、、、。」

「そりやひどい。僕の家の筍を取つてゐながら、食べさせないと言ふのはひどいですな。はゝゝゝ」

菅と瞳とを除く外は、みんな笑つた。

菅の心持とは、無關係に食事はずん〳〵進んだ。酒好きの湖舟は、今日は飲み對手がないので不足さうに座中を見渡しながら、もう自分の前に、お銚子を六七本も並べてゐた。料理は、一通り出てしまつた。御飯を食べるものは、御飯を食べてしまつた。やがて、デザートとして、イチゴで作つたショートケーキが出た。

湖舟は、イチゴが大好物であつた。彼は、むさぼるやうに白いクリームを嘗めてゐたが、先刻からの菅の沈默が、この時堪らなく氣になつて來た。

「菅君！　何うしたんだい！　君は、何をそんなに考へてゐるんだい！　さう考へ込んぢや、折角の

お料理が、臺なしぢやないか。このショートケーキの味、このイチゴの味、このイチゴ位、初夏の味を持つてゐるものはないよ。このイチゴを食つてゐると、僕は本當に初夏の新鮮さその者を食つてゐるやうな氣がするんだよ。だが、君のやうに、さう考へちや駄目だよ。考へるのは、我々に禁物だからな。あの淡々たる日本畫の味、あれは考へて出るものぢやないよ。」

湖舟の醉は、もう可なり廻つてゐたのだ。それは、半分くだを卷いてゐるのだつた。

「我々は、考へ込んだつて駄目だよ。考へたつて、いゝ藝術は出ないよ。藝術を生むものは、澄んだ直感だよ。其處へ行くと、日本畫はいゝよ、一筆風雲を捲き起すからね。日本畫はいゝなあ。矢張りいゝな。其處へ行くと、洋畫は駄目だよ。洋畫になると、もう科學々々で、我々の直感を鈍らすことおびたゞしい！」

湖舟の氣焰は、酒のため、周圍を忘れてゐた。洋畫家である子爵は、苦笑してゐたが、この時笑ひながら言つた。

「一寸、待つて下さい！　其處は、一寸腑に落ちかねますね。」

湖舟は、初めて洋畫家が、席上にゐたのに氣が付いた。彼は、可笑しいほど狼狽して見せた。

「やあ。これは、失禮！　どうも、さう云へば貴方は、洋畫家でしたね。これはどうも。」

湖舟は、食卓の上に手を突いて、謝つたので、皆が笑つた。子爵も、機嫌よく笑つた。

「今言つたこと全部取り消します。取り消し、取り消し。」

湖舟は、頭を上げると、今度は手を、大袈裟に振つた。

「いや、取り消す必要はありませんね。」いきなり横から口を出した菅の言葉には殺氣があつた。先刻から、ぢつと堪へてゐた嫉妬が、憤怒が、堤を切つて一時に迸り出たのだらう。「實際この頃の洋畫の行き方には、僕は賛成出來ませんね。」

菅の語氣が、餘りに鋭いので、一座はハッと靜になつた。

「と、仰しやいますと。」子爵は、不意の敵に驚いて、タヂ〳〵としながらも、流石に落着を見せて言つた。

「今の日本人の洋畫家達は、日本畫から遠ざかること丈を、洋畫の特長とばかり考へてゐるぢやありませんか。僕はその點が、一番不滿です。日本畫の眞價を知らないのです。御覽なさい！　日本の洋畫家が、日本畫を遠ざからうとしてゐるのに反して、フランスの畫家達は、東洋畫の特色を盛に採り入れてゐるぢやありませんか。」

菅は、決鬪をでもする人のやうに、憎惡の眼を光らせてゐた。

「それ丈の理由で、現在の日本の洋畫家を貶されては困りますね。」

子爵も、對手の殺氣に釣り込まれて、言葉が險しくなつた。

「いや、彼等洋畫家は、日本畫卽ち民族と風土とから、生れて來た藝術に對して、盲目なんです。一の民族にとつては、その民族の長い傳統から生れ出た藝術と云ふものを忘却することは出來ないんです。」

「さう云ふことを仰しやると、貴方の尊敬されるフランスの藝術家達も、彼等の傳統を忘れて、東洋

畫を模倣し出したと云ふわけになりますね。」

子爵の論理に、菅はタヂ〳〵として、

「いえ、いゝえ。」と、どもつた。

「そんなことで、藝術の眞價は定まらないと思ひますね。殊に僕なんか、日本畫のいゝ處は、可なり認めてゐるつもりなのです。第一貴方がたの靜湖先生の畫なんか、僕は可なり蒐めてゐるつもりですが。」

「さうですか。僕は、貴方に靜湖先生の眞價が分るとは思ひませんが。」菅は、激し切つてゐた。

「えゝ何ですと！」子爵は血相を變へた。藝術家に取つて、これほどの侮辱があるだらうか。

一座の者は、目を刮つて菅を見た。

「菅君！　そりや云ひ過ぎだよ。取り消したまへ、君。」湖舟が、驚いて口を出した。

「いや、取り消さない。」菅は、頑として首を振つた。

子爵は、眞蒼な顏をして、何か言はうとしてゐたが、ふと考へ直したやうに、立ち上つた。

「僕は、失禮します。」

さう言ふと、さつと部屋を出てしまつた。子爵の態度が、餘りに急激だつたので、一座の者にも、止める暇さへなかつた。

後に殘つた人達は、暫くの間、不快な沈默をつゞけた。さすがの都さへ、思ひがけない結果になつたので、蒼い顏をして、目ばかり大きくあけてゐた。

瞳は、子爵の受けた不愉快さを、直ぐ身に感じた。常の心持も、分つてゐたが、都に對する怒りを直ぐ子爵に持つて行く。そして、又それが餘りに露骨すぎると思つた。これで子爵は、自分の家へ、足踏みしなくなるのではないか、自分に示した愛の告白も、あれぎりで中絶するのではないかと、瞳はその場に居たゝまらないやうな悲しさを感じた。湖舟が、何か言つて菅を責めてゐるのを聞き流して部屋を出た。もう、子爵はとつくに家へ歸つて居るに違ひないと思ひながらも、彼女は庭園へ降りて、子爵の畫室の方へと、無遊病者のやうに、ふら〳〵と歩いた。

庭は、暗かつた。木の芽の匂ひが、其處ら一面にしつとりと流れてゐた。星明りで、木蓮や楓の枝をくゞつた。彼女は子爵に會つて、一言でもいゝから、言葉を交へたかつた。そして、今夜の不始末の詫を言ひたかつた。

彼女は、いつの間にか、畫間來る畫室の前の芝生の處へ來てゐた。ふと、氣が付くと、自分の眼の前の闇に、佇んでゐる人影を見た。白つぽい洋服を着てゐるので、夜目にも、子爵であることが直ぐ分つた。

瞳が、聲を出さうとしながら、躊躇してゐる間に、向うから聲をかけた。

「どなた。都さんですか。」

瞳は、妹の名を呼ばれたので、水をかけられたやうに、がつかりした。

「いゝえ。私。」

「あゝ瞳さんですか。」

子爵の聲は、瞳の豫期したよりも、明るかつたので、瞳はホッとした。

「御免下さい！　只今は、本當に、相すみませんでした。」

「いゝえ。」子爵は、やさしく答へて瞳に近づいた。

「僕も、無禮な奴と思つて、カッとしたのです。周圍に人がゐなければ、本當に毆り付けたいと思つた位です。だが喧嘩しても、つまらないと思つたので、出て來たのです。でも、貴女にさう言つていたゞければ、たいへん氣持がなほりました。」

さう言ふと、子爵はつと進んで來て、瞳の肩に手をかけた。彼女は、肩をすくめて、頭へながら、それでも女特有の嫉妬が、ムラ〳〵頭をもたげた。

「今何うして、私のことを都なんて仰しやつたの。」

「あはゝゝゝ。でも、都さんは、僕のことを、今日あんなに世話して下さつたのですもの。お蔭で、貴女とは、ちつとも話が出來なかつたが。あはゝゝゝ。」

「私のかはりに都が來ると思つてゐらつしやつたの！」

「さうです。貴女が來て下さるなんて、そんな嬉しいことは、とても望めないと思つてゐたのですものの。」

さう言ふと、子爵は彼女を、彼の胸に引き寄せて、いきなり唇を近づけた。瞳は、それを自分の唇で受けるのが、あまりに怖ろしかつたので、咄ぢらひがちに、顔をうつむけたので、子爵の火のやうにあつい唇は、瞳の額際に燃えた。

瞳の顫へは、とまらなかつた。彼女は、顫へながら、長い間子爵の胸にゐた。

その時、急に自分の家の方で聲がした。

「お姉様！　お姉様！」

爛子の華やかな聲が、夜の木立を洩れて、聞えた。

「ぢや、私、失禮します。呼んでゐますから。」

瞳は、つと子爵の抱擁から離れた。

「さう。それぢや……」と、ためらつて、子爵は直ぐ言葉をつゞけた。「あの！　明日、帝劇のマチネへいらつしやらない？」

「何でございますの。」瞳は、あわてゝ息を切らしながら聞いた。

「ヴエルタマンです。」

それは、この頃日本へ來てゐる、ヴアイオリニストの世界的大家であつた。

「參りますわ。」

「さう、それぢやねえ。明日、午後一時かつきりに、帝劇の南側の車寄せに待つてゐて下さい。」

「はい。」

一間違はないやうに。」

「はい。」

子爵は、再び近よつて、瞳を抱かうとしたが、その時爛子の呼ぶ聲がしたので、瞳はあわてゝ身を

離した。

雜木林の闇を、瞳は恍惚として、雲の上を歩くやうな足取で歸つて來た。

禁斷の果實

瞳は、その夜三時頃まで、眠ることが出來なかつた。闇の中で聽いた子爵の言葉が、耳の底で何時までも聞えてゐた。接吻を受けた額際が、いつまでも熱かつた。が、彼女の眠れないのは、さうした記憶のため丈ではない、明日と云ふ未來があるためだつた。愛人とひそかに會ふと云ふ怖ろしい、然しながら心を抉るやうにうれしい明日があるからだ。愛人と、遠方で謀し合せて落ち合ふ、それは何う考へても、少し惡いことだつた。可なり氣が咎めた。そんなことをしてもいゝのかしらと思つた。が、良心は少し惱んでも、その未知の喜びは、それに對するむせぶやうな豫感は、彼女の心を烈しく搖がさずにはゐなかつた。

「あゝ、私、眠れないわ。何うしたら、いゝかしら。私、こんなに眠れなかつたら、明日は顏がいつもより汚なく見えるに定まつてゐるわ。あゝ、何うせう！　何うせう！」

彼女は、夜具の中で、轉輾とした。風が、サツと起きて、高い欅の梢を吹き鳴らし、庭の楓の若葉を擾してゐるのが聞えて來た。

翌朝、瞳はいつもよりは遲く起きた。しかし、彼女の眠りは足りなかつた。が、顏を洗つて朝の朗な光の裡に立つと、昨夜の不安はなくなつて、若い心は希望に充ち、彼女は一途に子爵との會合

を待つた。彼女は、何と云ふことなしに、幾度も鏡の前に立つた。その裡に、正午になつた。昨夜から吹き出した風は落ちて、初夏の日の午後は靜かに晴やかだつた。彼女は、先刻から、何と言つて家を出てよいか、その口實を探すのに苦しんでゐた。彼女は、今までに母に嘘を言つたことがなかつた。また嘘を吐く必要はなかつた。が、今日は！　子飼と一緒に帝劇へ行くのだ。さう明らさまには、何うしても打ち明けることは出來なかつた。が、心の靜淨な彼女としては、全然ありもしない僞りは、何うしても言へなかつた。

時は刻々に迫つてゐた。

「あのね、お母さん、私今日一寸、帝劇のマチネーへ行きますの。」

瞳は、漸く母に言つた。彼女の顏は、眞赤になつてゐた。おとしは、手にとつて見てゐた夏着を下に置くと、

「帝劇のマチネー？」と、訝しさうに訊き返した。

「えゝ。あのね、堀田樣から、切符をいたゞいたの。」

瞳は生れて最初の一寸した嘘をついた。

「お前一人にかい？」

彼女は、默つて、母の顏を見てゐたが、眼を外らすと、俯向いた。おとしも、暫く默つてゐたが、

「あゝ行つておいでなさい。」と、靜に言つた。

瞳は、母のおだやかな理解が、うれしくて堪らなかつた。

「ありがたう。」

瞳は、うれしさの餘りに、そんなとつけもない事を、母に言つてしまつた。と、顏は火のやうになつた。母の傍にゐることが出來なくなつた。彼女は直ぐ自分の部屋へ引き返すと、再び鏡の前に立つてゐた。

「私、まあ、何うしたんでせう。また鏡を見てゐたわ。」

瞳は、自分ながら、自分が恥かしくなつて來た。つと、鏡の側から離れると、急いで昨夜から考へ定めて置いた着物を着始めた。

「あら！　お姉樣、何處へいらつしやるの。」

爛子が、着物を着換へてゐるのを、素早く見付けて、飛んで來た。

「この帶は何う？」

瞳は、默つて妹に、自分の後姿を見せた。

「いゝわ。その帶、お姉樣に一番よく似合ふのね。えゝ、何處へいらつしやるの？　教へてよ、教へてよ。」

瞳は、幽かに微笑を洩して答へなかつた。

「お姉樣。隨分よ。ずるいわ〳〵。私、お母樣に訊いて來るの、ねえ、私も連れてつて頂戴よう。」

爛子は、駄々つ子のやうに、姉の肩を袂の端で叩きながら、身をこぢらせた。

瞳は、少し困つて言つた。「お母樣にお訊きなさいな。」

爛子は、駈けて、おとしの部屋へ行つた。

「ねえ、お母様。お姉様が、何處かへいらつしやるのよ。ねえ、私、行つていゝでせう、私行きたいの。」

爛子が母に向つて言つてゐる、子供のやうに、癇高い聲が、聞えて來た。

瞳の顔は、ひとり幽かに曇つて來た。彼女は、母の答が氣遣はれた。

「お母さんだつて、知りませんわ。何か御用があるのでせう。」

「いやだわ。いやだわ。」

「うるさい人ね。」

「だつて、お姉様一人いらつしやるのですもの。何處へいらつしやるの?」

「いゝから、默つてゐらつしやい。きくやがゐるかい。きくやがゐたら、釣堀へ行つて鯉を買つて來るやうに言つときなさい。」

瞳は、母の言葉が嬉しかつた。が、何と云ふことなしに、顏がほてつて來た。彼女は黎明色のぼかし錦紗の羽織に手を通しながら、

「ありがたう、ありがたう。」母に、心の中で、繰り返して感謝した。

瞳が、支度が整うて、母のゐる茶の間へ行つた時、先刻まで二階にゐた都が、降りて來て、其處の緣側の柱を背にして、しやがんでゐた。着飾つた姉の姿を、いぶかしげに、ジロ〳〵と見た。その眼には、猜疑と嫉妬とがあり〳〵と見えた。が、爛子のやうに、口に出しては訊かなかつた。瞳は、今日こそ、都を到頭壓倒してしまつた勝利者のやうな氣がした。

「ぢや、お母さん行つて來ますわ。」

「あゝ、氣を付けてね。」

おとしは、わが子の姿を、足の先まで、見おろしながらさう言つた。「氣を付けてね」と云ふ何でもない母の言葉が、瞳の心に突き刺すやうにひゞいた。

到頭、おいてけぼりを喰つた爛子は、堀田の別莊にゐる洋犬と一緒に、姉を停車場まで送つて來た。

瞳は、こだはりのない爛子が可愛かつた。瞳は、中野から有樂町までの切符を買つた。考へて見ると中野へ引越してから、市内へ出るのは、今日が初めてなので、五月の晴れた大氣の裡に、眼に映る物總てが、都會の匂ひを放つてゐた。光を受けた白堊の西洋館や、赤い煉瓦の建物の間を、濃淡さまざまの若葉が、點綴してゐた。數限りもない自動車、電車、自轉車、貨物運搬などが、目まぐるしいやうに、街路を疾驅してゐる容子を久し振に見ると、何となく自分が、田舍者になつてしまつたやうな氣がした。が、瞳の氣持は晴やかだつた。五月の大空、建物、若葉、自動車、街路、そんなものが快活な無韻のオーケストラを彼女の周圍で、奏してゐるかのやうに。その上彼女は戀人の處へ急いでゐるのだつた。世の中の幸福の中で、今の瞳の幸福に比べ得るものは、さう澤山ないに違ひない。無論瞳の心には多少の不安が在つた。子爵と連れ立つてゐる處を、お友達に見られやしないか、會ふ人は何とか思ひはしないかと。が、凡ての快樂は、丁度河豚を食べるやうに、丁度禁斷の果實を食べるやうに、不安が伴ふことによつて、却つて深められるものだつた。いつも、電車などに乘ると、乘り合

はした女の美しい着物や髪の形などに、眼を引かれるのだつた。今日は彼女の心を奪ふ何もなかつた。彼女の心は、矢のやうに帝劇の南側の車寄へ走つてゐた

瞳の顔は、昨夜の睡眠不足にも拘はらず、生々としてゐた。それは、初夏の谷間に咲く白い百合のやうに、清楚な氣品に充ちてゐた。車中の人々は、この若く美しい姿に、眼を刮つた。こんな時、大抵の女は自分の美を意識して、傲慢に心賤しくなりがちなものである。しかし、彼女にはそれがなかつた。彼女の姿には、「心の貴女」が高く匂ひを放つてゐた。若い男達は例外なく瞳の方を見た。が、瞳の美しき姿は、さうした男達の好色の視線を壓倒するに十分だつた。

電車が、有樂町まで來た時、瞳は立ち上つた。若い男達が、殘り惜しさうに見ようとする視線を、背後に感じながら、丁車して二町ばかりの道を、帝劇の方へ歩いた。路々、もしや義輔の姿が見えはしないかと、二三度後を振り返つた。

「心の淨らかなる者は、左顧右眄せず。」何かで讀んだそんな言葉が、頭に浮んで來たけれども、今の場合そんな言葉のために、熱情を制し得るほど、冷やかではなかつた。

帝劇の南側の車寄まで來た時、もう幾臺もの自動車が、駐つてゐた。瞳は、時計を出してみた。一時十分前である。胸が急にわく〳〵して來た。

「まあよかつた、間に合はないかしらと思つてゐた。」

彼女は、胸の中で、呟きながら、車寄せの廣場の一角に在る樹立の蔭に身を寄せた。前を美しく着飾つた夫人や令孃が、幾群となく通つて行く。日曜のマチネーなので、殊に若い少女達が多かつた。

さうした人達は、美しい瞳を、チロ〳〵と見返りながら行く。先方は、無心に見てゆくのだが、胸に一點の祕密を持つてゐる瞳は、きまりが惡く、耻かしく、何だかさらし者にでもなつてゐるやうな氣がした。十分が、一時間位に長く感ぜられた。

「かつきり一時ですよ。」

さう言つた義輔の言葉が、思ひ出されたが、なぜもつと早く來てくれないのか、もし自分を本當に愛して居てくれるのなら、一分でも早く會はうと思つて吳れても、いゝ筈だのに、瞳は、義輔を恨めしくさへ思つた。

瞳は、もう可なり待つた時（本當は、七八分だつたが）、一臺の青色に塗つた自動車が、日比谷の方から、疾走して來た。それが鋭いカーヴをして、車寄の廣場に走り込んだかと思ふと、瞳の前へ來てぴつたり止つた。中から、白つぽい鼠色の瀟洒な背廣を着た義輔が、微笑を含みながら降りた。瞳はうれしいと思つたと同時に、顏が眞赤になつた。

「どうも、お待たせしましたね。すみません。よほどお待ち下さいましたか。」

「いゝえ。」と、瞳は言つた。

義輔は、時計を出して見た。

「まだ少し早いやうですね。どうです。お晝飯は？　召し上りましたか。」

「はい。」

「さうですか。では、中へは入りませうか。それとも、まだ開演までは三十分ばかりありますから、

日比谷公園をでも、散歩しませうか。」

瞳は、默つてゐた。ぼうとしてゐて、自分の意志が無くなつてゐるのだつた。

「おい、待つてゐなくてもいゝよ。」

子爵は、自動車を去らせた。

「さあ。何うしますかねえ。少し、早いがは入りませうかね。いかゞです。どうも、僕は何だか愉快で、今日は少しはしやぎさうですよ。」

義輔は、愉快さうに笑ふと、ステッキの柄を腕にかけて、劇場の中へは入つた。瞳は、オヅ〳〵と、でも一人でゐた時よりは、心強く後からついて行つた。劇場の、少し薄暗い畫の廊下は、もう美しく着飾つた人で一杯だつた。瞳は、知つてゐる人に顏を見られるのを怖れて、うつむきがちに歩いた。が、義輔は平然として、人々の間を通りぬけ女給仕の案内するボックスには入つた。

戀愛の國

席に坐ると、一時人々の視線が、サッと自分達の方へ向いたのを、瞳は感じた。夫婦でない男女がこんなに二人限りで坐つてゐてもいゝのかと思ふと、瞳は身がすくんだ。が、義輔に寄りすがる瞳の心は、彼女を勇敢にした。誰が見ても、もし瞳の姿に在る羞らひを見落したら、美しい一組の夫妻に見えた。義輔は、敏く輝いた眼で、場内を見渡してゐた。瞳の心も、だん〳〵落着き出した。場内を見渡すと、座席に着いてゐる人も可なり多かつた。その短い滯在の間に、日本の音樂會を驚倒させた

ウエルクマン氏が、日本に於ける名殘りの演奏なので、聽衆の間には日本人の貴婦人ばかりでなく、外交團の貴婦人も多かつた。その人達の胸飾りの寶石などが、やゝ暗い場内で、時々キラキラと光つた。頭上の天井には、これら地上の美しい人々を祝福するやうに、七絃琴を抱いた彫像の天使が、薔薇の色を放つて飛んでゐた。

「かう云ふ處へ、いらつしやるのを貴女はお好きですか。」突然子爵は、瞳に囁いた。

瞳は、默つたまゝ義輔に微笑を送つた。

「貴女は、餘りお好きぢやないと思つたのですが。」

「いゝえ。さうでもございません。」

「さうですか。それはよかつた。また、僕は貴女が多分お好きでないだらうと思つたのです。尤も、ウエルクマンなどは、一度はぜひお聞きになつていゝでせう。」

「私、ヴァイオリンは、好きでございますの。この前の夜興業の時には、忙しくて參れませんでしたの。」

さう、瞳が言つて、手に持つたオペラパックから、眼を人波の上に向けた時、丁度直徑二間ばかりしかない正面の一等席の座席にゐる、一人の美しい女が、いかにも親しさうに義輔の顏を眺めてゐるのに氣がついた。束髮に結つてゐるけれども、何處となく垢拔けのした女だつた。瞳は、それに對して、義輔が、どんな表情をしてゐるかと、義輔の顏を、偷み見たが、義輔は、依然として、柔かい微笑を湛へて話しつゞけた。

「僕も、ヴアイオリンは好きですよ。だけど、なか〳〵いゝ物はきけませんよ。ヴヰクタアでは仕方がないし、ウエルクマンが、聽けるなんて、日本の音樂界も發達したものですよ。さう云へば、近頃の獨逸の音樂界では、もう天才よりも科學だと云ふことですね。ある程度の處までは、天才の方が偉大ださうですが、しかし結局科學的な行き方のほうが、勝利を占めるさうですよ。」

「まあ。左樣でございますか。」瞳は、いかにも感心したやうに言つた。

「なに僕だつて、よくは知らないんですよ。だが、シウベルトなんかその點が、餘り天才な爲に最高の所までは行けないさうですよ。音樂ばかりでなく、凡ての物が、いづれさうなるんでせうがねえ。」

義輔は、音樂論をしながらも、昨夜の菅との論戰に於ける自分の立場を、辯護してゐるやうに思はれた。瞳は、昨夜の不始末を謝らうと思ひながらも、言ひ出しかねた。

やがて、開演の鈴が、人々の心へそゝるやうに、ちり〳〵と鳴りひゞいた。脚光が、パッと點いたかと思ふと、黑地に金で竪琴を彈くギリシヤの少女を描いた幕が、する〳〵と音もなく上つた。白い壁でしきつた瀟洒な舞臺には、伴奏のピアノと、左右に置かれた二つの棕梠の植木鉢との外に、何もなかつた。見物は、息をこらして待つてゐた。やがて、雷のやうな拍手が、突如として起つたかと思ふと、正面の扉から、ウエルクマン氏が長身白皙の姿を現はした。疲勞を知らぬ天才と云はれてゐる丈に、四十を越した身體に精悍の氣が滿ち溢れてゐた。伴奏者は、まだ二十代と思はれる美しい青年だつた。

ウエルクマン氏は、ぶつきらぼうの、そのために却つて愛嬌のあるお辭儀を、二つ三つすると直ぐ

無雜作に、ヴアイオリンを、おとがひに當てゝ、彈き初めた。日本の音樂家に見るやうな、思はせぶりや氣取りのないのが快かつた。

第一の曲目は、プニヤーニ作『前奏曲』と『快進曲』だつた。場内は、聲をひそめた巨大な呼吸器のやうに、靜かになつた。微妙な顫律が、人々の上に漂ひ始めた。

瞳は、茫然として、演奏者の弓の上下を見詰めてゐた。その二尺に足らぬ弓は、微妙な生き物のやうに神變不思議の動き方をした。その絃と弓との交錯から、あらゆるメロデイや顫律が、つぎ〳〵に場内の空氣の中をかけめぐつた。この世のひゞきとは思はれないやうな、哀怨切々の聲がつぎ〳〵に聽衆の心に溶け込んで行つた。雷のやうな拍手が起つたかと思ふと、ウエルクマン氏は、ポツンとお辭儀をしてサッサと、引込んで行つた。すると、拍手は、それを追ふやうに一段高くなつて行つた。瞳もわれを忘れて手を叩いた。ウエルクマン氏は、その拍手に引きもどされたやうに舞臺へ出てポツンとお辭儀をした。引込むと又拍手が高くなつて、舞臺へ引出される。そんなことが、三四度も續いて、聽衆は、漸く拍手を止めたのであつた。

第二の曲目は、セバステイアン・バッハの奏鳴曲であつた。ウエルクマン氏の神の如き弓に依つて彈き出された莊重雄偉の緩徐調は、聽衆を魅了するに十分であつた。

第三は、ベートーフェンの『クロイツエル奏鳴曲』であつた。優しさに充ち滿ちた併歩調や、タランテルラ風の急速調が、人々を恍惚とさせてしまつた。

瞳も、その一人であつた。戀人の傍に居て、そして世界的な大家のヴアイオリンを聽くほど、人を

恍惚とさせることは、外にないだらう。第四の『蓮華の國』を聽いてゐた時、瞳はもう夢見る人のやうに、うつとりとしてゐた。彼女の幻想の中には、紅白の蓮華の花咲く印度あたりの風光が、ありありと描き出された。あらゆる顫律が、美しい水や、森や、野の姿となつて、彼女の頭の中に描き出された。

が、その時、ふと彼女は、自分の右手に觸れた溫い觸感に依つて我に還つた。氣が付いて見ると、それは義輔の手であつた。瞳の心は、『蓮華の國』から、忽ちにして『戀愛の國』へ歸つた。もつとも元來この二つの國は隣國同士ではあつたが。

彼女の眼には、ウエルクマン氏の手も弓も見えなかつた。たゞ、胸の鼓動が、急速調をなして高鳴つて行つた。

「僕は、貴女をこれほど愛してゐるのです。」と云ふやうに、義輔の手は、强く瞳の手を握りしめた。が、瞳は、彼の手をそれと等しい力で、握り返すことは出來なかつた。それは、餘りに羞かしいことだつた。

「なぜ。なぜ。僕は、こんなに愛して居るのに、それになぜ。」

義輔の手は、さう訴へる。瞳の顏は、全身から湧き上る血のために、赤くなつてうなだれた。彼女には、凡ての聽衆が自分からは、遠い〳〵別の世界の人になつたやうな氣がした。それと共に、瞳の手にも、次第に力が加はつた。

演奏が濟んだ。アンコールの拍手が、場内を嵐のやうに搖り動かした。すると、瞳の手を放した義

輔の手は、人々の手と一緒に、平然と拍手してゐた。しかし、瞳の胸を騷がす欣喜の血潮は容易に全身から去らなかつた。彼女は、顏を上げて場内を見ることが出來なかつた。周圍の凡ての人々が、今の自分達のしたことを、みんな知つてゐるやうな氣がした。

「素敵です。全くすばらしいです。この前に來朝したどのヴイオリニストよりもいゝ。」

義輔は、前のやうに從容として言つた。が、瞳は烈しい昂奮で物が言へなかつた。義輔に、音樂を鑑賞するやうな落ちつきがあるのが、不思議だつた。

「どうでした。いゝものぢやありませんか。」

「本當に。」瞳は、低くそれ丈答へ得た丈だつた。

アンコールの拍手は、まだ續いてゐる。然し、瞳の願ふものは、かうした人々の前から去つて義輔とたつた二人になりたいことだつた。

第五のサン・サアンスの狂想旋轉曲は、瞳の昂奮した心を、更に搔きみだしてしまつた。

その日の曲目の演奏は了つた。そして、瞳の待ち望んでゐた時は來た。劇場を出ると、まだ戶外はあかるかつた。義輔は、劇場外の人波を避けながら、ステッキで日比谷公園の方を指した。

「何うです。日比谷公園を歩いて見ませうか。」

「えゝ。」

二人は、お濠端の柳の下を歩いて公園へは入つた。重なる樹蔭の下をぬけると、急に鮮かな綠色の芝生が、夕暮の空の下に、展開された。二人は、思はず立ちどまつた。

「まあ！　綺麗ですこと。」
「眼が、痛いほどあざやかですね。」
「本當にねえ。」
「あの空の色がいゝ。芝生の引き立つのも、あの空があるからですよ。だけど、あの眞中の蘇鐵は邪魔物ですねえ。ない方が、よかアありませんか。」
義輔は、いかにも畫家らしく嘆賞し始めた。
その時、水兵服を着た一人の西洋人の子供が、乳母の手をはなれて、柵を越えると兩手を擴げて、芝生の綠色の中へ駈け込んだ。
「一寸、御覽あそばせ！」瞳は、パラソルを、その子供の方へ差し向けた。
「あゝ、これはまた可愛らしい。これは素敵だ。いゝ繪ですね。」
義輔は、くはへてゐた煙草につける火を、一寸休めて、愉快さうに子供を眺めて、微笑した。子供は、人目をかまはず、金髮をなびかせて芝生の上を潑溂と跳ね廻つた。瞳は、その子供が堪らなく可愛かつた。彼女は、その子供を自分の子供だと想像した。すると、當然傍にゐる義輔が子供の父になる。そんなことを考へると、傍に立つてゐる義輔が、親しく懷しく思はれ、二人の間にかうした子供を持つ日が來ることが、必ずしも空想のやうな氣がしなかつた。
やがて、二人は芝生の周圍を廻つて、花壇の中を歩いた。さまゞな色彩を浮べて、咲き揃つてゐるけし、白い可愛いすゞらん、薄紅のチューリップ、ノーゼンハレンの朱の色などが、後の森を背景

として、あざやかに浮き立つてゐた。
「あの、お母さんは、御存じですか。帝劇へ來たことを。」
「えゝ。存じてゐます。」
「僕と一緒だと云ふことも御存じですか。」
「えゝ。」
瞳は、生れて第二の嘘をついた。『嘘は、泥棒の始まり』と云ふが、げに『戀は嘘の始まり』である。
「さうでしたか。それでお母さんは、別に何とも仰しやいませんでしたか。」
「えゝ。」
「さうでしたか。それは、ありがたかつた。」義輔は、快活に言つて、ステッキを振つた。
「そして、幾時頃お歸りになると、仰しやつて來たのです。」
「別に、何とも申してまゐりませんでした。」
「あゝ、さう。僕は兎に角、愉快ですよ。こんな愉快なことはありません。何だか、一切が祝福されてゐるやうに思へてなりません。貴女は、さうお考へになりませんか。」
瞳も、さう考へた。が、口には出して言へなかつた。二人は、今『戀愛の國』の二部合唱を歌つてゐるのだ。たゞバリトンの歌ひ手が勇ましく歌ふのに、ソプラノの歌ひ手は、聲が咽喉まで出て來ないのだ。もつとも、鳴かぬ螢が身を焦すやうに、瞳の情熱の方が相手より、もつと強かつたかも知れないが。

行き過ぎる人々は、みんな二人の姿を見て通つた。世の中に、これほど揃つて美しい、これほど揃つて樂しさうな夫妻が、あるだらうかと云ふやうに。

樹蔭を拔け、小路を曲つて、泉水の傍に出た。泉水の中央では、飛び立たうとする彫像の一羽の鶴が、天に向つて水を噴いてゐた。水から上つた數羽の鷺鳥は、黃色い嘴を動かしながら、二人の方へ歩いて來た。

「貴女は、お買ひ物でもありませんか。」ふと義輔が、訊いた。

「いゝえ。」

「あるんでしたら、お供いたしますよ。僕も銀座へは暫く行かないんです。貴女は、お引つこしになつてから、いらつしやいましたか。」

「まだでございますの。」

「では、何うです。後で廻つて見ませうか。」

「えゝ。」

瞳は、なぜだか自分から、義輔に話することが出來なかつた。が、話をしないでも、彼女の胸には幸福が充ちてゐた。その上、一番うれしいことは、絶えず二人の間に、はさまつてゐた都が今日は居ないことだつた。何にも言はないでも、自分の考へてゐることが、男の胸にひゞいてゐるやうな氣がした。

「まあ、鶴が。鶴が。」

瞳は、やつと物を言ふ事件に出會つたやうに、池の中を歩いてゐる雌雄の鶴を見つけて言つた。

「貴女のやうに、すつきりしてゐますねえ。」

子爵は、暫くしてから言つた。

瞳の顏は赤らんだ。子爵の言葉は、彼女の美しさを形容したには、違ひなかつたが、しかしなんとなく羞かしかつた。

「あれは、雄と雌となんですよ。とにかく、やつぱり鶴は、氣品がありますね。一寸、貴女あの傍へお並びになつては如何。」

義輔は、親しみのある口調で、からかふやうに言つた。瞳は、前よりもつと赤くなつた。

「どうです。お疲れになりませんか。どこかで休みませうか。」

義輔は、ベンチを求めて腰をおろした。瞳は、暫くその側に立つてゐた。

「おかけになつては。」義輔は、やさしく瞳を見上げて言つた。瞳は、子爵と肩をならべて腰をおろすことを躊躇した。それは、單なる羞かしさばかりではなかつた。身分や、貧富の違ひのある子爵の愛人らしく振舞ふことが、何だか相手にわるいと云ふ氣がしたからだ。

「なぜ、おかけにならないんですか。貴女は今日は、何うかなさつてゐらつしやるのぢやありませんか。」

義輔に、さう言はれて見ると、瞳もなるほどと思はずには居られなかつた。

「御免下さい。」

瞳は、あらたまつたやうに、一寸お辭儀をして、義輔の傍に腰をおろした。瞳は自分の躊躇した氣持を、口に出しては言へないので、默つてうつむいてゐた。

「お腹は、お空きではありませんか。遠慮なく仰しやつて下さいよ。僕も、少々空いて來たんですが。」

「あのどうぞ。何處へでも、いらしつて下さいまし。」

「と言ふと、何う言ふ意味になりますかね。僕ひとりで勝手に行けと、仰しやるんですか。」

子爵は、笑ひながら言つた。

瞳は、一寸赤くなつて、パラソルの尖で地をつゝいた。さうした羞らひの姿が、またなく美しかつた。

「まさか、僕ひとり勝手に行けと、仰しやるのぢやありますまいね。」

「おかまひなければ、お供いたしますわ。」

「どうして、さう一々遠慮をなさるんです。僕は、少し腹が立つて來ましたよ。それとも、お歸りの遲くなるのが、御心配なのですか。」

「いゝえ、さうぢやございませんの。」

「ぢや、いゝでせう。もし、お母さんが、何か仰しやつたら、僕がいくらでもお詫びしますよ。」

「えゝ、ありがたうございます。」

「困りますね。さう、あらたまられては。もつと、貴女は僕の氣持を理解して下さい。もつと、僕の

氣持の中へ溶け込んで下さい。僕の氣持の中へ、強くは入つて下さい。はゝゝゝゝ、尤もこれは、僕の註文が少し無理でしたね。貴女としては、仕方のないことだと思ひます。おゆるし下さい。」

義輔は、默つて煙草を吸ひつゞけた。瞳は、子爵の變轉極りなき言葉に、迷はされた。何か一言言ひたかつた。

「私、貴方をお慕ひ申して居りますの。」と、もし心のまゝに、さう言ふ事が出來たならば彼女の心はどんなに晴々しくなつたであらう。

二人の默つて居る裡にも、幾群もの男女が、二人の前を群れて通つた。だんだん暗くなつて行く彼方の森の上からは、赤い煉瓦の建物が聳えて見え、それらの窓硝子が一樣に、赤い夕暮の空の色を映してゐた。樹立の間には、今しがたアーク燈がほつと、うす紫の光を投げ始めた。

「銀座の方へ行きませうか。何うです。」

「えゝ。」

「そして、何處かで晩の御飯を食べませう。」

子爵は立ち上りながら言つた。

最後のもの

公園を出て、銀座の方へと、數寄屋橋まで來た時、子爵はふと立ち止まつて言つた。

「一寸待つて下さい。僕は、何だかすつかり疲れてしまひました。何か食べる處までタクシで行かう

ちやありませんか。」

と言ふと子爵は、瞳の返事も待たず、タクシ自動車の待合所へ足を向けた。

街は、もうすつかり、美しい初夏の宵になつてゐた。空は、あざやかな星空になりかけてゐた。音樂を聽いた疲れが、瞳の身體にも、しつとりと感ぜられた。

瞳は、半ば夢見るやうに、義輔の後に隨いて行つた。

「タクシの車臺も、いくらかよくなりましたよ。」

二人が並んで、車中の人となつた時、義輔は何氣なく言つた。が、瞳はなんだか、うれしい、然し少し不安な深みへと、だん〳〵落ち込んで行くやうな氣がした。が、彼女の義輔に頼る心は強かつた。この人と一緒なら。さう思つて、瞳はともすれば擾れようとする心を抑へた。

子爵は、運轉手に行く先を囁いた。

「私が行つても、貴方お差支へございませんの。」瞳は、訊いた。

「えゝ、何ですつて。」

「本當に、御迷惑にならないかと、そればつかりが氣にかゝつてゐるのですわ。」

「それは、こつちで言ふことです。僕は、貴方がかうしてゐらつしやるのが、貴方の御迷惑ではないかと思つて、そればつかりが氣になつて……」

「まあ。」瞳は、また默つてしまつた。

自動車は、光の海のやうな銀座を橫斷したかと思ふと、少し暗い河岸緣を疾驅してゐた。瞳は何處

へ行くのか、少しも見當が立たなかつた。

やがて、自動車は、少し狹い通へ、は入つたかと思ふと、高い板塀を廻らした、料理屋らしい家の前に、パツタリと停まつた。

「玆は、何處でございますの。」

「僕の知つてゐる家です。食べ物は、なか〳〵うまいところです。」

義輔は、さう言つて先きへ立つた。門の中は、綺麗な石だゝみになつて、玄關には、すり硝子のいきな燈籠が、つるしてあつた。

「あら、御前樣なの、お珍しい！」

客の來たのを聞きつけて出て來た女中は、義輔の姿を見ると、馴々しげに言つた。

「うむ、一寸飯を食べに來たのだ。」

「それは、どうも。さあ上りなさいませ。さあ！　さあ！　おや、お連さまなの……。」

瞳の姿を初めて見付けた女中は、一寸驚いたやうにさう叫んで、あわてゝ瞳に挨拶した。が、その女中の最初の一瞥に、瞳に對する好奇心と云つてよいか、侮蔑と云つてよいか、そんな色が動いたのを、瞳は見逃すことが出來なかつた。

瞳は、何だか來てはならない處へ來たやうな氣がして、心が急に暗い不安に囚はれた。

磨かれた廊下を、女中は奥へ〳〵と、二人を案内した。父に連れられて幾度も行つた料理屋に比べると、何だか勝手が違つて居るやうな氣がしてならなかつた。

やがて、一番奥深い部屋へ案内された。狭いけれど立派な庭に面した部屋で、こぢんまりと整つたいかにも氣持のよい座敷であつた。八疊で、次の間が付いてゐた。床柱などは、駒込の前の家のそれにも劣らないやうない、木を使つてあつた。床飾りなども、五分のすきもなかつた。

女中は、あらためて、子爵に挨拶してから、瞳に向つて言つた。

「これは奥様でございますか。御前様には、始終御ひいきになつてゐるのでございます。」

瞳は、奥様と云はれたことが、堪らなく羞かしいと同時に、また何となく擽つたいやうに嬉しかつた。

「何を、召上りになりますか。」

「さうだね。菊水の料理を見はからつて五品ばかり取つてくれないか。」

「はい、かしこまりました。」

さう言つて、女中は去つた。瞳は、だん〳〵不安になつて來た。この家の性質が、何だか分らなくなつて來た。料理屋の筈だつたのが、料理を外から取ると云ふ。瞳は、不安になると同時に、憂鬱になつてしまつた。

「何うしたのです。いやに、默つてしまつたぢやありませんか。もつと、此方へお寄りなさい。この家は僕のよく知つてゐる家ですから、何の遠慮も入らないんですよ。さあ、ずつと此方へ。」

「はい。」瞳は、不安になりながら、義輔の方へ一尺ばかり近づいた。

「今日は、御飯を食べながら、ゆつくりお話しようぢやありませんか。僕も、いろ〳〵貴女のお心も

伺ひたし、申上げたいこともあるのですよ。」

義輔の口調が、何となく頼もしく聞えたので、瞳は今先き感じた不安が、だん〳〵薄らいで來た。

間もなく料理が、運ばれた。それには、お酒の德利が一本添へてあつた。義輔は、直ぐ女中を去らせた。

瞳は、酒豪の父に侍してゐた丈に、お酌をすることは、知つてゐた。が、二人限りで、男性にお酌をすることは、何だか胸がわく〳〵して、手先がかすかに、顫へるのを制することが出來なかつた。

四五杯重ねると、義輔はほんのりと醉つてしまつた。

「僕は、こんな嬉しいことは、ありませんよ。貴女と二人限りで、食事をするなんて。瞳さん、本當に貴女は僕を愛してゐて下さるんですか。」

瞳さんと初めて名を呼ばれたので、瞳は、顔を眞赤にしながら、肯いて見せた。

「僕も、貴女を心から愛してゐるのです。だが、今急に貴女と結婚すると云ふことは、家の事情から一寸出來にくいのです。だが、お互に將來を誓ふしるしとして、愛の證券丈は取り交はして置きたいと思ふのです。」

瞳は、愛の證券と云ふことが、何のことだか分らなかつた。默つて、返事の仕様がなかつた。

「貴女も、僕に本當の愛のしるしを見せて下さるでせうね。」

義輔は、少し醉つてゐるらしかつた。瞳もつひ、義輔の輕い心持に釣られて行つた。

「はい。お見せしますわ。」

「さうですか、ありがたう。」

義輔は、瞳を引き寄せて、接吻をしようとした。が、惶々と輝く電燈の下で、男の接吻を受けるほど、瞳は大膽な女でなかつた。瞳は眞赤になりながら、引きよせようとする義輔の手を輕く支へた。その手に、義輔は熱情的な接吻を幾度も繰り返した。

食事が濟んだ時、義輔ははゞかりでも行くやうにつと立ち上つた。瞳は、義輔が傍に居なくなると、自分に返つてホッと溜息をついた。うれしい、然しながら、緊張した午後を過ごしたので、瞳は可なり烈しい心の疲れを感じた。

義輔は、なか〳〵歸らなかつた。十分ばかり經つても歸らなかつた。瞳が、待ちあぐんでゐた時、先刻の女中が顏を出した。

「あの彼方でお待ちでございます。」

瞳は、女中の言葉が、何の意味だか分らなかつた。彼女が、躊躇してゐると、女中は再び言つた。

「彼方でお待ちになつてゐますから、御案内します。」

瞳は、歸るのだと思つた。彼女は、床の間に置いてあつたオペラバックを取り上げて、女中の後から隨いて行つた。女中は、何うしたのか玄關の方へは行かないで、廊下に出ると直ぐ右に折れた。そして、瞳に振り返つて言つた。

「あの突き當りのお部屋でございます。」

瞳には、何のことだか分らなかつた。でも、義輔に會へば分ると思つたので、何氣なく突き當りの

部屋へ行つた。やつぱり、前の部屋と同じやうに、次の間が在つた。瞳は、次の間と、奥の間半分の開けられた襖から、中を見た。

瞳は、思はずハッとした。先刻まで、洋服を着てゐた義輔が、褞袍一つになつて柱を背にしてゐた。

「おや、お歸りになるのぢやないの。」瞳の聲は少し顫へてゐた。

「まあ、少し休息して行かうぢやありませんか。もつと、こつちへいらつしやい。こゝへお座りなさい。茲へいらつしやい……」

義輔の態度は、少し不滿と不安を感じながらも、瞳が二三歩、義輔の方へ進まうとした時だつた。義輔の背後に、立て廻されてゐる金屏風の端から、もゆるやうな眞紅な友禪縮緬の夜具の端らしいものがちらと瞳の目に觸れると、瞳は忽ち全身に水を浴びたやうにゾッとした。名狀しがたい怖ろしさが、カッと頭の中に燃え上つた。瞳の足は、疊に釘付けにされるやうに動かなつた。

「瞳さん、僕は、本當に心から、貴女を愛してゐるのです。僕は。」

瞳が、石像のやうに立ち竦んでゐるのを見ると、義輔はあわてゝ吸つてゐた煙草を灰皿に捨てゝ、立ち上つて瞳に近づいて、兩肩に手をやりながら言つた。が、瞳の竦んでしまつた胸にはどんな甘い言葉も、もうは入らなかつた。

「瞳さん、僕は貴女を愛してゐるのです。」

義輔は、瞳に接吻しようとした。が、瞳は、それを可なり烈しく身體を振つて拒んだ。

義輔は、彈かれたやうに身を引くと、顏が蒼白になつた。

「何うしたと云ふのです。」義輔は、眼をいからして言つた。
瞳は顔が蒼白くなつて、身體が、わな〳〵顫へてゐた。
「貴女は、僕を愛すると言つたではありませんか、あれは、みんな嘘なんですか、嘘なんですか。」
瞳には、もう義輔の言葉が、みんな嘘に聞えた。
「私、歸らせて下さい！　歸らせて下さい！」
瞳の聲は、調子がみだれて、泣き聲に近かつた。
「僕はこれほど、貴女を愛してゐるのに、僕を信じて下さらないんですか。」
義輔は、必死に叫んだ。
「あの、私を歸らして下さい。」
瞳も必死に叫んだ。
「貴女は、嘘を言つたんですか。僕の愛を投げ捨てるのですか。」
義輔も、とりみだしてゐた。
「僕を、愛すると言ひながら、こんなところまで來て、僕を裏切るのですか。」
義輔は、再び瞳の兩肩を捕へながら言つた。
「あの私、歸りますわ。歸りますわ。」
瞳は、泣きじやくるやうに言つた。
「いゝえ。歸しません。貴女の愛情のしるしを見るまでは。」

義輔は、男の強い力で、ぐいと引きつけて、接吻しようとした。その時、瞳には美しい男らしいと思つてゐた子爵の顏が、急に惡魔メフイストフエレスのそれのやうにいやらしく見えた。
「御免下さい！　私、歸ります。」
瞳は、一生懸命の力で、義輔を突きはなすと、逃れるやうに廊下へ出て、二間ばかり走つた。
「あら、びつくりしたわ。わたい、靜葉姉さんかと思つたわ。」
つき當りさうになつた美しい半玉が、すれ違ひながら、さう叫んだ。その時に、瞳はハッと思つた。茲は、それとなく話に聞いてゐる待合なのだ。さう思ふと、鬼の棲家に居るよりも怖ろしい氣がして瞳は廊下を一心に、急いで玄關へ出た。後を追かけて來た先刻の女中が、
「あら、お歸りになるのでございますか。お一人で、まあ。一寸、お待ち下さい。堀田樣へお聞きして參りますわ。」
と言ふのを、聞き流しながら、式臺へ降りると夢中で、其處にあつた下駄を置く棚から、自分のフエルトの草履を取りおろすと、逃げるやうに戸外へ出た。

ある戀愛哲學

瞳の家の庭園の樹々は、綠色の枝を擴げて、いよ〳〵暗鬱になつて來た。打ち續いた淸朗な天候は日に〳〵雨色を帶びて、夏を迎へ始めた。
日毎に、中野の別邸に、それにつれて、篠崎家へ、瀟洒な姿を見せてゐた堀田義輔は、瞳と一緒に

ウエルクマンの演奏會に行つた時から、急にふつゝりと姿を見せなくなつた。

「堀田さんは、この頃ちつともお見えにならないやうよ。何うしたのかしら。」爛子が、口癖のやうに不思議がつた。

母のおとしは、瞳と子爵との間に、何事か起つてゐることに氣が付いた。それは、瞳の顏色でも分つた。瞳は、子爵の姿が見えぬ日がつゞくにつれ、頰の色が光を失ひ蠟のやうに白くなつて行つた。

瞳は、子爵のことを思ふと、胸が一杯だつた。あの夜は、子爵が惡魔のやうに怖ろしく、一途に逃げ出したが、さて今になつて見ると、言ひ知れぬ思ひで、子爵に惹き付けられてゐる自分を見出す。

「ある時は、ありのすさびに憎かりき、無くてぞ人は戀しかりける」子爵のあられもない態度に接すると、カッとなつたものゝ、さて日が經つて考へると、それも自分を思つてくれる男心の、止むに止まれない欲求だつたやうに思はれ、それを不良少年か何かから挑まれたやうに、振り離して逃げた自分が、あまりにはしたなく、冷淡であつたやうに後悔される。さう後悔すると、過ぎた日の子爵の優しさや眞實が、ひし〳〵と胸に徹へて來る。なぜ、自分は子爵の望み通りになれなかつたのか、愛してゐる異性からなら、どんなことをされても、許せる筈ではないか。自分は、子爵を愛してゐる。世の中の何人にも增して、子爵を愛してゐる。もし、子爵が、一緒に火の中へ飛び込まうと言へば、飛び込んだかも知れないのだ。それだのに、なぜ子爵に身を與へることが出來なかつたのか。あれほど愛してゐた子爵があの時、なぜ惡魔のやうに見えたのか、またあの時、惡魔のやうに見えた子爵が、今なぜこんなに戀しいのか。瞳は、自分の心が解らなかつた。が、瞳の心には、瞳自身氣付かぬ高貴な

純潔な球か、潛んでゐるのだ。珊瑚の球か、毒を嫌ふやうに、凡ての惡を嫌ふ眞珠のやうな心の珠か。

瞳は日毎にやつれた。だん〳〵言葉少くなつた。人から遠ざからうとした。一週間が過ぎ、二週間が過ぎ、三週間が過ぎた、しかも、義輔の姿は、見えなかつた。もう、これぎり逢へないのかと思ふと、人の戀しさが、いよ〳〵募つて來る。

それは七月には入つたある日だつた。瞳は、自分の部屋に閉ぢこもつて、編物をしてゐると、召使ひの女中が一通の手紙を持つては入つて來た。

「あのう、お孃樣。お手紙でございます。直ぐお返事をいたゞきたいつて、申して居りました。」

瞳は、不審に思つて、受取つて見ると、それは思ひがけない義輔からの手紙であつた。瞳の胸は、騷ぎ立つた。

「どんな方が、この手紙を持つて來たの。」

「お隣の女中さんでございます。」

瞳は、かすかに顫へる手を、召使にさとられないようにと、封を切つた。

先日は失禮いたしました。私は、いろ〳〵考へた末、貴女の處へ歸つて來ました。貴女は、さぞお怒りになつてゐることゝ思ひます。でも、私は貴女にあやまらうとは思ひません。私は、凡てを私の考へでやつたことですから。たゞ、私は私が色魔か何かのやうに誤解されはしないかと云ふことが苦痛になつて來たのです。一度、お目にかゝつて、私の考へを聽いていたゞきたいので

す。

私は、むろん以前と同じく貴女を愛してゐます。貴女は、私に對する好意が、少しでも殘つて居れば、どうぞ一度私の處へお出で下さい。もし、お出で下さらないとすれば、私は直ぐこれから東京へ歸ります。

隣家にて　義輔

讀み了ると、瞳の胸は、油を注がれたやうに、燃え上つた。何うして、行かずに居られやう。まだ子爵は、自分を愛してゐて呉れるのだと思ふと、欣びのために胸がしきりに躍る。ペンを取り上げたが、いゝ言葉が浮ばない。

「あのう、さうだね。直ぐ參りますと、お使ひの方に言つてくれない？」瞳は、顏を赧らめながら言つた。

女中が出て行くと、瞳は、鏡の前に行つて、淡く化粧をした。やゝ衰へた顏が、いぢらしく美しかつた。

彼女は、母や妹達の眼を偸むやうに、庭園の樹立の間を、そつと隣家へ來た。

義輔は、庭に向いた十疊の日本間にゐた。瞳が近づくのを感ずると、顏を上げて瞳を迎へた。思ひ做しか、少し蒼ざめた顏に、恥かしいとも嬉しいとも付かない微笑を浮べた。

「來て下さいましたか。ありがたう、どうぞお上り下さい。」

義輔は低い虔しい聲で言ふと、俯むいてしまつた。瞳は、一寸躊躇した後、縁へ上つて部屋の隅の方へ坐つた。

「此方へいらしつては？　其處では、お話は出來ませんから。」

義輔は、前非を悔いた人のやうに、殊勝であつた。

瞳は、白い麻の座蒲團の方へ少し膝を進ませた。雨上りの庭の樹々は、重さうに枝を垂れて、憂鬱に沈んでゐた。靜かな泉水の面に、一匹の鯉が、潑溂として跳ね上つた。俯むいてゐた二人は、急にその方へ眼を投げた。

「お話と云つて、別に何もないのですがね。僕は、僕のしたことが、みんな貴女に對する愛からであつたと云ふ事を知つていたゞきたいのです。僕は、あの事が貴女の心を、どんなに傷けたか知れないと思ふと、心苦しくつて、貴女にお目にかゝることが出來なかつたのです。でも、僕の貴女に對する愛は少しも變つてゐないのです。たゞ、貴女があのことから、どんなに僕を思つてゐらつしやるかと思ふと……でも、安心しました。本當によく來て下さいました。」

瞳は、何も言へなかつた。が、それかと云つて、子爵の願ひを斥けた自分の態度を、詫びることも出來なかつた。

「貴女は、本當にお怒りになつたでせうね。まだお怒りになつてゐるのぢやありませんか。」

義輔は、不安さうに瞳の顏を、うかゞひながら言つた。

「私、決して怒つてなんか、ゐませんわ。たゞ貴方に濟まないと思つてゐましたの。」瞳は眞赤になつ

て言つた。

「さう云ふことを仰しやると、却つて僕の方が恐縮します。でも、僕として、あの時は熱病にかゝつたやうに、フラ〳〵としてしまつたのです。『戀愛は熱病也』そんなことを、僕の知つてゐるある作家が言つてゐましたが、あの時は、本當に熱病的發作に襲はれたのです。だが、理窟を付けるのなら、僕はあなたの愛を信じたかつたのです。愛と云ふものは『より高き形に於て現はれた性慾だ』僕は、そんな風に考へられるのです。あそこまで行かなければ、本當の愛でないと思ふのです。僕は愛すると口で言ひ合つたりすることは、まだ愛の階段だとしか思へないのです。」

瞳は、ふと口惜しさが込み上げて來た。これほど愛してゐるのに、さうまで疑はられずにはゐられないのかと思ふと、胸が急にいらだゝしくなつて來た。義輔は言葉をつゞけた。

「僕の本心を言ふと、僕のあゝした態度を、僕は惡いとは思つてゐないのです。愛から出發したことは、その基の愛さへ純粹だつたら、許されないことはないと思ふのです。僕が、あゝした要求に燃え上つた時、貴女も伴奏していただきたかつたのです。僕は、貴女からあゝした徹底的な非難を受けようとは夢にも思はなかつたのです。」

義輔は淋しく笑つた後、唇を堅く嚙みしめた。

瞳の欣びの心は、だん〳〵薄れて行つた。仲違ひをした戀人が、手をさし伸したので、飛び付かうとすると、やつぱり二人の間には、大きな間隙が横はつてゐる。仲違ひの原因は、少しも取り除かれてゐないのだ。

瞳も、今は二人の戀愛の重大な危機だと思つた。虔ましさや女らしさの爲に、默つてゐるべき時でないと思つた。瞳は、心の勇氣を振りしぼつて言つた。聲は低かつたが、恐ろしいほど力がこもつてゐた。

「私、本當に濟まなかつたと思ひますわ。でも結婚しない前に、そんな……」瞳は、眞赤に口ごもつた。

義輔は、胸を衝かれたやうに赤くなつたが、それを快活な笑ひでまぎらした。

「はゝゝゝゝ、さうですかね。僕は、貴女のさうしたお考へにも反對ですね。僕があんな要求をしたのは、貴女のさう云ふお考へを未然に感じたゝめかも知れません。結婚してから、身を委す。それぢや商業上の契約ぢやありませんかね。結婚して、一生の生活を保證してくれゝば身を委す。それぢや取引ぢやありませんか。僕が普通の結婚を忌むのは、そのためです。契約してから、僕の胸には入つて來る人より、無條件で愛一つを信じて、僕の双腕の中へ飛び込んでくれる人が、どんなに嬉しいか知れません。僕は、貴女にそれを求めたのです。僕を信じて無條件で、僕に凡てを許して下さるかどうか、僕はそれを知りたかつたのです。」

瞳は、一寸義輔の言ふことが、道理のやうに聞えた。が、彼女の心の底深く「違ふ！　違ふ！」と何者かゞ叫んで居るやうな氣がした。

「でも、この間は本當に、突然でしたから、貴女が駭きになつたのも無理はないと思ひます。貴女に分るやうに、僕の心持を言はなかつたのがわるかつたのです。僕は、貴女が凡てを信じて下さつたら、

どんなに、嬉しいか分らないと思ふのです。僕だつて紳士です、貴女が僕を信頼して凡てを許して下さる以上、僕は、貴女の愛に、凡てを捧げるつもりなのです。たゞ當分の間、結婚と云つたやうな世俗的なことで、お互ひの純な愛情生活を汚したくないのです。」

義輔の眼は、熱を帶びて輝いた。

瞳は、うつむいたまゝ默つてしまつた。いつかあの處も知らぬ夜の家で、會つた危機が再び現はれてゐるのだ。前には、覆面で不意に現はれたが、今度は名乘りを名のつて、正面から來て居るのだ。

處女の貞操を與へるか、愛人の心を失ふか。瞳は、苦しい兩刃の劍の上に、暫く身を悶えてゐた。

「貴女は、お見受けすると悲しさうにしてゐらつしやいます、悲しいのは僕も同じことです。貴女に僕の氣持が、信ぜられないかと思ふと寂しくてならないのです。こんな風に誤解されては、とても落着くことが出來ないのです。僕は、單なる欲望から貴女の肉體を求めて居るやうに思はれるのが、殘念で堪らないのです。これが、僕の戀愛に就ての一番根本的のものですからね。それを、貴女に認めていたゞけないとすると……」

義輔は、蒼白く緊張した。

「愛の極致には、お互の間に何の不信も、孤疑もあつてはならないと思ふのですがね。僕が、手を差し出したら、貴女も直ぐ飛び付いて來て下さるやうな、その間に、打算もない、後慮もない、純粹な燃燒でなければならないと思ふのですがね。」

瞳は、さすがに男の力を感じた。一歩一歩、ずるゝと義輔の胸へ引きずり込まれるやうな氣がす

るのを、彼女は辛うじて支へてゐた。顏が、眞赤になり、身が縮まるやうに感ぜられて、物が言へなかつた。その差し迫つた心持を、ぢつと堪へてゐると、何と云ふことなしに、涙がハラ〳〵と落ちた。それを待つてゐたかのやうに、義輔は立ち上つて、瞳の傍へ近寄つた。そして、膝の上に置いてある彼女の手を取つた。

「何うです。分つて下さつたでせうね、僕の心持が。」

瞳は、身體中が燃え上るやうだつた。自分は、この人を愛してゐる。この人を生涯の夫としてもいいと思つてゐる。今、この人が言つた言葉も、肯けないことはない。が、さう思ひながらも、瞳の心の底に、何だか肯けないあるものがうづくまつてゐた。

「如何です、あちらの部屋へ行つて、もつとゆつくりお話しませう。僕の書齋へ行つて。」

義輔は、瞳の手を取つて、扶け起さうとした。その時に、瞳の眼に、いつかの夜に見た、屏風の陰の友禪縮緬の、紅の模樣が稻妻のやうに、閃めいた。ハッと思ふと、瞳は義輔の手を振り拂つてゐた。

「貴方は、まだ僕の言ふことが、お分りにならないのですか。」

義輔の顏色は變つてゐた。

「いゝえ。よく分つてゐます。貴方に濟まないと思ひます。でも……」

「でも、何うしたのです。まだ僕を信じて下さらないのですか。」

瞳は、必死だつた。

「信じてゐます、愛してゐます。でも……」

「信じてゐて、それで僕の言ふことを……そんな馬鹿々々しい矛盾が……」

「でも、私、そんなことは、そんなことは……」

瞳は、今迄堪へてゐたのをわつと泣き崩れた。

「いや、宜しい。貴女には、僕の心持は分らないのだ。こんなに、事を分けて言つても、分つて下さらないのだ。何處まで行つても、貴女と僕との間隙は、取れないのだ。宜しい。結構です。」

「すみません。すみません。」

瞳は、泣きつゞけた。が、彼女は泣きながらも、自分を相手の胸に、委ねようとする氣は、何うしても起らなかつた。何だか、それが卑しむべく爲すまじき事であると、思はれて仕方がなかつた。

瞳の泣き聲丈が聞えて、沈默の十分が、續いた。義輔は、思ひ切つたやうに立ち上つた。

「いつまで、かうしてゐても切りがありません。どうぞ、御遠慮なくお歸り下さい。お互に根本的の處で一致しないのだから。」

義輔は、寂しく笑つた。瞳は、處女の貞操を捨てるか戀人を失ふかの最後のヂレンマに立たされた。

「ぢや、僕は、彼方へ行つて居りますから、御隨意にお歸り下さい。」

義輔は、別人のやうに、冷然と言ひ放つと、書齋の方へ歩み去つた。後から、追ひかけて行つて、男の胸に身を投げかけようかと云ふ考が、瞳の心にフラ〳〵と浮んだ。が、瞳の理性は、それをぢ

つと抑へつけて、しづかに立ち上つた。

瞳は、雲を踏むやうなうつゝなの心で、歸りたくもない自分の家へ歸つて來た。

緣側から上ると、丁度學校から歸つて來て袴を脱いでゐる爛子と顏を見合せた。

「口惜しくて、口惜しくて。負けたのよ。」

妹は、今日學校で級同志のテニスの仕合をすると言つてゐた。

「第一回は、勝つたのよ。第二回は、デユースで、負けちやつたの。第三回はね、芳川さんが、失策ばかりして、ゲームにならないんだもの。いやになつちやつたわ。」

さう言ふと、爛子は姉の萎れた肩を押して、奥へ行かうとした。瞳は、可愛い妹が、今日は可なりうるさかつた。今、傍の者に快活になられては、痛んでゐる傷口に、觸られるやうなものだつた。

瞳は、肩を振つた。

「爛子ちやん、よして頂戴よ。疲れてゐるんだから。」

「だつて、何處へ行つていらしつたの。私を連れて行つて下さればいゝのに。」

瞳は、顏をひそめたまゝ、爛子に押されて、自分の部屋へは入ると、ぐつたりと坐つた。

「まあ。何うかなすつたの。蒼白よ。何處かわるいの。」

妹は、姉の顏を見ると、あはてゝ言つた。

「さう。私、疲れてゐるんだから、ほつといてね。」

「えゝいゝわ。蒲團敷いてあげませうか。少しおやすみになつたらどう。一體、何處へ行つてらしつ

たの。どうかなすつたの。」

一途に、心配し始めた爛子の言葉に、胸がかきむしられるやうになつて、涙がしきりに流れて來た。

瞳は、堪らなくなつて顔を伏せた。

「何うしたの、お姉様。何うしたの？」爛子はおろ〳〵して訊いた。

「いゝえ。何でもないの。つひ、何と云ふことなしに悲しくなつたの。」

「さう、少しおやすみになるといゝわ。私、蒲團を敷いて上げるわ。」

爛子は、素早く立つて、敷蒲團を敷いて、青い絽縮緬の夏掛を、その上に載せた。

「お姉様、おやすみなさい。私、彼方へ行つてゐるわ。」爛子は、立ち上ると直ぐ姉の部屋を出て行つた。

「爛子ちやん。いゝの。玆にゐて頂戴ね。何だか私淋しくつて。」

と、瞳が言ひかけた時、爛子の姿は見えなかつた。お轉婆ではあるが、いざとなると姉思ひの妹の愛が、ひしひしと感ぜられた。

ひとりになると、悲しさが込み上げて來る。怒つてゐる義輔の姿が、マザ〳〵と感ぜられる。

「もう、二度とあの方には、お目にかゝれないかも知れない。二度と私を愛して下さることはあるまい。私は、あの方をこんなに愛してゐるのに。でも、愛してゐても、あんなことは死んでも出來ないわ。愛とそれとは、全く違ふと思ふんだもの。だけど、もう何も思ふまい。凡てはおしまひなのだもの」

瞳の眼からは、涙が止め度もなく流れた。睡れも出來ない晝の床に、嘆き悲しみ悶えてゐた。

次の間の、都の部屋から、時々英詩を小聲で讀む聲が、聞えて來た。

一時間も經つた頃だらう。ふと、次の間で、都に話しかけてゐる女中の聲を聞いた。

「都様、あのう、堀田様が、一寸お孃様に、お目にかゝりたいと、仰しやつてゐます。」

「えゝ、堀田さんが、まあ。珍らしいわね。」

「え、其處のお庭先にいらつしやいます。」

「まあ、私に會ひたいつて。」

都が、飛び立つやうに、立ち上つた氣勢がした。

「私に、會ひたいと仰しやるの。お姉様ぢやない？」

「都様と仰しやいました。」

「さう」

都が、華やかに肯いて、浮き〳〵と身づくろひする様が、襖ごしにマザ〳〵と見える。

瞳は、瓦破と蒲團の上に、起き上つた。今まで、思ひもかけなかつた怖ろしい破局が、今の目の前に、忽然と口を開いたのだ。

「あゝさう〳〵、あの人を失ふと云ふのは、たゞ失ふのぢやない。人に取られるのだ。現在の妹に取られるのだ。」

瞳は、かうしてゐられないやうな氣がして、フラ〳〵と立ち上つた。美しい眼が血走つて見えた。

彼女の心にも、嫉妬丈は女たるしるしとして、人並には存在した。

都が、そは〳〵出て行く足音が、身を切られるやうに思つた。はしたないとは、思つたが、都の後から、そつと縁側へ出て、隣の方を見た。

孟宗竹の疎な藪の中を、義輔と都とは、笑ひ戯れながら、くゞりぬけて行くのであつた。瞳は見るべからざるものを見たやうに、蒼白になり、ぢつと縁側の柱に縋つて、身體の顫へを支へてゐた。

愛の擬戰

子爵と都とは、快活な二羽の小鳥のやうに、喋りながら夏の庭園を、くゞりぬけてゐた。

「本當に。何うなすつたかと思つてゐましたのよ。ちつともいらつしやらないんですもの。何うなつたの。何かお描きになつてゐらしつたの。」

「なまけてゐたのですよ。」

「だつて、あんまりぢやありませんか、ちつともお顏をお見せにならないんですもの。」

「雨降りが餘り續いたものですからね。」

「私、貴方がお約束を、お破りになつたと思つて、口惜しうございましたわ。」

「ほう。どんなお約束でしたかね。何か欣ばしいお約束でもしましたかね。」

「まあ、隨分ひどい！」都は、蓮葉に手をあげて、子爵を打つ眞似をした。

「何うしてゞす。お約束なら、何んなことでも、破つたつもりがないのですがね。」

「まあ、隨分ですわ。」

「それは、失禮なことをしましたね。一體そのお約束と云ふのは。」

子爵は、立ち止まつて金口のM・C・Cに火をつけた。

「貴方、お忘れになつたのね。私一人で待つてゐたのに。」都は、恨めしげに言つた。

「はゝア。やつと分つた。貴方の肖像のことですか。」

「ことですかもないわ。お姉樣のが出來れば、五日もすれば始めると仰しやつたくせに。」

「それは、決して忘れては居りませんよ。今日、伺つたのは實は、そのことのお願ひなのです。」

「いけません。もういやです。遲すぎるわ。」

「そんなに、御立腹にならないで、描かせて下さい。」都は、すねてゐた顏を、直ぐ快活な微笑で埋めた。

「ぢや、いつからお描きになるの。」

「またもや御意の變らぬ裡と云ふことがありますから、今日から初めませうか。」

「えゝいつからだつていゝわ。」

「お姉樣は、外光の裡で描いたから、貴方は畫室でやりませうか。」

「えゝ、いゝわ。」

二人は、二つの蝶のやうに――純白なとは云ひがたい、美しい彩紋の――義輔の畫室へは入つた。

義輔の畫室は、心持よく明るかつた。天井の曇り硝子を透して、光線は一杯に溢れてゐた。都は籐

椅子に腰かけながら、部屋の中を見廻した。隅の一脚の畫架に、義輔の、最近の製作である瞳の肖像が懸つてゐた。

「本當に、お姉様のはよく出來たわ。」と言ひさして都は、媚のある眼差を、子爵に投げながら言つた。

「貴方、今日はお姉様に、お會ひになりませんでしたの。」

「何故、お會ひしなければ、ならないのですか。」

子爵は改まつたやうに言ふと、都と向ひ合つて、椅子に腰をかけた。

「いやに、お改まりになるのですね。」

「いえ、別に。」

「貴方、私のお姉様お好きなんでせう。」

「嫌ひぢやありませんね。」

「さうでせう。」

「何うしてゞす。」と、子爵は言つて、笑ひながら都の顔を眺めた。

「私のお姉様は、綺麗ですもの。」

「そりや、綺麗ですとも。」

「さう、矢張り貴方にも、綺麗に見えましたのね。」

「可笑しいですね。貴女には、綺麗に見えないんですか。」

「私、お姉様の顔の型好きぢやないの。爛子ちやんの方がいゝと思ひますわ。」

「さうでせう。爛子さんの方が、何らかと言へば、貴女に近いですね。」子爵はからかふやうに言つた。

「まあ、いやだ。」都は、さすがに眞赤になつて、てれがくしに言つた。「ね早く描いて下さい。かうしてゐて、いゝんですか、此のまゝで。」

「さう急いぢや困りますよ。描く前に、貴女の氣持を理解することに、努めなくつちや。それには、かうしてお話してゐなければ分らないぢやありませんか。」

「だつて、お姉様の時、そんな手數なんかおかけにならなかつたわ。」

「それは、もうちやんと僕に分つてゐたからです。」

「ぢや、私の氣持は、まだお分りにならないの。」

「貴女は、華美で嘘の多い方です。それになか〳〵聰明で、お姉様のやうな素直な方とは違ふから。」

「えゝ、どうせ嘘が多いのでございますよ。」都は、すねてつんとして口を緘んだ。

「怒つちやいけませんよ。だが、さうして怒つた姿が畫になりますね。もう少し、すねていたゞきたいんだが。何うです、もう少し頬をふくらして、首をかしげては。」

「まあ、馬鹿にしてゐらつしやるわ。」と言つて、都は義輔をにらんだ。

「いや〳〵、さうして下さらなくつちや、畫の題に困るぢやありませんか。例へば『愛人』と云ふ題をつけるとすると、さう云ふ風にすねた所が、一番面白いですからね。」

「だつて、貴方のお氣持だつて、モデルに分らなければ、それに應じたやうな態度が出來ないぢやありませんか。」

「なるほど、では僕の氣持が分らないと仰しやるんですね。」
「えゝ。」
「では畫題を變へなくちやなりませんね。何かありませんか。『訪問客』とでもしますかね。それとも『ある訪問客』とでもしませうか。」
「それでは、意味がありさうぢやありませんか。」
「無論なくては、困りますね。『ある』とすると、訪問客が、どう云ふ種類の者であるかを、人は感じたがりますからね。」
「では、何う云ふ意味の訪問客になりますの。」
「例へば、僕が貴女を愛してゐるのですね。」と、突然子爵は言つて、都の顏をぢつと見詰めた。
都は、それに答へる視線を默つて返すと、急に笑ひ出した。
「そこだ！そこを僕は描きたい！　今の貴女の笑ひは、一寸妙な感じのする笑ひです。人を馬鹿にしたやうな、人の眞實の心を嘲笑するやうな。」と言つて、子爵は都をにらんだ。
都は、急に笑ひ聲を止めると、眞赤になつて俯むいた。すると子爵は、卓子の上にあつたスケッチブックをとつて、すら〳〵と都の姿を描き出した。都は、ふとそれに氣が付くと、立ち上つた。
「今動いちやいけませんよ。」子爵は、鉛筆を止めて言つた。
都は、默つて出口の方へ歩き出した。
「何うなすつたんです。」

「貴方は私を玩具にしてゐらつしやるんです。」都は強く言つた。
「いえ、さうぢやありません。僕は、貴方が顏を赤くなすつたのが、大變氣に入つたのです。貴女のやうな方が、顏を赤くなさると、僕は大變嬉しいんですよ。何故つて、貴女は今まで顏を赤くなすつたことがないぢやありませんか。とにかく、僕はまだ見たことがありませんよ。」
「お轉婆ですからね。」
「まあ、何でもいゝから、もう一度茲へ來ておかけなさい。」
都は扉のハンドルに手をかけた。義輔は立ち上つて、都の傍まで行くと、彼女の肩に手をかけた。
「さうお急ぎになる必要はないんでせう。」
「私には、貴方が私を馬鹿にしてゐらつしやるとしか見えないんですもの。」
「馬鹿にしてゐるかどうか、今に分りますよ。」
「貴方は、私のお姉樣には、さうじやありませんでしたわね。」
「では、何うだつたと仰しやるんです。」
「非常にお優しかつたわ。」
「ぢや何ですか。貴女には、僕が非常に優しくないと仰しやるんですか。」
「えゝ、さう。」
「さうですか。ぢや、仕方がありません。お歸り下さい。」と、子爵は突放すやうに言ふと都の肩から手を放して卓子の傍へ引き返した。

都は、上手に出られると、何うしても出て行くことが出來なかつた。子爵の方を振り向いて、小聲で言つた。

「貴方は、お姉様を愛してゐらつしやるんでせう。」

「いゝえ、僕は、貴女の方を愛してゐます。」

子爵は、きつぱりと言ひ放すと、金口の紙卷煙草に火を付けて、窓外に向つて悠々と煙を吐たい。

都は、子爵の方へ向き返つた。

「本當ですの。」

子爵は、默つてゐた。

「ね、堀田様。」

「もう、梅雨が過ぎてもいゝ頃ですね。」

都は、子爵の傍へ近寄つて來た。

「もう、私歸りますわ。」

子爵は、矢張り默つたまゝ、都の方を見向きもせず、窓外の濃い青葉ごしに、夏らしくなつて來た白い層雲に眼をやつてゐた。

都は、子爵の椅子に手をかけた。

「ねえ。もう、歸らしていたゞいてもいゝんでせう。」

子爵は、急に都の顏を見詰めると、自分の膝を指さして言つた。

「こゝへお掛けなさい。」

都は、暫くもじ〳〵して立つてゐた。すると、子爵は、彼女の手を取つて、自分の膝の方へ引き寄せた。籐椅子がキシ〳〵と鳴つた。都の身體は、輕く子爵の膝の上に落ちてゐた。甘苦しい沈默が在つた。

「ね、貴方は、お姉様を愛して、ゐらつしやるんでせう。」都は、小聲で子爵の耳許に囁いた。

「もし、さうだつたら貴女に對して、こんな眞似が出來ますか。」

都は、子爵の胸に顏をつけた。彼女の白い頰は、赤らんだ。すると、子爵は何と思つたのか、都を突き降すやうに押しつけて言つた、

「貴女には戀人がお在りになるんでしたね。僕はすつかり忘れてゐた。」

「嘘です。うそです。誰がそんなことを言ひました？」都は蒼くなつた。

「何日だつたか、貴女の家の晩餐會に僕が招待された時、菅とか云ふ人がゐたでせう。僕を侮辱した男です。」

「あゝ、あの方。あの方が、私の戀人だと仰しやるの。まあ。」都は、驚くやうな表情をすると笑ひ出した。

「いゝえ。お待ちなさい。あの男は、貴女を愛してゐますよ。」

「いゝえ。違ひます。」

「愛してゐます。それは分りきつてゐます。」

「だつて、私あの方を愛してゐるなんてお思ひになつて？」
「まだ、そこまでは話してゐないぢやありませんか。尤も、貴女が、あの男を愛してゐたつて僕は一向かまひませんがね。」
「えゝ、私、あの方を愛してゐますわ。」と、都は言ふと、急にくるりと子爵に背を向けた。
「結構です。だが、この問題は、何うなるのかな、僕が、貴女を愛してゐる。貴女は、あの男を愛してゐる。あの男は、貴女を愛してゐる。と、すると一番損な役廻りをしてゐるのは、僕ですね。さあ都さん歸つて下さい。」
さう言ふと、子爵は都の背を、扉の方へと押しやつた。都は、わざと、ひよろ〳〵と押されたやうに、子爵から離れると、直ぐ子爵の方を振り向いて、上眼使ひで見た。
「どうぞ、お歸り下さい。」
「まあ、貴女本當に、私が菅さんを愛してゐると、お考へになるの。」
「さうです。」
「ぢや、いゝわ。勝手に、さうお思ひ遊ばせな。私、もう歸らうかしら。ね、もう幾時頃でせう。」と言ひながら、都はまた義輔の方へ寄つて來た。
「知りませんよ。僕は、貴女の歸る時間なんか考へてゐるやうな、そんな冷淡な男ではありません よ。」
都は、義輔の後から、急に彼の頭を兩手で抱いた。

「よして下さい。」と言つて、子爵は頭を振つた。
「御免なさい！」
都が、手を放さうとすると、子爵はその手をもつて、都を引き寄せた。
二人の唇は、途中で合つた。

ほのかな明るさ

その夜、瞳は頭が痛むと言つて、誰よりも早く床に就いた。隣りの茶の間では、都はいつもより噪やいで、女中や爛子を相手にして話してゐた。母親のおとしは、老眼鏡をかけて、雜誌を見てゐたが暫くすると居睡り始めた。爛子は、母の容子が、可笑しいと言つて笑つた。すると、おとしは、ぼんやりした眼を開けて、急に何か思ひ出したか、都の顏を默つて見詰めてゐた。
「なぜ、お母さん、私の顏を御覽になるの。」
「お前、今日は何處へ行つたの。」
「堀田さんの處へ行きましたの。」
「堀田様が、來いつてお言ひだつたのかい。」
「えゝ、だつて私、畫を描いていたゞくのですもの。」
「また、モデルにかい。」
「えゝ。」

おとしは、また居睡り始めた。

「姉さん、どんな風にしてゐるの。」と、爛子は面白さうに訊いた。

「どんな風つて、どうなの。」

「瞳姉さんのやうにして、描いて貰つてらつしやるの。」

「私のは違ふの、私のはね、籐椅子に腰かけてゐるの。」

「いつ描けて。」

「まだ分らないわ。」

「今日から。」

「さう。なか〳〵モデルつて骨の折れる仕事ね。」

隣室の妹達の會話を聞いてゐる瞳の心は、忽ち冬の海のやうに暗澹としてしまつた。都の言葉がその冬の海に暴れる嵐のやうに怖ろしく聞かれる。自分と別れてから、一時間も經たない裡に、妹を迎へた子爵を考へると、瞳の胸は毒を飲まされたやうにうづいた。人生、そのものまでが、暗くなつてしまふ。毎日これから、曾て子爵の前に自分が立つた時と同じやうに、子爵の愛の眼が、妹の身體に降りそゝぐのだと思ふと、瞳はたまらなかつた。いかに、自分に對する怒からだとは云へ、子爵の仕方はあんまりだと思つた。その掌を返すやうな態度を思ふともう彼女には子爵ばかりでなく、世の中の凡ての男の心が分らなかつた。しかし、都も都である。無論、それとは知らないのではあらうが姉の心を弄んだ——瞳には、今ハツキリさう思へた——男の誘ひに、それほど容易になび

くと云ふことがあらうか。さう考へると、瞳は、凡ての事が不快であつた。今は、まだ遲くない。子爵に凡てを與へて、子爵の愛をつなぎ止めようか、さうも思つて見たけれども、子爵や妹などが、何となく怖ろしくあさましく考へられ、もう何をする氣もなかつた。たゞ蒲團の襟をかみしめかみしめ泣きしきつた。

十時が鳴つた時、都と爛子とは、寢るために、瞳の部屋へは入つて來た。八疊の瞳の部屋は姉妹の寢室に當てられてゐるのだつた。瞳は、都を見るのが、苦痛であつた。彼女と一の部屋で寢ることさへ苦痛であつた。しかし、都は姉の苦痛を知らぬげに、蒲團の中へは入ると、直ぐやすらかないびきを立てゝゐた。瞳には、都の寢顔が、いかにも幸福さうに見えた。丁度、自分が曾て、さうであつたやうに。自分の幸福が、いま妹にうつりかけてゐるのだと思ふと、彼女はどうしても、寢付くことが出來なかつた。瞳は、幾度も溜息を吐いて、寢返りを打つた。するとその度毎に、枕から頭を上げて彼女を見るのは、爛子であつた。

「お姉様、何う。まだお頭が痛いの。」と言つて、爛子は姉の顏をのぞき込んだ。

「ありがたう。あなたは、もうねて頂戴な。」

「いゝの。私、眠くなんかないんですもの。何かお藥、お飲みにならない？」

「もうおやすみなさいな。」

「えゝ。」

瞳は、爛子の肉親の愛を感じると、涙がまた流れて來た。

その夜、彼女は一睡もしなかつた。

翌日は、神經の烈しい昂奮のために、身體が疲れたと見え、何となく物憂くて、正午近くまで床を離れることが出來なかつた。起きると、平素のやうに、鏡の前で髪を梳いて見た。けれども、もう、彼女は自分の髪の美しさに、何の欣びも感ずることが出來なかつた。窓から、射し込んで來る太陽の光までが、何となく力なく見えた。一疋の密蜂が、部屋へは入つて來て、うなだれた瞳の周圍を、暫くの間飛んでゐた。

午後になつた。瞳は、自分の部屋の机に凭れながら、朱色の衣紋掛にふうわりと垂れてゐる都の夏着を眺めてゐた。すると、緣側の方で、都を呼ぶ女中の聲が聞えて來た。

「なあに。」

高い都の聲が、どこからか應じた。

「堀田樣が、いらつしやいました。」

「あら、さう。」と云つて、都の威勢よく飛び出して行く氣配がした。

瞳は、胸がつまるやうに思つた。彼女は、今子爵に會ひたくはなかつた。

暫くすると、子爵の快活な聲と都の聲が、もつれ合つて、隣室の方へ近づいて來た。瞳は、彈かれたやうに、立ち上つた。彼女は、自分とのいきさつがありながら、昨日の今日、都を訪ねて來る子爵の心が、怖ろしかつた。それは、復讐、面當としか思へなかつた。自分が、いつか感じた通り、子爵はやつぱり、惡魔メフイストフエレスなのか。

瞳は、身體が、わな〳〵顫へて來た。隣室からの話聲は、手に取るやうに聞えて來た。

「昨日あれから、何うなすつて？」

「東京へ歸りましたよ。」

「今日から始めて下さる？」

「始めませう。うまく出來上れば、今年の帝展へ出さうと思つてゐるのですよ。」

「いやよ、そんな事をなすつちや。」

瞳は、都と子爵との餘りに、馴々しい會話を、聞いてゐるのに忍びなかつた。彼女は足音をしのばせて自分の部屋から逃げた。

＊　＊　＊

彼女が、家を出て新井の藥師の境内で、一時間ばかり時を潰し、もう子爵が歸り去つた頃だらうと思つて、トボ〳〵と我家へ歸る道だつた。ある小路の角を曲ると、そこでバツタリと、子爵と妹と義輔とに會つた。

二人は瞳の家で話をした後、手を携へて散歩に出たのだつた。

「あら！」都はさすがに顏を眞赤にした。「まあ、お姉樣、何處へいらつしつてたの。」

瞳は、返事をしようと思つたが、胸一杯で、義理にも物が言へなかつた。

義輔も、さすがに顏が、蒼くなつた。が、彼は冷然としてステツキを振りながら、言つた。

「如何です、御一緒にいらつしやいませんか。」

「いゝえ、私は失禮します。」瞳は、滿身の勇氣をこめて、これ丈言つた。

「あゝさうですか、それでは、都さん失禮して行きませう。」

「えゝ。ぢや、お姉様、直ぐ歸りますわね。」

二人は、三間ばかり行き過ぎると、はや何か言つて笑つた。

瞳は、烈しい打撃を、小さい胸に、ぢつとこらへた。自分と子爵とが、初めて戀を囁いた新井の藥師への散歩を、子爵は今、他の女――妹ではない、それはたしかに他の女――と試みてゐるのだ、さう思ふと、瞳は道の上に、倒れさうになる。それを、瞳はぢつとこらへた。

妹は、子爵の愛を得てゐる。が、しかし妹は、自分よりは何か卑しいことをしてゐないか。自分はどんなに愛してゐても、卑しいことはしたくない。自分は卑しいことをしないために、子爵の愛をつなぎ得なかつた。自分には、卑しいことは出來ないのだ。さう考へると、瞳の心に、ほの〴〵とした明るさが、漂ふ。が、瞳の心の苦しさは、そんな明るさでは何うにもならないほど大きい。殊に、子爵が故意に、自分を苦しめてゐるのだとすると、この後どんな苦痛が、自分を待つてゐるかも知れない。瞳は、裂けるやうな胸の苦しさを、ぢつと忍んで、心の裡のほの〴〵としたかすかな明るさを頼りに尙、自分を待つてゐるに違ひない、未來の苦痛に負けまいと、兩手で自分の胸を抱きしめながら、たそがれそめた家路を辿つた。

慕情

菅秀三は、本郷の彌生ケ岡の下宿の部屋で、籐椅子に凭りながら、空の白い斷雲を眺めてゐた。彼は、來る秋の帝展には、茫漠とした雲の中を、一羽の鷺が飛んでゐる處を描きたかつた。もう、一月ばかりも、それについて準備をしてゐる。それは、今迄のありふれた畫題と一點似た處がないでもないが、その眼の炯々とした力、その羽根の征服的な曲線を、雲際にくつきりと描き出すことに依つて一種新鮮な力を出すことが出來ると思つた。彼は、その鷺の畫に依つて、初入選の夢を夢みた。入選するばかりでない。それが推薦され、新進畫家の傑作として、會場に光を放つてゐる處を、胸に描いた。

『都は、欣ぶだらう。彼女は、雙手を揃いて自分を欣び迎へるだらう。二人となない良人として、自分を尊敬するだらう。篠崎の一門は、自分のために、再び世の中に翔き出すことだらう。』

さう考へると、故郷の父が、狂氣して出京する所や、緣談が直ぐ捗どつて、都と自分とが、帝國ホテルの眩めくやうな光の裡に、新郎新婦として立つてゐる光景などが、生々とした實感を伴つて、胸の裡に描き出された。すると、彼は微笑して、それを臧つて置いて、別の事を考へる。

「いや、待つてくれ。鷺の畫よりも、都の肖像を描かうかしら。先生は、『俠妓圖』を描いて有名になられたのだ。自分も美人畫を描かうかしら。ひとつ、『慕情』と云ふ題にして、都が一人物思ひに耽つてゐる處を描かうかしら。』

そんな空想が、大空の雲のやうに、次から次へと湧いて來るまゝに、秀三は益々都に逢ひたくなつた。いつも日曜に行くことに、定めてゐるが、この前の日曜には行けなかつた。今度の日曜までには

まだ三日もある。さう考へ出すと、彼はぢつとして居られなくなつて、足許から鳥が飛び立つやうにあわたゞしく下宿を出た。

×

秀三が、中野の篠崎家の玄關へ着いた時、都は、恰度隣家の子爵の畫室へ通ふ、いつもの時刻だつた。秀三が、都の部屋へは入ると、青みがゝつた華美な瀧縞のセルを着てゐた都は、困つたと云ふ顔をした。が、すかさず笑顔に變へて言つた。

「あら、まあ、よくいらつしやいましたわねえ。どうしてゐらつしやるかと思つてゐましたの。雨が降り續いたのでお困りだつたでせう。私なんか、梅雨には氣がくしやくしちまつて。」

さう快活に話されると、直ぐ明るくなつてしまふ菅の心だつた。

「もつと、度々お伺ひしようと、思つてゐたんですがね。しかし、あまり來過ぎると、お困りだらうと思つたんですよ。」

「あら、あんな意地のわるいことを仰しやつて。」

都が、きつと媚のある大きい眼を刮つて、さう言ふだらうと思つてゐた菅の期待は、はづれた。

「雨が上ると、またきつと急に暑くなりましてよ。」

都は、話を變へるやうに、窓の外の毒々しく青くなつた若葉を見上げた。

菅は、少し淋しくなるのを抑へて、

「あのね、僕は今、帝展の製作に、とりかゝつてゐるのですがね。それを、僕は貴女に捧げたいと、

思つてゐるんです。」

「まあ、さうですの、ありがたう。何をお描きになつてゐらつしやるの？」

平靜な都の語氣には、少しの興味も動いてゐなかつた。

「僕は、貴方の肖像を描かうと思つてゐるんですがね。先生は、『俠妓圖』で、有名におなりになつたんでせう。僕も一世を驚倒させるやうな美人畫を、貴女をモデルにして、描きたいと思ふのです。」

都は、一寸顏色を動かしたが、直ぐ快活に言つた。

「まあ、私をお描きになるの。だつて、私のやうなものは、駄目よ、きつと駄目よ。」

「何うしてゞす？」

「だつて、私のやうなものが、畫になつたつて、とても駄目よ。」

「僕は、貴方が物思ひに耽つてゐらつしやるところを描きたいんですよ。結婚前の思ひ出に、ひとつ貴女の愛情を、永久に保存して置きたいと思ひましてね。それで、そんな構想を立てたんです。こんなことを言ふと、なんだか、貴女に愛を强要してゐるやうでいやですが、貴女が僕のことを思つて、暮れ方に物思ひに耽つてゐるところを描きたいんです。」

「まあ、貴方のことを思つてゞすつて。」

都は、皮肉な微笑を唇のあたりにもらすと、また窓の外へ眼をそらした。

「ねえ、いゝでせう。それとも、何か御都合のわるいことがあるんですか。」

「いゝえ、嬉しいわ、でも、私自分の畫が展覽會に出るなんて、何だかきまりが惡いわ。」

「そんなことがあるもんですか、畫と實物とは違ひますからね。貴女だと云へば、貴女だし、貴女でないと云へば、貴女でないのですからね。」

「それで、私モデルにならなければなりませんの。」

と、都は少し顏を赧くして訊いた。それを菅は、都が單に恥かしいのだと解釋した。

「なつて下さいますか。ありがたう。それほど、結構なことはありません。今年の帝展で、きつと第一の名譽をかち得て見ます。先生を辱めないやうな傑作を描くつもりです。貴女も、應援して下さるでせうね。藝術家に力を與へるものは、眞實の女性の愛以外には、何もありませんからね。實際、愛人の愛ほど貴いものが世の中に在るでせうか。それは、いろ〳〵な美しい仕事貴い仕事の、原動力になるものです。僕は、貴女の愛情が純だと思へば思ふほど、みんなに威張つてやりたくなるのです。自分ほど、美しい純な愛人を持つてゐる者があるかと言つて。」

菅の熱情が、だん〳〵烈しくなると、都はもう菅の顏を見ることが出來なくなつて、いつまでも窓の外を見てゐた。窓の外には、風が起つて、青葉が波のやうに搖れてゐる。

都は、初めから、何うしてこの場を、はづさうかと考へてゐた。菅の熱情に燃えた言葉が、心の面に觸れた丈で、空しくはね返されてしまふ。

菅は、自分の言葉が、何の手答もないことに、漸く氣が付いた。

「都さん、何うたすつたんですか。」

都は、菅の方を振り向くと、故意に『貴方は馬鹿ですね。』と云ふやうに、

「まあ。なぜ？」と、聲高く笑つて言つた。

「貴方は、なぜそんなよそ〳〵しくなさるんです。」

菅の眼の色は、變つて來た。

「何うして、そんな事を仰しやるの？」

「貴方は、僕に何とお誓ひになつたか覺えてゐらつしやいますか。」

「覺えて居りますわ。」都は、ツンとして言つた。

「ぢや、何うしてさう、よそ〳〵しくなさるんです。僕には、貴方の心が分りませんね。僕がこんなに、貴女を愛してゐるのが、お氣に入らないのですか。」

都は手巾を啣へると、默つて菅から眼をそらした。

「僕は、何か貴方にいけないことをしたのですかね。もし、貴女に何か不德なことをしたと云ふのだつたら、どしどし云つて下さい。僕はあやまらなければなりません。だけど、僕は貴女を愛してゐると云ふ意外には、貴女に何一つ、惡いことをした覺えはないのです。それだのに、なぜそんなに冷たくなさるのです。」

「もう、そんなことを仰やらないで下さいませんか。」都は、少し蒼くなつて言つた。

「何うしてです。なぜ言つたら、いけないんです。貴女は、僕を愛すると言つて下さつたぢやありませんか。それに對して僕が貴女を……」

菅が、いやが上にもいきり立たうとするのを抑へて、

「あのね、菅さん。私今日は一寸、用がございましたの。」と、都は急に、きつぱり言ひ出した。
菅は、暫く默つてゐたが、急に晴々となつて言つた。
「あゝ、さうでしたか。それは失禮しましたねえ。僕は、餘り貴女を愛し過ぎてゐるために、つひうたがひつぽくなるんです。御免なさい。どうぞ、僕にかまはないで御用をして下さい。」
「すみませんわねえ。」都は、初めて美しい媚をみせた。
「何か、僕でも間に合ふことならいたしますよ。」
「いゝえ、結構ですの。爛子ちやんとでも、遊んでゐて下さいね。」
「なに、待つてゐますよ。長くかゝるんですか。」
「えゝ。少し。」都は言ひにくさうに言つた。
「何です。何處かへ、いらつしやるんですねえ。」
「えゝ。實は、今肖像を描いて貰つてゐますの。」都は、やつと決心したやうに言つた。
菅の顏は、叩かれたやうに蒼くなつた。
「誰にです。」
「堀田子爵に、描いていたゞいてゐるの、モデルつて、なか〳〵骨の折れる仕事ですね。」
菅の眸は、火がついたやうに燃えた。
「何處でゞす？」
「あの方の畫室に通つて居りますの。いつも、今頃ですのよ。光線が變化するといけないからつて、

時間が定まつて居りますのよ。」
「貴女一人でゞすか。」菅の顏は、土のやうに蒼かつた。
「えゝ、姉さんは、もう濟みましたの。そりや、お姉樣のは、よく出來ましたの。」
「貴女は！　貴女は！」
菅は、終りまで言葉を續けることが、出來なかつた。彼の顏は、烈しい心の苦痛のために、引き締つて來た。
「ちや、一寸行つて參りますわ。すみませんわね。」都は、立ち上つて部屋を出ようとした。
「都さん。」菅は强く言つた。
都は、默つてわるびれもせず振り向いた。
「貴女は。」と言つて、菅の唇は慄へた。
「何うかなさいましたの。」
「行つてはいけません。」
「何うして。」都は、平然と訊き返した。
「いけません。貴女は、僕を侮辱するんですか。」
「まあ、私、いつ貴方を侮辱したでせう。」
「これが、侮辱でなくて何です。僕は、侮辱されようと思つて、貴女を愛してはゐないんです。」
「貴方が、私を愛して下さいましたことは、お禮申し上げますわ。」

「何を！　もう一度言つて御覽なさい。貴女は、僕を馬鹿にしてゐるんですか。」
菅は、頭髮を掴んで、唇を嚙みしめた。
「まあ、何うして、さうお怒りなさいますの、私、貴方のお氣に觸るやうなこと、何か言ひまして。もし、何か言つたのだつたら、赦して下さいな。」都は、嫣然として笑ひかけた。
「都さん貴女は僕に誓つたことを、お忘れになつたのですか。貴女は僕を愛してゐると言つたではありませんか。貴女は、僕をだましたんだ。」
「ほゝゝゝゝ。まあ、菅さんつて、本當に何うかなさいましたのね。そんな、大問題ぢやありませんわ、私、たゞ掘田樣に、肖像を描いていたゞいてゐる丈ではありませんか。それが、そんな重大な問題でせうか。」
「貴女が僕を愛してゐて下さることが本當なら、僕の現在の苦痛が分る筈です。」
「まあ、そんなにお苦しみになつて、ゐらつしやいますの。」
「彼奴は、貴方を奪はうとしてゐる。彼奴は色魔だ。彼奴は！」菅は、昂奮して叫んだ。
「お止しなさい！　貴方の人格に、かゝはりますわ。」と、遮つた。
「いや、僕は自分の愛人が他人に奪はれようとしてゐた時に、默つてゐなければならないと云ふ筈はない。」
都は、明かに狼狽した。
「そんなこと、仰しやるのなら、私失禮しますわ。それに、早く參らないと光線が直ぐ變るんですも

の。」
「僕は、貴女から光線の事なんか聞かうとは思つてゐないのです。」
都は一旦浮かした腰を下して、手の指輪を眺めながら呟いた。
「私、何うしたら、いゝのかしら。」
菅は默つて顏をひそめてゐた。苦痛に堪へ切れないやうに、彼の眉はぴり〳〵と動いてゐた。
「都さん。」と、菅は彼女をにらんだ。
「えゝ。」
「貴女は、僕を愛してゐるんですか。」
都は、默つて返事をしなかつた。
「あゝ駄目だ。」菅は、低く呟くと、立つて窓の處へ行つた。が、くるりと都の方へ向き返ると言つた。
「貴女は、あの掘田君を愛してゐるんでせう。」
都は、顏を上げると、馬鹿らしいと云つたやうに、急に笑ひ出した。
「本當に、何うなさいましたの、私、驚いてしまひました。」
「僕には、貴女の心が全く分らない。」
菅は、部屋の中を歩き出した。
「都さん、なぜ、貴女は僕のモデルになつて下さらないんです。なぜ、僕の力になつて下さらないんです。」

「でも、私、いま掘田様に描いていたゞいてゐるんですもの。」
「貴女は、あの男をそれほど愛してゐるんですか。」
「まあ。あの畫家のモデルになると云ふことは、その人を愛してゐると云ふことにはならないわ。」
都は美しく笑つた。

同病相憐む

その時、都の部屋の襖を、輕くノックする音がした。
「どなた！」都は訊いた。
「僕です。いゝんですか。」と、外から聲がした。それは、菅も忘れたことのない堀田義輔の聲であつた。都は、表面丈は當惑の色を浮べたが、その實生々とした聲で言つた。
「まあ、堀田さん、すみませんでしたわねえ。これから、お邪魔しようと思つてゐた所でしたのよ。」
「さうですか。あんまり、お見えにならないものですからね。」
何氣なく義輔は、部屋へはいつたが、菅を見ると、さすがに立ち竦んだ。が、直ぐにこやかに笑つて會釋した。が、菅はそれに應ずる餘裕がなかつた。
「御來客だつたのですか。それぢや、遲いわけですね。さうとは知らないものですから。」
「まあ。本當にお待たせしましたわねえ。」
都が、媚びるやうに言ふのを、菅は聞いてゐるに堪へなかつた。

子爵は、苦り切つてゐる菅の方に向いて言つた。
「どうです。この頃は、御製作の方はいかゞです。」
菅は、暫く默つてゐた。が、突然堤が決れたやうに言つた。
「僕は、御存じの通り、貴方のやうに幸福ではありません。」
「さうですかね。僕はまた、僕がそんなに幸福だと云ふことを、貴方に初めて教はる譯ですが、それとも、僕が、貴方を不幸にしたとでも、仰しやるのですか。」と、子爵は平然として言つた。
菅は、子爵を睨みつけた。
「では、申しますがね、都さんは、僕と結婚する筈の人ですよ。僕の妻になる筈の人ですよ。」
子爵も顏色を變へた。
「をかしいですな。それが、何う僕の幸福と關係するのです？」
「人と云ふものは、自分の愛人を、他人に默つてモデルにされて、欣ぶものはゐないですよ。」
「それで？　はゝゝゝゝ、僕が都さんに、坐して貰つてゐることがいけなかつたんですね。はゝゝゝ、僕は都さんと貴方とが、それほど……」
都は、先刻から顏を赧くして、うつむいてゐたが、この時彈かれたやうに顏を上げた。
「菅さん、あんまりです。餘り、お言ひ過ぎになります。私、貴方と結婚するなんて、そんなそんな……。私、もう茲にはゐたくございませんわ。」
都は、ぷいと立ち上ると、部屋の外へ走り出た。

「ぢや、僕もこれで失禮します。」

子爵は、直ぐ立ち上つて、都の後から部屋を出た。

さんざんに碎かれた心を懷いて、菅は殘された。凡ては、絶望だつた。都の心はもうスツカリ他人のものであつた。彼は、茫然として部屋の中に突つ立つてゐた。ふと、隣の部屋から、女のすゝり泣くやうな聲がした。が、女が泣く譯はない、耳の錯覺に違ひないと思ひ返すと、直ぐそれが聞えなくなつた。彼は、頭髪を掴み上げながら、緣側に置いてある籐椅子の上に、倒れかゝつた。彼が、十分間ばかり身を悶えてゐた時だつた。しづかに、扉が開いて、瞳がは入つて來た。菅が、默禮して顏を見上げると、瞳の眼の緣が赤くなつてゐた。菅は身を起して言つた。

「どうかなさいまして？」

「いゝえ。隣に先刻から居ましたの。貴方がお氣の毒だつたわ。」

さう言ふと、瞳の美しい眼から、涙がこぼれさうになつた。

菅は、それを自分のために、泣いてくれるのだと思つたので、口惜しさや嬉しさが、一緒になつて初めて涙ぐんでしまつた。

「私、貴方がお氣の毒でなりませんの。」瞳は、眼から溢れようとする涙を抑へながら言つた。

「僕は、なんとも思つてゐません。何とも思つてゐません。」

さう言ひながら、菅は、籐椅子の腕に顏を伏せて、無念の涙にむせんでゐた。

「都には、まだ本當の愛情が、どんなものだか分らないのです。今に、きつと後悔する時が來ます。

でも、こんなお話よしませうね。」

瞳は、淋しく菅に寄り添つて立つた。菅は默つて首をあげなかつた。

「菅さん。何か、今描いてゐらつしやるの。」

「僕は、もう仕事なんか止めます。」

「いけませんわ。そんなお心になつては、ねえ、どうぞ御勉强して下さいな。今年は、何うしても入選して見せると、あんなに仰しやつてゐたぢやありませんの。」

瞳は、やさしく慰めた。が、慰めてゐる筈の瞳の眼から、涙が絶間なく流れて來た。人は「しつかりなさい！」「しつかりなさい！」と、他人をはげます事で、本當は自分を、はげましてゐる事がある。瞳も、菅の苦しい胸を慰める言葉で、本當は自分自身を慰めてゐるのかも知れない。

菅は、涙にむせびながら、いつまでも顏を上げなかつた。

「本當に、菅さん、どうぞ妹をゆるしてやつて下さいな。餘り憎まないで下さいね。」

その言葉も、やつぱり瞳は自分自身に、言ひきかせてゐるのかも知れない。妹をゆるさなければならない。瞳も、ともすれば嫉妬に心が燃え立つ時、さう言つて自分の心を、いましめねばならなかつた。

「あの子は、今に目が覺めると思ひますわ。あの子は、今は目がくらんでゐるのだと思ひますわ。貴方の本當の愛が、あの子に、解らないことはないと思ひますわ。お心を丈夫にして下さいな。きつとあの子は貴方に歸つて來ますわ。」

それでも、菅は首を上げなかつた。瞳は、この場合の重くるしい氣分を變へるために、女中を呼んで紅茶を命じた。

女中が、銀の盆に可愛い紅茶の茶碗を二つのせて持つて來た。

「さあ。召し上れ。」瞳は、菅にその一つを取つてやつた。

「ありがたう。」菅は、初めて顏を上げた。そして、瞳の泣きはらした眼を見ると、感謝の心で、胸が一杯だつた。

「貴女にまで、御心配かけてすみません。」

さう言つて、菅は紅茶をすゝつた。その味が、菅には鹽を嘗めるやうに、苦かつた。

同病憐む。こゝに被害者が二人ゐる、さう思ふと瞳は、菅がいたはしくてならなかつた。

「相見互ですわ。お互に元氣をつけて、世の中を渡るのですわねえ。」

瞳は、淋しく笑つた。その笑が、モナ・リザの笑ひのやうに菅には貴く見えた。

「ねえ、菅さん。どんな苦しい事があつても、その事で身を傷つては損ですわ。苦しい事や悲しいことがあつても、それで身を傷つては損ですわ。それで、心をきたへて、少しでも強くなりたいと思ひますの。」

菅よりも、年下の瞳が、菅には姉のやうに頼もしく思はれた。

「ねえ、菅さん。私、お願ひがありますの。聽いて下さる？」

「何です。」菅は、重い口を開いた。

「堀田さんは、都の肖像をきつと、帝展へお出しになると思ひますの。貴方も、負けないやうにして下さいな。ねえ。」

さう言はれると、菅は急に頭を上げた。眼が、いきゝと輝いた。

「それから、まだお願ひがございますの。あの堀田さんは、本當に都を愛してゐるかどうか分らないと思ひますの。今に、きつと都が、忘れられる時が來ると思ひますの。それで、貴方はどうぞ、都を忘れないで下さいな。都が、罪を悔いて貴方の處へ、歸つて來る時が、きつとあると思ひますの。その時に、都を許して下さいね。お願ひしますわ。その時、許して下さる？」

菅は、しばらく默つてゐた。

「ゆるして下さる？　菅さん。」瞳はうながした。

「ゆるすも、許さないもありません。僕は都さんを心から愛してゐるのです。あの人の心が、他人に向はうと向ふまいと僕は愛さずには居られないのです。僕は捨てられても、忘れられても、踏みにじられても、愛せずには居られないのです。貴女が、仰しやるやうな時が來れば、僕は飛びついてあの人を迎へます。が、僕には、そんな時が、來ようとは思はれないのです。あゝ、苦しい。」

さう叫ぶと、菅は再び、籐椅子の腕に、打ちつけるやうに顏を伏せて、泣いた。

勝利者

都は、畫室へは入ると、子爵と向き合つて、椅子に腰を下した。卓子の上には、白百合の花が床し

い匂ひを放つてゐた。二人は、暫く默つてゐた。

「都さん、お歸りになつては、何うです。」

都は、默つて顏を上げた。

「ね、その方がよかありませんか。」

「何故？」

「貴女が、愛してゐる人が來てゐるんぢやありませんか。」

都は、默つて頰をふくらせた。

「とにかく、僕は餘り氣持がよくはありませんね。」

「私も。」都は、ツンとしてゐた。

「さうでせう。だから、お互に氣持惡く一緒にゐる事はないでせう。」

「えゝ。」

「今日は、仕事はよしませう。」

「えゝ。」

「さあ。お歸りなさい！」

「貴方は、ちつとも私の心を、御存じぢやありませんのね。」と、都は言つて子爵を睨んだ。

「いや、よく存じてゐますよ。」

「ぢや、なぜそんな事を、仰しやつて私を、苦しめようとなさるの。」

「それでも、苦しんで、ゐらつしやるのですか？」

「知りませんわ。」と言ふと、都はうつむいた。

「貴女こそ、僕を苦しめようとしてゐるではありませんか。」

「御隨意に何とでも仰しやいませ！」

「貴女ほど、ひねくれた女の方も知らない。」

「私、貴方ほど」と都は言ふと、急に顏に手を當てゝ、卓子の上にうつぶした。

暫くは、子爵が、やけ氣味にふかす金口の煙草のけむり丈が、もう〳〵と動いてゐた。

「都さん、もう、そんな眞似はよしなさいね。早く歸つて菅君でも欣ばして上げては何うですか。」

子爵は、畫室の中を歩き出した。が、直ぐ立ち停ると、都の白い首筋を、ぢつと眺めながら言つた。

「貴女は、まだあの男を愛してゐるんですか。」

「知りません。」と、都は顏を伏せたまゝ言つた。

「どれ、ぢや、貴女の顏色で、見て上げませう。」

子爵は、彼女の傍へ寄ると、後から都の顏を上げさせた。都は、顏を掩ふ自分の指先の間から上眼で義輔の顏を、一寸見ると、また無理に顏を卓子の上に、伏せてしまつた。子爵は、都の首筋へ、そつと唇をつけると、後から抱へるやうに起した。間もなく、明り取りの硝子から射す柔かな光線の中で、二人の唇は合はされた。忽ち二人の顏には、どちらも勝ちほこつた勝利者のやうな微笑が浮んだ。

「さあ、畫にとりかゝりませうか。」
「えゝ。」都は元氣よく答へると、モデル臺へ進んでいつもの姿勢をとつた。
子爵は畫布に向つて、筆を取り上げながら、都の顏を眺めてゐた。
「一寸。」と、彼は笑つて都を呼んだ。
「何です。」
「用があるんです。」
都は立つて、義輔の傍へ來た。義輔は、默つて、都の手を引きながら、自分の膝の上へ彼女を坐らせた。
「御用つて何ですの。」
「何もないのです。たゞ、貴女の顏を見てゐると、筆を持つ氣持がなくなつたんです。とても女性の本當の美しさと云ふものは、描けるものぢやありませんね。」
「貴方は、お姉樣の時も、そんな事を仰しやつたんでせう。」
「また、いぢめにかゝるんですか。」
「えゝ。」
「どうも、これではたまらないなあ。」
「だつて、貴方がいけないんですわ。」
「から、喧嘩ばかりしちや、とても、この畫は間に合はない。」

「本當に帝展へ、お出しになるの。」
「出しますとも、僕は、これに、精神を凝らして、一つ傑作を描かうとしてゐるのです。人物畫としての新しい境地を開かうと思つてゐたんだが、これぢや駄目だなあ。」
「さう、御免遊ばせ。ね、ねえ、私が惡うございましたわ。御免なさいねえ。」と言つて、都は子爵の胸に顏をつけた。
「急にまた、何うしてそんなことを、言ひ出すんですか。」
「だつて、一生懸命に描いていたゞきたいんですもの、菅さんも、お出しになると言つてゐらつしやいましたわ。私、もし貴方がお負けになつたら、どうせうかしら。まあ、御免なさいね、こんなことを言つて。でも、貴方がお負けになるなんて、云ふことはないわねえ。」と言ひながら、都は義輔の顏を、のぞき込んだ。
義輔の顏は、急に緊張した。
「さあ、お降りなさい。描かう。」
彼は、勢よく言つた。都が再び姿勢を取つた時、義輔の眼は、いきゝと輝いた。

まだ遲くはない

子爵と都との愛は、畫がだんゝ進むにつれて、いよゝ濃くなつた。彼等二人の豐穰な歡樂は、畫室を中心にして、燃えつゞけた。それと正比例して、瞳の心は苦しみつゞけた。そして、日にゝ

心が荒んで行つた。背などには、強いことを言つたものゝ、彼女自身、悲しい事で、心をきたへるには、餘り柔かな心を持つてゐた。

悩の日が、つゞいた。家の人々とも、餘り言葉を交はさなかつた。三度の食事も、すゝまなかつた。肌は白蠟のやうに白くなり、美しさがある凄みを加へて來た。

母のおとしには、瞳の苦悶が汲みとられないではなかつた。しかし、初めは子爵と瞳との接近するのを欣んでゐた彼女は、今まで子爵と都との日に〳〵親しくなる容子を、嫌つてゐなかつた。主義も主張もない女性の常として、娘の中の一人が、子爵夫人になつて呉れゝば、それが姉であらうと妹であらうと、孰らでもよかつたのだ。たゞ、母として日に〳〵痩せてゆく瞳の健康を、氣づかつた。瞳の氣質を知つてゐる丈に、彼女の身に何か一大事が起りさうで、心配でならなかつた。彼女は、時々瞳の部屋を見舞つた。そんな時、瞳は、緣側近く坐つて、ぼんやり庭園の上の空を眺めてゐた。

「お前、そんなにぢつとしてゐちや、身體に毒ぢやない？　燗子がお休みになつたら、一緒に溫泉へでも行つたら何う。」

「えゝ。」

瞳は、いつも曖昧に答へた。實際、彼女には行きたいと云ふ心も、行きたくないと云ふ心も、動いてゐないやうだつた。たゞ、彼女は自分の悩みを、他人に知らせまいとして、編物や裁縫に精を出してゐた。が、精を出してゐながら、

「あら、お姉様可笑しいわ。袖をあべこべにつけてゐるのぢやない？」

燗子から言はれるほど、トンチンカンなことが多かつた。

たゞ、彼女は都とは、なるべく顔を合はさないやうにした。彼女は、何か口實をつけて、寢室を自分一人、二階に移した。そして、自分一人の廣い蚊帳の中で、短夜をもだえ明かすことなどもあつた。

が、いくら都と顔を合はすまいとしても、一つ家に住んでゐる姉妹としては、無理だつた。都が、いそ〳〵と隣りへ行く後姿や、燗子をつかまへて、子爵の噂をしてゐる聲などが、目には入り、耳についた。そんな時、瞳の心は、ちぎれるやうに痛んだ。

やつぱり、義輔のことを忘れられないのだつた。義輔のさし出したみだりがましい手を、拂ひのけて歸つたものゝさて拭つたやうに、男の姿を忘れることは出來なかつた。まして、瞳に取つては初戀である。忘れよう〳〵と努力しても、無駄だつた。その上、あてつけがましく都を訪れる義輔の姿を見、都と華やかに談笑する聲を聞くにつけ、瞳の心はあやなく掻きみだされてしまふのだつた。

それだのに、都は姉のかうした苦悶を知るや、知らずや、いつものやうに、快活に、遠慮もなく振舞つてゐた。ある日、瞳が、居る眼の前で、堀田の話を聲高にした。

「この夏は、葉山に行かないかと、堀田さんが仰しやるのよ。畫が濟んだら、慰勞旁々行かうと仰しやるのよ。ねえ、お母さん、私と燗子ちやんとで、行つてもいゝでせう。」

「でも、堀田さんのお宅だつて、御都合があるでせう。お前達が、二人してお邪魔していゝかどうか。」

「私達が、行くと定まれば、外のお客はみんな斷るんですつて。」

瞳は、そんな話は聞いて居られなかつた。彼女は、その場を逃げるやうにはづして、庭へ降りた。

もうすつかり、夏であつた。百日紅の花が、赤く咲き始めてゐた。

都の聲が、きこえないようにと、庭の奥へ進んだ。欅の大木の樹蔭などには、暗い涼しい蔭があつて、涼風がそよそよ通つて來る。瞳は、一つの大きい木の根を見出して、それに腰をかけたまゝ、いつまでもぢつとしてゐた。

昨日新聞の婦人欄で見た、米國の大學へ留學する同期の卒業生のことを思ひ出した。自分も、外國へでも行つたら、この苦しみから逃れることが出來るかも知れない。そんなことを、ぼんやりと考へた。

ふと、近くの小笹が、サワ〳〵と動いた。そして、生物の呼吸が聞えた。驚いて、振り向くと、堀田の家に飼つてゐる洋犬が、寄り添つて來て、瞳の手を嘗めようとしてゐる。人の心は、頼みにならなくつても、犬の心は頼みになる。慕ひ寄る犬の心が、いぢらしくなつて、瞳は、犬の頭を撫でゝゐた。

「ジュピタア！」

犬を呼ぶ堀田の聲が、間近く聞えた。瞳はハッと駭くより前に、犬は一散に主人の方へ駈けつて行つた。瞳は、胸がさわいだ。堀田に顔を合はしたくなかつた。逃げるやうに、家へ歸らうと立ち上ると、引き返して來た犬は、瞳の足許に躍り狂つた。

瞳が、當惑して振り向くと、ニコ〳〵笑つてゐる堀田と顔を合はした。瞳は、顔中の筋肉を、ひきつらせながら、會釋した。

「こんな處にゐらしつたのですか。」

堀田は、つか〳〵と瞳の傍へ來た。瞳は、返事が出來なかつた。

「ジュピタアの奴！　貴女を見つけたと見えて、先刻から此方へ來たがるのですよ。」

堀田が、何事もなかつたやうに、話するのが瞳には不思議だつた。

「その後、何うしてゐらつしやいます。」堀田は、飛びついて來る犬の頭を叩きながら言つた。

「え、、別に。」瞳は、言葉しづかに言つて、うつむいてしまつた。さすがに、堀田もだまつてしまつた。

「ぢや、私、失禮しますわ。」瞳は、やつとそれ丈言つて、逃げるやうに、堀田の前を去らうとした。

堀田は、あわてゝ止めた。

「一寸、待つて下さい。一寸お話したいことがあるんですがね。」

そんな筈はないと思つたが、瞳は足を止めた。

「あのいつかゞお話しました事ですね。」

「え、。」瞳は、相手の言葉の意味が分らなかつた。

「あは、、僕の戀愛哲學です。僕の戀愛に就いての主張です。」

瞳は、ハッとして顔が眞赤になつた。

「も一度、お考へになつて下さつたでせうか。」

瞳は、頭がカッとして返事が出來なかつた。

「あはゝゝ。も一度、考へ直して下さい。まだ遅くはありませんよ。僕が、本當に愛してゐるのは、貴女一人です。貴女さへ……」

瞳は、頭をつゞけざまに亂打されるやうな氣がするのを、ぢつと堪へてゐた。

「貴女さへ、僕の胸へ歸つて下されば……まだ遅くはありません。」

あの勝ち誇つてゐる妹から、この男を取り返してやらうか。瞳の心は、フラ〳〵とそんなことを思つた。が、次の瞬間、彼女の正しい心が勝つた。

「失禮します。私……」

さう言ふと、振り切るやうに、堀田の傍を離れて、淺い林を斜めに、家の方へ走つた。ジュピターが中途まで追つて來た。

瞳には、堀田の心が分らなかつた。堀田の言ふやうに自分を本當に愛してゐるのかしら。都を愛するやうに見せるのは、自分に對する示威かしら、自分を從へようとする策略かしら。それとも自分に對しても都に對しても、たゞ色好みの男として、深い愛なしに動いてゐるのかしら。

「まだ遅くはない。」それは、何と云ふ怖ろしい言葉だらう。都に對しては本當の愛がないのかしら、自分が歸るのを待つてゐるのかしら。そんなことを考へてゐると、瞳は何が何だか分らなかつた。

翌日の午後だつた。瞳が、平素のやうに、自分の部屋で、ぼんやりしてゐると、燗子があわたゞしく駈け込んで來た。

「お姉様。私、羨しいの！」

「何うして。」

「だつて、都姉さんは、今晩、堀田さんと帝劇へいらつしやるんですつて。」

瞳は、ハツと胸を衝かれた。

「まあ。」

「今、お化粧をしてゐらつしやるのよ。女優劇ですけれども、面白いのですつて。」

「さう。」

瞳は、顏色が變つた。都が、堀田と帝劇へ行く。都の身に、自分に迫つたのと同じ危險が迫つてゐる。それを、姉の身として默つて見てゐてもいゝかしら。でも、自分がそれを彼是言つたら、屹度嫉妬だと思はれるに違ひない。また、嫉妬がまじつてゐることも、本當かも知れない。でも、嫉妬を愼しまうとして、妹をみすゝそんな危險に落してもいゝかしら。肉親の妹を、そんな危險に落してもいゝかしら。たとひ、今まで敵として憎んでみても、やつぱり肉親の妹ではないか、妹に萬一のことがあつたら、結局は一家の者が苦しまねばならない。嫉妬がましく思はれてもいゝ。また、半分は嫉妬であつてもいゝ。でも、姉として、父なき後の姉妹三人の姉として、一言位注意するのは、本當だらう。さう思ふと、瞳の決心は定まつた。

「お姉様、羨ましくない。」

しきりに、羨んでゐる燗子は言つた。

「あゝ。私、都ちやんに話があつたのよ。一寸私の部屋へ來てくれるように言つてくれない？」

「えゝ、いゝわ。」爛子は、氣輕に部屋を出て行つた。

瞳は、苦しい緊張の裡に妹を待つた。

三分ばかり經つた。七三に結つて、薄化粧をした都は、パッと輝くほど美しい顔を、少し不安に曇らせながら、姉の部屋へ來た。

「お姉様、何か御用？」

「えゝ、一寸。」

「さう。」

その美しい眼を、いぶかしげに輝かせながら、入口の柱を背にしてうづくまつた。

妹の言ひ分

瞳は覺悟はしてゐたものゝ、さて都が眼の前に來て見ると、直ぐには物が言へなかつた。義輔が自分にしたことを露骨には言へなかつた。それかと云つて、それを言はずに、妹を警戒することは、難しかつた。

これから樂しい一夕の歡樂へ出かけようとしてゐた鼻先を、姉に呼びつけられた都は、その用事が愉快なものではないことを感ずれば、感ずるほどぢり〳〵してゐた。

「なあに。お姉様、御用は？」と、都は不平さうに、姉を促した。

瞳は、もう默つてゐることは出來なかつた。いつもよりも、口元に姉らしい落着と威嚴とを湛へな

がら、口を切つた。

「何處かへいらつしやるんですつて？」

「えゝ、帝劇へ行つて來るの。」

都は、ツンとして「何が惡いの？」とでも云ふやうに訊き返した。

「何故なの。お姉様。」

瞳は、「誰といらつしやるの？」と、訊きたかつたが、それ丈ははしたない氣がして、言へなかつた。しかし、都は自分が子爵と一緒に行くのを姉が知つてゐると思つたらしく、

「私、堀山様に連れてつて頂くのよ。今度の女優劇は評判がいゝんですつて。」と、白々しく自分から言つてのけた。

けれども、瞳の蒼白い顔は、もう變らなかつた。妹から、そのやうに反抗的に出られゝば、却つて妹を戒めるのに樂な氣持になつて來た。彼女は、なる丈優しく言つた。

「さう。では行つていらつしやいな。だけどね、私お願ひがあるの。聽いて下すつて、たつた一つなの。」

都は、さすがに緊張した顔になつて、姉の顔を、ぢつと見詰めてゐた。

「怒つたの。怒つてはいけないわ、私、あなたに惡いことなんか言はないことよ。だから、聽いて下さいね。たつた一度でいゝから姉だと思つてね。私、一生に今一度でいゝと思ふから、姉だと思つてね、ほゝゝゝゝ。」

瞳は、うつかり涙が出さうになつたので、自分の氣持を換へるために、強ひて笑つた。

「まあ、隨分前置きが長いのね。私、いつだつて、お姉様をお姉様だと思つてゐてよ。私思はなかつたことがあつて？」

「怒つちやいけないわ。少しは、氣に觸ることかも知れないけれども、きつと貴女にいゝことだと思ふの。」

都は、焦だゝしさうに膝を動かした。

「何に。さあ、早く言つて頂戴な。」

「さう。聽いて下さるの。あのね、私あなたの邪魔をするんぢやないのよ。けれども、あなたが今日堀田様と一緒に、帝劇へいらつしやることを、私、爛子ちやんから聞いたの。」

「それが、何うしたと言ふの。」都は分つてゐたと云ふやうに、早くも姉に敵意を閃かした。

瞳は、子爵の名前を都の前で、口に出したと云ふこと丈で、もう顏が赤くなつた。が、こゝで怯んではならないと勇氣を出した。

「いけないことよ。そんなに初めから怒つちや、私あなたの思つてゐるやうなことを、お願ひするんぢやないことよ。惡く取つては困るわ、あのね。」と言ふと、瞳は急に調子を換へて、都の顏を見つめた。

「あなた、男の方つて、どこまでも信用していゝと思ふてゐるの？」

都は、一寸躊躇したが直ぐ、

「いゝえ。お姉様は？」と、きつぱり訊き返した。

「私、さうは思はないの。そりや、菅さんのやうに、氣心まで知つてゐりや、どんなに信用しても、いゝけれど、交際の淺い方は、やつぱり心を許してはいけないと思ふの。」

都は、つゝかゝるやうに、姉に言つた。

「それが何うしたと仰しやるの？　私、菅さんのやうな方、信用は出來るかも知れぬけれども、頼もしくはないわ。」

「あなたは、そんな風に思つてゐるの。」

「えゝ。」

「さう、ぢやそれはさうとして。」

瞳が、次の言葉に移らうとするのを遮ぎつて、都は逆に言つた。

「お姉様の、仰しやることは、廻りくどいのね。何うして、堀田さんは油斷が出來ないから、交際ふなとのつけから言つて下さらないの。」

と言ひながら、都はぷいと立ち上つて、今にも出て行きさうにした。が、今都に出て行かれては、今までの自分の氣苦勞が、たゞ子爵と妹との戀を邪魔するためだつたと思はれさうなのが、いかにも口惜しいので、瞳も少しカッとした胸を制して言つた。

「都さん、もう一寸聞いて下さい。私、そんなことを言つてゐるのぢやないわ。堀田さんと交際つては惡いなどゝ、そんな事言ひはしないわ。私の言ふことを、しまひまで聞いて頂戴な。」

瞳は口惜しさのために、聲を曇らせながら言つた。

都は、今にも出て行きたさうに、そは〳〵して姉を見下してゐたが、その中にまた柱に背をもたせて坐り出した。彼女は、姉の顔を見たくないらしく、窓の外に眼をやつてゐた。

「私、男の方と云ふものは、ある程度以上に、信用してはいけないと思ふの。」

都は、ムッとして、口を少しとがらせるやうにして言つた。

「男の方なんて、抽象的なことを言はないで、堀田さんと、ハッキリ言つて下さいね。でないと話が廻りくどくなるのですもの。」

妹からの挑戦で、姉も切尖を現はさずにはゐられなかつた。

「そんなに、あなたが言ふのなら、堀田さんのことにしてもいゝわ。」

瞳のやさしい眼も、一脈の殺氣を帶びた。

「つまり、堀田さんは、悪い方だと仰しやるのね、お姉様が、交際つてゐる時はいゝ方で、私がお交際しだすと悪い方になるの。」

都の言葉は、毒を含んでゐた。

「都さんは、なぜ私の言ふことを悪く取るの。私は、堀田さんは、悪い方だから、交際つてはいけないのなど言ふのぢやないわ。たゞ、堀田さんばかりでなく男の方と云ふものは、……いやさう云ふよりも、私達が、男の方と交際つてゆく時には、どんなに親しくなつても、踏み越してはいけない最後の一線があると思ふの。どんなことがあつても、踏み越してはならない最後の一線があると思ふの。あなたが、それをさへ氣にかけてさへゐて下されば、私言ふことはないわ。」

瞳は、自分自身の感情に堪へかねて、涙ぐんでゐた。

「ぢや、つまりお姉様のおつしやることは、女子教育家などが言つてゐることゝ同じね。つまり、處女時代の貞操を尊重せよと云ふことね。ありがたう、お姉様のお言葉をありがたく聽いて置くわ。でも、私の考へは少し違つてよ。私、本當に愛する人が出來て、またその人が私を、本當に愛してゐてくれるのなら、私凡てを捧げるつもりよ。私、お姉様にそれ丈は言つて置きたいわ。」

都の顔も、さすがに蒼白になつてゐた。

「本當に愛してくれるつて、あなた本當に愛してゐるか、ウソに愛してゐるかの區別が判つて？」

都は、カッとしたらしかつた。

「その位なこと、私にだつて判るわ。」

「さう。たゞ今が、あなたの生涯での幸不幸の岐れ路だから、お父様もゐらつしやらないことだから私が默つてゐられないと思つたの。」

瞳は、さびしい氣がして、口を閉ぢた。姉妹の間に、心持の割目がだん〳〵大きくなるのが、淋しくて堪らなかつた。

「さう。でも、私のことは私に委して置いて下さいな。自分で墓穴を堀るか、自分で殿堂を築くか。何らにしたつて、自分でしたことは、氣持がいゝわ。私、問題が重大なればなるほど、人の指圖を受けたくないの。」

小さい時から、我儘で勝氣な都だつた。姉の力でも、今は何うすることも出來ないのだ。二人の間

に横はる人格の相違、氣質の相違、おぼろげながらも、貞操觀人生觀の相違を何うすることも出來ないのだ。妹は、妹の思ふまゝに、彼女の道を辿らして、地獄へなり、極樂なりへ行かせる外はないのだ。

「ぢや、お姉様。私一寸行つて來るわ。」

姉が默つてしまふと、都は逃るゝやうに部屋を出て行つた。

結局は、自分の心持が妹に通じないで、たゞ戀の邪魔をしてゐることに、結果としてはなつたかと思ふと、瞳は淋しくてならなかつた。感情の動くまゝに、戀愛の白馬に、鞭をあげて、自由に華麗に、薔薇の道を走つてゆく妹の姿、あれが本當の人生ではないかしら。瞳は、餘りの淋しさに、そんな惑ひさへ起らないではなかつた。が、理智の灯を涙にぬらせながら、なほ燈しつゞけて自分の正しいと信ずる彼方へ、いばらの道を踏み分けて辿つて行くことが、無意味なことではない。瞳は、さう思ひ直して、くづ折れがちな自分の心を惹き起した。

一大事

姉から思ひがけない注意を受けた都は、愛人と觀劇の一夕を過す樂しい豫感を、滅茶苦茶にされたので、ムシヤクシヤしてゐた。嫉妬だ、姉さんのやうなあんな淑やかな人でも、やつぱり嫉妬はあるのだ。だが、姉さんが臆病で、越せなかつた最後の一線を、私が越しさうだからと云つて彼是言ふわけはない。私には、私の覺悟があるのだ。だが堀田さんが信用が置けないと云ふのは何う云ふ意だら

う。堀田さんが、姉さんに何かしようとしたのかしら、堀田さんは本當に姉さんを愛してゐるのだ。姉さんが、堀田さんの思ふ通りにならないので、その代りとして、單に代りと云ふ丈の意味で私を愛してゐるのかしら。さう思ふと、都の胸にムラ〳〵とした嫉妬の炎が燃える。代りぢやつまらない。堀田さんの心を、訊いて見なければならない。

都は、姉に對する憤怒や嫉妬などで、ヂリ〳〵しながら、せはしなく着換をしてゐた。母の物であつたのをせびつて貰つた白上布に、綴れの一重帶をしめた姿は、華美な裡にも、粹な所があつて、狹斜の巷にゐた頃の母の姿を思ひ出させるやうな所があつた。姿見に映つた自分の姿の美しさに、都は少し慰められ、やゝ落着いた氣持になり、本邸から自動車が來たら、迎ひに來ると云ふ堀田の姿を待つてゐた。

と、突如けたゝましく電話の鈴が鳴つた。電話を移すのに手間が懸つて、この頃やつと取付になつたばかりなので鈴がなるのが、家が狹いせゐか本郷の家よりも、けたゝましく聞かれるのであつた。

爛子が、直ぐ受話機を取り上げた。

「はいはい、どなた！　おや湖舟さんなの。まあこの頃は、ちつとも來て下さらないのね。えゝ何ですつて！……一大事！　まあ、かついぢやいけませんよ。貴方の一大事なんて、知れてゐるわ。……冗談ぢやない、眞面目ですつて。」

最初は冗談半分に、受答をしてゐた爛子の答が、だん〳〵相手に引き付けられて眞面目になつた。

「本當……まあ……お姉様に、……どちらの！　都姉様に……ゐらつしやるわ……」